岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第311集

岩手県埋蔵文化財発掘調査略報

（平成10年度）

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

岩手県埋蔵文化財発掘調査略報

（平成10年度）

序

岩手県は、埋蔵文化財の宝庫だと言われております。この先人達が遺した貴重な文化遺産を保護し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた責務であります。また一方では、幹線道路網の整備など、社会資本を充実させていくことも行政上の重要な施策であります。このため、埋蔵文化財の保護と地域開発の調和ということも、今日的な課題であります。

こうした見地から、財団法人岩手県文化振興事業団では埋蔵文化財センターを創設以来、岩手県教育委員会文化課による発掘調査事業の調整と指導のもとに、道路建設などに関連して止むを得ず消滅してゆく遺跡についての発掘調査を実施し、発掘調査報告書として記録保存する措置をとってまいりました。今年度は、県内８市６町４村にわたる46遺跡の調査を実施しました。

調査した遺跡の時代は縄文時代から近世までにわたっております。今年度の調査で注目されたものには、水沢市中半入遺跡で検出した水田跡と推測される遺構があります。ここからは火山灰に被覆された足跡や耕作痕状のくぼみが多数見つかり、当時の人々のくらしを復元する上で貴重な役割をはたすことと思われます。

この発掘調査略報は、調査報告書の発刊に先立って、今年度に調査された遺跡の調査結果の概要を収録したものであります。本書が研究者のみならず、多くの方々に活用され、埋蔵文化財へのご理解を一層深めていただく一助になれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査を進めるにあたり、ご援助とご協力を賜りました委託者をはじめ、地元教育委員会やご教示を賜りました関係各位に対し、衷心より感謝を申し上げます。

平成11年３月

財団法人　岩手県文化振興事業団

理事長　船　越　昭　治

目　次

平成10年度の調査結果について……2

Ⅰ．建設省関係

（1）志羅山遺跡第74次調査（平泉町）……5
（2）惣前町遺跡（水沢市）……9
（3）石持Ⅰ遺跡（花巻市）……13
（4）佐野遺跡第1次調査（平泉町）……17
（5）三日町Ⅰ遺跡第2次調査（平泉町）……19
（6）日の出町Ⅰ遺跡（宮古市）……23
（7）山王山遺跡第9次調査（盛岡市）……25

Ⅱ．公団・公社関係

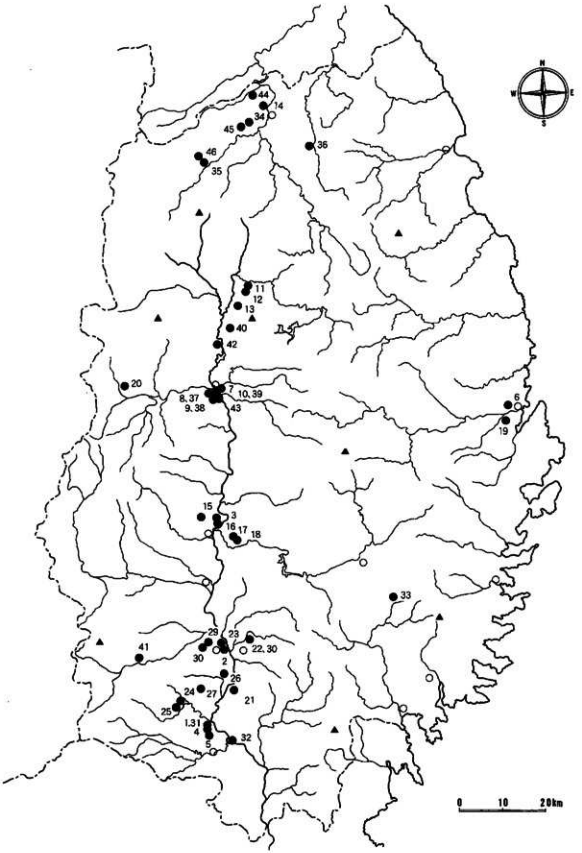
（8）小幅遺跡第9次調査（盛岡市）……31
（9）向中野館跡第4次調査（盛岡市）……33
（10）台太郎遺跡第19次調査（盛岡市）……37
（11）秋浦Ⅰ遺跡（岩手町）……41
（12）秋浦Ⅱ遺跡（岩手町）……45
（13）芦名沢Ⅱ遺跡（玉山村）……49
（14）米沢遺跡（二戸市）……51
（15）狼沢Ⅱ遺跡（花巻市）……55
（16）似内遺跡（花巻市）……59
（17）高松寺遺跡（花巻市）……63
（18）上駒板遺跡（花巻市）……67
（19）島田Ⅱ遺跡（宮古市）……69

Ⅲ．岩手県・市関係

（20）安栖野遺跡（釜石町）……77
（21）西館跡（前沢町）……79
（22）下醍醐遺跡（江刺市）……83
（23）佐野原遺跡（水沢市）……85
（24）上寺田遺跡（衣川村）……87
（25）本巻遺跡（衣川村）……91
（26）水ノ口遺跡（前沢町）……93
（27）休場遺跡（胆沢町）……97
（28）中半入遺跡（水沢市）……99
（29）蝦夷塚古墳（胆沢町）……103
（30）下醍醐遺跡（江刺市）……105
（31）志羅山遺跡73次調査（平泉町）……107
（32）清水遺跡（一関市）……111
（33）篠館跡（遠野市）……115
（34）大向上平遺跡（二戸市）……119
（35）長袖Ⅱ遺跡（浄法寺町）……123
（36）南田Ⅰ遺跡（九戸村）……125
（37）小幅遺跡第8次調査（盛岡市）……129
（38）向中野館跡第3次調査（盛岡市）……131
（39）台太郎遺跡第18次調査（盛岡市）……135

Ⅳ．本報告

（40）大森Ⅳ遺跡（玉山村）……141
（41）穴山堀遺跡（胆沢町）……149
（42）葉の木沢Ⅲ遺跡（滝沢村）……163
（43）飯岡才川遺跡第2次調査（盛岡市）……173
（44）濱谷地遺跡（二戸市）……181
（45）川袋遺跡（二戸市）……189
（46）袖ノ沢Ⅴ遺跡（浄法寺町）……201



平成10年度調査遺跡位置

平成10年度の調査結果について

平成10年度の調査は、当初46遺跡、165,532㎡でスタートしたが、最終的には46遺跡、160,322㎡を調査して終了した。面積の減は委託者の計画変更、調査未了による次年度繰越等様々な理由が原因である。当センターの調査遺跡数は平均すると年間30件程度で推移してきたが、昨年から大幅な遺跡増になっている。遺跡数増加の主な原因は、東北新幹線盛岡・八戸間建設、ウルグアイラウンド関連農業基盤整備、盛岡市盛南開発事業などが本格化したためである。

調査は８市６町４村に及び、検出された遺構の概数は縄文時代住居跡110棟、陥し穴213基、土坑約800基、古代竪穴住居跡383棟、中世竪穴建物跡２棟等である。遺物の概数は、縄文・弥生土器大コンテナ約740箱、土師器・須恵器140箱、石器約45箱の数にのぼっている。

特徴的な遺跡を紹介すると、縄文時代では岩手町秋浦Ⅰ（11）・Ⅱ遺跡（12）、盛岡市山王山遺跡（７）で大規模な集落跡を調査し、３遺跡で91棟の住居跡が検出されており、全遺跡の80％以上を３遺跡で占めている。フラスコ型ピットについても同様である。一関市清水遺跡（32）では良好な遺物包含層を調査し、後期の遺物を中心にコンテナ470箱の土器が出土した。この数は縄文土器全体の半数以上を占めている。住居跡110棟は昨年の半数以下である。

弥生時代と明瞭に判断できる遺構は今年度検出されなかったが、５遺跡で他の遺物に混じって少量の土器が発見された。(江刺市下醍醐、水沢市中半入、遠野篠館跡、二戸市川袋、浄法寺町袖ノ沢Ⅴ遺跡）弥生時代の遺構が確認されなかったのは、近年の調査では非常に珍しいことである。

古墳時代で特筆すべきは、水沢市中半入遺跡（28）の集落跡の調査である。ほ場整備に関する本調査と範囲確認調査のため、全ての遺構を精査していないが、５～６世紀前半と推定される住居跡が47棟確認された。器台、滑石製紡錘車、石製模造品のような鼓期に特有の遺物の他に、黒曜石製の拇指状円形掻器など北方系の遺物も発見されている。本州最北に位置する前方後円墳、角塚古墳に隣接しており、古墳造営に関する重要な資料を提示することとなった。

奈良・平安時代では盛岡市台太郎遺跡（10)(39）で２年間の調査で170棟以上の住居跡が検出された。調査面積は遺跡のほんの一部にすぎず、隣接する志波城跡との関連性を明らかにすることが、今後の課題の一つである。花巻市似内遺跡（16）では一辺９ｍ前後の大型住居が11棟中４棟を占めている。須恵器の優品もあり、次年度の調査が注目される遺跡である。今年度検出された383棟の住居跡は昨年の約２倍の数値である。この他に、中半入遺跡では平安時代の十和田a降下火山灰の上下から大規模な２枚の水田跡が確認された。

奥州藤原氏関連遺跡は昭和63年以降調査を実施しているが、志羅山遺跡（１)(31）で当時の道路・塀、井戸、大規模建物跡などが検出された。同町三日町Ⅰ遺跡（５）で、同時代の庶民階級の遺構・遺物の発見が期待されたが、10世紀代の住居跡が確認されたのみであった。

中世では、遠野市篠館跡（33)、前沢町西館跡（21)、盛岡市向中野館跡（９)(38)、同台太郎遺跡などから遺構・遺物が検出されたが、特に篠館跡はほぼ館跡の原形を留めており、16世紀後半の堀跡、土塁が多数確認された。次年度は主体部周辺を継続調査する予定である。

以上、今年度の調査の概略を記したが、元より本略報は調査の概要をまとめたものであり、詳細については次年度以降刊行される本報告書を参考にしていただければ幸いである。なお、今年度も遺構・遺物の少ない遺跡もあり、これらの７遺跡についてはこの略報をもって本報告とする。　　（調査課長　小田野哲憲）

Ⅰ．建設省関係

(1) 志羅山遺跡第74次調査

所在地	平泉町平泉字志羅山30－４ほか
委託者	建設省東北地方建設局岩手工事事務所
事業名	国道４号太田川橋梁改築
発掘調査期間	平成10年５月１日～７月31日
調査対象面積	1,001㎡
発掘調査面積	1,001㎡
遺跡番号・略号	ＮＥ76－1088・ＳＹ98－74
調査担当者	羽柴直人・朝倉雄大
協力機関	平泉町教育委員会

遺跡位置　　1：50,000 一関

1．遺跡の立地

志羅山遺跡は平泉市街の南部に位置する。今回の74次調査区は国道４号線の西側に接する地点で、調査区の南側を流れる太田川に向かって緩やかに傾斜する地形である。調査区は宅地として使用されており、その建物基礎による破壊が著しい状態であった。

2．調査の概要

志羅山遺跡はこれまでに、平泉町教育委員会や埋蔵文化財センターにより調査がおこなわれており、今回の調査はその第74次にあたる。今回の第74次調査の原因は一関逆水地事業の一環である太田川築堤・太田川橋梁改築工事で、この事業に関わる志羅山遺跡の発掘調査はこれまでに４次にわたっておこなわれており、今回の調査は５次目である。

今回の調査で検出された遺構は土坑37基、井戸５基、道路跡１条、溝15条、かまど状遺構１基、堀２条、柱穴277基、掘立柱建物27棟、柱列２条である。

＜土坑＞　用途がわからないものがほとんどであるが、ＳＫ12は平泉遺跡群で「トイレ状土坑」と呼ばれるものである。この土坑の埋土は種子などが混じる有機質分が多い土で、「チュウ木」も出土している。

＜井戸＞　４基が12世紀、１基が12世紀より新しい時代の所属と考えらる。いずれも井戸枠を持たない素掘りの井戸である。12世紀の井戸と考えられるＳＥ３からは復元可能な常滑産陶器甕、黒漆塗りの木製品の一部と考えられるものが出土している。

＜道路跡＞　溝のＳＤ４・５とＳＤ６が道路の側溝で、それに挟まれた部分が道路跡と考えられる。この道路は志羅山遺跡第14次、第46次、第66次調査でも検出されており、合計すると全長約190mほどになる。道路側溝は部分的に蛇行するが、道路全体としてはほぼ南北の方位に伸びていると理解できる。

＜溝＞　ＳＤ３とＳＤ９は、道路の東側の側溝から直角の角度で東西方向に伸びており、道路と同時存在の溝と考えられる。このＳＤ３とＳＤ９は一対で、屋敷を区画する溝の可能性がある。

＜かまど状土坑＞　皿状のくぼみの壁面が焼けた遺構で、12世紀に所属すると考えられる。用途は不明である。

＜塀＞　道路の西側の側溝であるＳＤ６と平行する形で、板塀の跡が２条検出されている。長さ約15m、幅約１cm程の板を、幅約10cmの溝状の掘方に打ち込み、その後に土を埋めた構造である。２条の塀は非常に近接しており、同時に存在していたのではなく、作り替えられたものと考えられる。

＜掘立柱建物＞　調査区域外に伸びており、全体のプランを検出できないが、検出できた部分から、梁間２間、桁行３間の身舎に、１間ずつの廂が４面についた「三間四面」の建物が存在すると考えられる。「三間四面」の建物は12世紀平泉の屋敷の中では主殿的な建物と考えられる。他に廂がつかない建物も検出されている。建物の重複具合から12世紀以降の建物の存在も考えられるがその時期特定は難しい。

＜柱列＞　２条検出されており。柵、塀といった用途と考えられる。道路側溝とほぼ平行な配置であり、道路と同時存在と考えられる。

＜出土遺物＞　かわらけ（手づくね、ロクロ）、国産陶器（常滑産、渥美産、須恵器系）、中国産陶磁器（白磁、青磁、陶器）、漆塗り木製品、チュウ木がある。いずれも12世紀の遺物と考えられる。黒漆塗りの木製品は何らかの製品の破片であるが、何の一部なのか判断が難しい。可能性としては鞍の「後輪」の下端の部分と考えられるが、湾曲の具合が少なく、まだ検討の余地が大きい。

３．まとめ

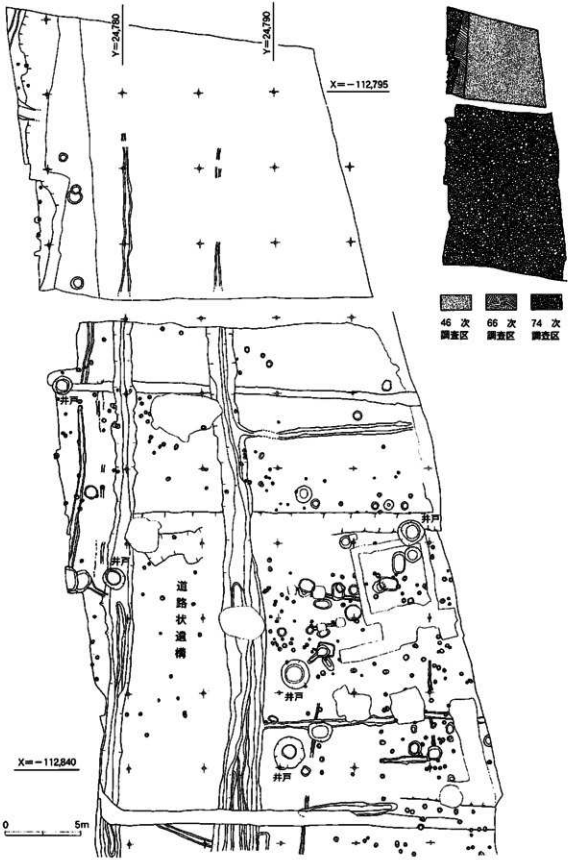
今回の調査でも検出された道路跡は、以前に調査がおこなわれた志羅山遺跡14次、46次、66次調査でも検出された道路跡と連続するものである。即ち、南側では14次調査調査区の東西に走る大規模な溝の北縁から道路が始り、ほぼ南北に正方位に伸び、本調査区を通り、さらに北側に伸び、北端は66次調査で検出された東西に走る大規模な溝の南縁にぶつかって終わっている。この間の距離は約190mである。この190mという長さは、人為的に決められた寸法なのか、自然の地形などに規制された結果の長さなのかは今後検討の必要がある。

また南側の14次調査区の東西に走る大規模な溝の南側には道路側溝は伸びていかない。このことは、この道が平泉の町の外とつながっていないことを示していると考えられる。よって12世紀の平泉の町の入り口はこの部分ではないと考えられる。

一方北側ではこの道はいったん66次調査の大規模な溝にぶつかって途切れるが、さらにその北で、再び続く形で道路跡が存在することが確認されている。この道はこれまでの南北正方位の角度とは異なり11～13°ほど東側にずれた方位になっている。

12世紀平泉の基軸には、毛越寺、観自在王院の軸のようにほぼ南北正方位と、無量光院、白山社のように約17°東にずれる角度があることが、先学により指摘されている。まさに今回の南北正方位の道から、約13°の角度（17°の角度に近いと考える）の道に変わるこの部分は、毛越寺方位と無量光院方位の結接点の一つであると指摘できる。

これらの成果は今後の12世紀平泉の都市構造を考える上で、重要な資料になりうるものである。



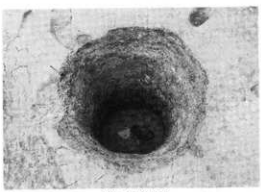
志羅山遺跡第74次調査区遺構配置図

調査区遠景(南→)

調査区全景(南→)

掘立柱建物跡(SB1)

掘立柱建物跡(SB2)



井戸跡(SE3)

井戸跡(SE4)

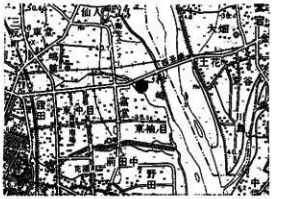
道路状遺構(南→)

板塀跡(南→)

志羅山遺跡74次調査検出遺構

(2) 惣前町遺跡

所在地	水沢市佐倉河字惣前町15－1ほか
委託者	建設省東北地方建設局岩手工事事務所
事業名	一般国道4号水沢東バイパス改築工事
発掘調査期間	平成10年6月30日～9月1日
調査対象面積	2,700㎡
発掘調査面積	2,700㎡
遺跡番号・略号	NE17－1026・SZT98
調査担当者	木戸口俊子・佐々木志麻
協力機関	水沢市教育委員会



遺跡位置　1：50,000 水沢

1．遺跡の立地

惣前町遺跡は、東日本旅客鉄道東北本線水沢駅から北東に約1km、四丑橋より西0.2kmに位置し、県道玉里・水沢線と北上川に向かって東流する境田堰とに挟まれた北上川西岸の沖積地の微高地上に立地している。遺跡の標高は約38mである。

調査区の現況は、北側の約半分は住宅地と畑地、南側については水田として利用されていた。調査区周辺もほとんど水田となっている。本遺跡から南0.2km先には平成 8年度に水沢市教育委員会によって調査された東袖丿目遺跡があり、縄文時代晩期及び弥生時代後期の遺物包含層や住居跡、中世～近世の掘立柱建物跡等が検出されている。

2．調査の概要

調査区の北側については旧住宅のコンクリート基礎が広くまた深く入り込み攪乱が著しい。また、南側の水田であったところは表土からわずか20cm下で遺構の検出面であり、耕作により大部分攪乱を受けている。畑地として利用されていた部分もいつの時代かはっきりはしないが、ごみ等の捨て場として10ケ所ほど円形に掘り下げている。調査区全体で明確に検出できた部分は少ない。

検出された遺構は、縄文時代終末～弥生時代前半と思われる土坑が15基、平安時代と見られる竪穴住居跡が1棟、竪穴状遺構が1棟、溝が3条、柱穴状ピット14基である。遺物は縄文時代終末期～弥生時代前半の土器と平安時代の土師器・須恵器を合わせて大コンテナで約1.5箱、石器は55点ほど出土している。

＜土坑＞ 15基検出されている。強いて言えば溝状に近い不整形の土坑が多い。規模は最大のもので長軸が5m40cm、短軸が1m80cm、深さが45cm前後である。土坑から出土している遺物は、土師器・須恵器は少なく遺構の埋土の下位面からは縄文時代終末～弥生時代前半と見られる土器が出土している。このため多くの土坑の時期は縄文時代終末～弥生時代前半の可能性が高い。これらの時期の遺物がもっとも多く出土した土坑は1号土坑である。

＜竪穴住居跡＞ 調査区南西部の境田堰近くに1棟検出している。一辺が3.8mの方形で壁高は15cm前後である。北側壁の東側半ば程から北東にかけてと西側壁～南側壁3分1程度までに溝が巡る。東壁の中央より

やや南寄りにカマドをもつ。焼土の厚さはあまりなく、ソデは左側部分のみで４cm程の高まりとして認められるだけである。煙道は掘り込みで作られているが、残りが良くない。カマドは作り替えがなされたものらしく、旧煙道と煙出し部分および燃焼部と見られる焼土が現カマド位置より40cm南側に残っている。柱穴状ピットは数基見られるが主柱穴とは言い難い。遺物は遺構全体から破片で出土しているが、溝が巡る南西部と北東部からの出土が目立った。ロクロで作られた土師器の坏・甕や須恵器の坏・壺類が出土していることから９世紀後半頃のものと思われる。

<竪穴状遺構>　竪穴住居跡の東側から１棟検出している。南北にやや長い隅丸方形で規模は3.4m×2.5mである。東壁がもっともよく残っており、床面まで16cmである。西壁は撹乱のためほとんど残っていない。柱穴状ピットは検出していない。

<溝>　３条検出されている。いずれも大変浅く深さは４cm～10cm程度である。２号溝は土坑を切って作られており、土坑よりも新しいと思われる。検出できた規模は全長7.5m、幅50cmで、他の２条も似たような規模で検出されている。

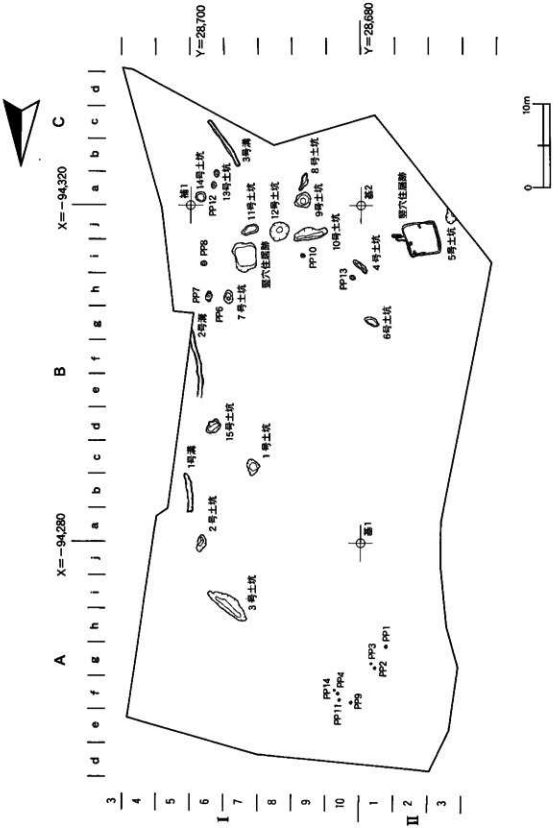
<柱穴状ピット>　全部で14基検出されている。直径35cm前後、深さは15cm～30cmほどである。建物跡になるようなつながりは見られなかった。遺物は埋土上位からがほとんどで土師器片が数片含まれる程度である。

<出土遺物>　土器は大コンテナで1.5箱、石器は55点出土している。平安時代の土器は全体の４割程度を占め、それ以外の土器は６割程の出土である。縄文時代終末（晩期後半）～弥生時代前半の土器が多いが１号土坑からの出土以外は小破片ばかりである。平安時代の土器は竪穴住居跡からの出土がもっとも多く、それ以外はやはり小破片のものである。

石器は55点ほど出土している。内訳は石鏃が６点、石錐が２点、磨石が５点、凹石が４点、石皿１点、石斧１点、その他16点である。この遺跡では礫石器がやや多く出土している。

３．まとめ

今回の調査では、縄文時代終末～弥生時代前半の時期と見られる土坑や平安時代の住居跡が見つかったことにより、大きく二時期においてこの地が生活の場として利用されていたことがわかった。撹乱の影響もあり、住居跡は１棟しか検出できなかったが周辺の地域にも集落が広がっている可能性が高い。また、土坑については溝状のものが多く用途等について考えにくいがこれから検討していきたい。


A
B
C
X=−94,280
X=−94,320
Y=28,700
Y=28,680
a
b
c
d
e
f
g
h
i
j
3
4
5
6
7
8
9
10
1
2
3
I
II
0
10m
1号溝
2号溝
3号溝
1号土坑
2号土坑
3号土坑
4号土坑
5号土坑
6号土坑
7号土坑
8号土坑
9号土坑
10号土坑
11号土坑
12号土坑
13号土坑
14号土坑
15号土坑
竪穴住居跡
竪穴住居跡
竪穴住居跡
基1
基2
基3
PP1
PP2
PP3
PP4
PP5
PP6
PP7
PP8
PP9
PP10
PP11
PP12
PP13
PP14

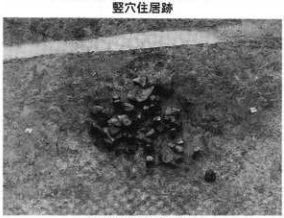
惣前町遺跡遺構配置図

遺跡遠景

遺跡近景

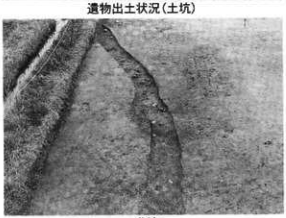
竪穴住居跡

遺物出土状況（竪穴住居）



遺物出土状況（土坑）

土坑完掘



溝跡

調査区周辺

惣前町遺跡検出遺構

(3) 石持Ⅰ遺跡

所　在　地	花巻市東宮野目10－55ほか
委　託　者	建設省東北地方建設局岩手工事事務所
事　業　名	一般国道４号花巻東バイパス改築工事
発掘調査期間	平成10年４月13日～平成10年10月12日
調査対象面積	15,100㎡
発掘調査面積	8,000㎡
遺跡番号・略号	ME16－2117・ＩＭＩ－98
調査担当者	早坂悟・中野教夫・菊地栄蓊
協力機関	花巻市教育委員会

遺跡位置　　1：50,000 花巻

1．遺跡の立地

石持Ⅰ遺跡は、ＪＲ東日本東北本線花巻空港駅南東約２km、国道４号線東宮野目交差点のすぐ東側に位置し、北上川河谷台地の砂礫段丘に立地している。調査区西側は国道を挟んで宅地が広がり、国道沿いを南北の方向に工場・店舗が立ち並んでいる。また、東側は水田地帯であり、東方約２km先に北上川が流れている。遺跡の標高は78m前後で、標高差はほとんどなく、ほぼ平坦である。調査前の状況は、宅地（庭園を含む）及び畑地である。

2．調査の概要

今年度の調査により検出された遺構は、陥し穴状遺構165基、平安時代の竪穴住居跡19棟、複式炉１基、掘立柱建物跡１棟、土坑51基、新規と思われる溝跡２条、柱穴状小土坑232基である。調査区内には、宅地の基礎工事、庭園内の植林、畑地の耕作等の理由で、部分的に削平を受けている地区がかなりある。

＜陥し穴状遺構＞　調査区全体から165基検出した。平面形は、溝状を呈するもの（Ⅰ型）が139基、楕円形または長方形を呈するもの（Ⅱ型）が26基である。

Ⅰ型の規模は、長軸径が1.8m～4.5m前後を、短軸径は0.2m～0.4m前後、深さ0.4m～0.9m前後を測る。この中には、２～３基１組で軸方向をほぼ同じにしているものが、30組前後ある。

また、この形状の陥し穴状遺構３基と縄文時代の複式炉とが切り合っており、陥し穴が埋まった後に複式炉が構築された事実を示していた。

Ⅱ型の規模は、長軸径が1.2m～1.5m前後、短軸径が0.3m～0.6m、深さ0.4m～0.7mを測る。底部に、逆茂木痕と思われる掘り込みがあるものが３基ある。

＜竪穴住居跡＞　19棟の竪穴住居跡は、２棟が重複をし、その他は重複を避けるような形で検出された。出土した遺物から９世紀後半から10世紀代に存在していたと考えられる。

平面形は、隅丸方形５棟、隅丸長方形７棟、隅丸台形２棟、部分的に撹乱を受け形状を把握できないもの５棟である。規模は、１辺の長さが２m～３m前後のものが７棟、４～６mのものが10棟、その他不明なものが２棟である。おおよその床面積は、最小のもので約８㎡、最大のもので約24㎡であった。

カマドが検出された遺構は11棟で、すべて一棟の住居に１基のみ有していた。カマドの位置は南壁に作られたものが１棟、東壁に作られたものが10棟である。東壁に作られたカマドの方向は、全て東南東である。また、その位置は北東隅寄りにあるものが５棟、南東隅寄りにあるものが５棟で、前者は調査区北側に、後者は南側に存在している。これらのカマドの位置の違いは、集落内の住居内の時期差および当時の集落の様子を知る上での一つの手がかりになると思われる。煙道部は、その作りが確認できたものが５棟で、それらは全て刳り貫き式である。煙道部から煙出部の形態は様々あるが、一度立ち上がりその後水平になっているものが最も多く、それらは小ピットを伴っている。カマド袖については、芯材として礫を使用しているものが数棟あったが、その他はほとんど粘土質土にシルト質土を貼りけたものであった。

貯蔵穴と思われる土坑を有する住居跡は10棟16基で、カマド右脇に位置するもの３棟、左側に位置するもの２棟、右側に２基有するもの１棟、左右両側に１基づつ計２基有するもの３棟、カマド右側に２基左側に１基有するものが１棟である。

柱穴は、４本柱のものが３棟、４本柱と考えられるがうち数本しか検出されなかったものが２棟である。

その他の特徴としては、立て替え前に使用されていた袖部の一部と燃焼部焼土が存在していた住居跡が１棟あることなどが挙げられる。

<複式炉>　複式炉は、５本の柱穴を伴い、炉内から縄文時代中期中葉に比定される土器が出土している。住居跡のほとんどは、その後に削平されたと思われ、埋土らしきシルト質土が周辺に点在していた。なお、前述したように、この複式炉は溝状の陥し穴と重複している。

<掘立柱建物跡>　規模は２間×３間で、平面形は、長方形または正方形であり中央部に円形の掘り込みがみられた。棟方向は北北東～南南西を示している。来年度調査区との境界付近に位置していたため、その結果により、規模が広がる可能性がある。遺構の時期は、埋土上位から土師器片が出土してはいるが、部分的な撹乱の可能性もあり時期を決定する確たるものとは言い難い。

<土坑>　調査区全域から51基検出された。平面形は円形・楕円形・長方形等である。土師器が出土した土坑は主に、竪穴住居周辺に位置し、その中には径2.85mの大型のものや、土坑の壁際に焼土塊が円形を呈してたものがあった。他の土坑は、出土遺物がなく時期不明のものが多い。

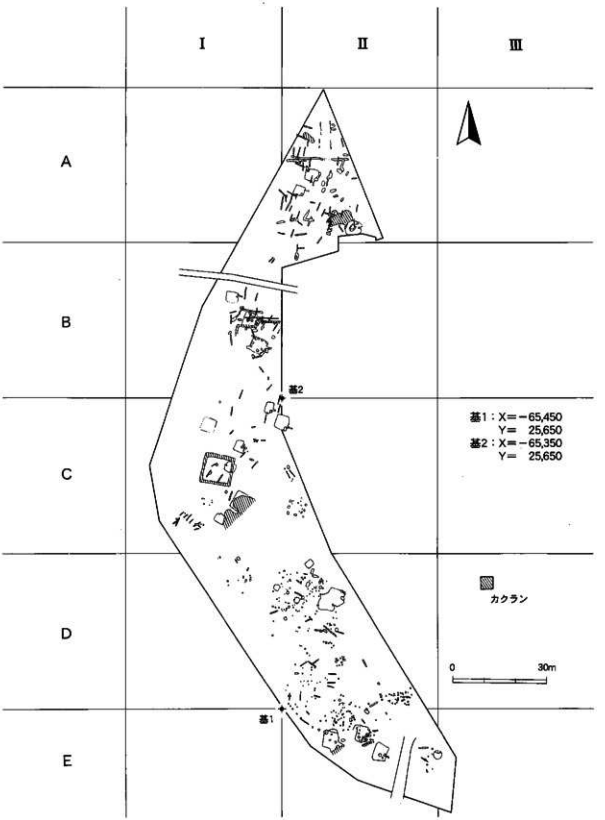
<柱穴状小土坑>　232基検出されている。形状は円形・楕円形を呈し、調査区南側に主に集中している。配列が不規則なものがほとんどで、用途及び時期は不明である。

<出土遺物>　コンテナ９箱分の土器・土製品、石器・石製品、鉄製品が出土している。土器のうちの９割が平安時代の土師器で、残りが須恵器と縄文土器である。土師器は、坏・甕がほとんどであり、いわゆる赤焼き土器の占める割合が多い。須恵器は、13棟の住居跡から出土しており、器種は坏・甕・大甕である。縄文土器は、中期中葉のものである。土製品は、土錘１点、斧状土製品が２点出土している。

石器類は、砥石が６点、敲石６点、磨石３点、石鏃３点のほか石棒、石皿、などが出土している。鉄製品は、刀子が１点のみである。

３．まとめ

今回の発掘調査の結果、石持Ⅰ遺跡は縄文時代には狩り場として利用され、平安時代（９世紀後半～10世紀）には集落跡が存在していたことが確認された。特に、陥し穴の遺構数から、縄文時代にはこの地が、地形的に動物を捕獲するために都合の良い土地であったことを示している。平安時代の竪穴住居跡については、その形態・出土土器から、集落が存在していた時期を２つに分けることができると考えられる。なお、隣接する来年度予定されている地区の調査が進むにつれて、その全体像がさらに明らかになると思われる。


I
II
III
A
B
C
D
E
基2
基1
基1：X＝－65,450
Y＝ 25,650
基2：X＝－65,350
Y＝ 25,650
カクラン
0
30m

石持Ⅰ遺跡遺構配置図

遺跡全景

平安時代の竪穴住居跡

複式炉

陥し穴状遺構群

底面に石を配した土坑

石持Ⅰ遺跡検出遺構

(4) 佐野（さの）遺跡１次調査

所在地	平泉町平泉字佐野20－１ほか
委託者	建設省東北地方建設局岩手工事事務所
事業名	平泉バイパス
発掘調査期間	平成10年８月１日～10月31日
調査対象面積	1,200㎡
発掘調査面積	1,200㎡
遺跡番号・略号	ＭＥ86－0152・ＳＮ－98
調査担当者	朝倉雄大・羽柴直人
協力機関	平泉町教育委員会

遺跡位置　　1：50,000 一関

１．遺跡の立地

本遺跡は、東日本旅客鉄道平泉駅より南へ約２㎞の国道４号付近に位置し、北上川西岸の河岸段丘上に立地する。遺跡の標高は22～27m、北上川との比高差は約２～７ｍである。調査区の現況は宅地、水田、畑地である。本遺跡の約200m北側に三日町Ｉ遺跡２次調査区が位置する。

２．調査の概要

検出された遺構は、土坑39基、墓壙８基、溝状遺構３条、柱穴列１条、柱穴38基である。

＜土坑＞　調査区全体で39基検出された。特に調査区北側低地部分に集中しており35基検出された。そのうち２基からは土管、パイプが検出され井戸跡であることが判明している。判明した２基をもとに平面形や規模、埋土の様相などからみると、前述の２基を含め24基については井戸跡の可能性が高いと思われる。平面形が把握できた中で最大のものは開口部径300×295cmである。時期は出土遺物がほとんどないため詳細は不明だが近世以降と思われる。その他の北側低地部分に位置する11基についても時期は埋土の様相から近世以降と思われる。また、北側低地以外で検出の土坑４基については、出土遺物がなく時期は不明である。

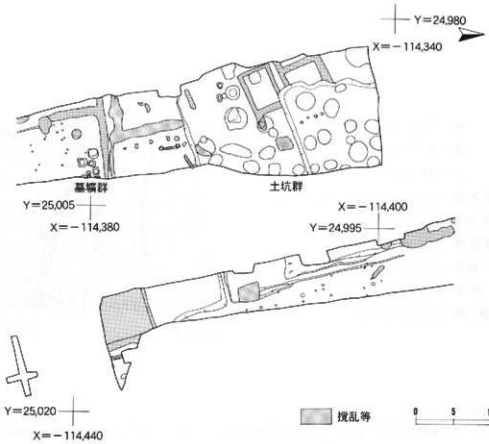
＜墓壙＞　調査区ほぼ中央付近で８基まとまって検出された。遺構が調査区外にかかるため全体形が不明なものも一部あるが、平面形は概ね方形を基調としている。規模は開口部長軸40～128cm、深さ24～73cmである。時期は副葬品から近世に属するものと思われる。

＜溝状遺構＞　調査区南側１条、中央付近２条の計３条検出された。出土遺物がなく時期は不明である。

＜出土遺物＞　墓壙内から銭貨約130枚、土人形４点、煙管４点が出土している。銭貨は主として寛永通寶が出土している他、仙台通寶も出土している。柱穴５基からはかわらけ片が出土している。遺構外からは近世～近代の陶磁器が小コンテナ１箱出土している。

３．まとめ

本遺跡は、近世を中心とした遺跡であることが分かった。12世紀の奥州藤原時代と推測される遺構は検出されなかった。隣接の三日町Ｉ遺跡２次調査結果と併せ、周辺の遺跡との比較・検討を進めていきながら、本遺跡の性格をより明らかにしていきたい。



佐野遺跡Ⅰ次遺構配置図

調査区北側土坑群

土坑（井戸？）

墓壙群

遺物出土状況（墓壙）

佐野遺跡１次検出遺構・出土遺物

(5) 三日町Ⅰ遺跡２次調査

所在地	平泉町平泉字三日町143－１ほか
委託者	建設省東北地方建設局岩手工事事務所
事業名	平泉バイパス
発掘調査期間	平成10年８月１日～10月31日
調査対象面積	1,400㎡
発掘調査面積	1,400㎡
遺跡番号・略号	ＮＥ86－0120・ＭＫＭＩ－98
調査担当者	朝倉雄大・羽柴直人
協力機関	平泉町教育委員会

遺跡位置　　1：50,000 一関

1．遺跡の立地

本遺跡は、東日本旅客鉄道平泉駅より南へ約1.5kmの国道４号沿いに位置し、北上川西岸の河岸段丘上に立地する。遺跡の標高は22～23m、北上川との比高差は約２～３ｍである。調査区の現況は宅地、水田、畑地である。本遺跡の約200m南側に佐野遺跡１次調査区が位置する。

2．調査の概要

調査区東側は戦後の水田造成による削平を広範囲に受けており、調査区西側についても部分的に住宅等による撹乱を受けている。検出した遺構は竪穴住居跡１棟、陥し穴状遺構１基、掘立柱建物跡多数、井戸跡１基、土坑５基、墓壙22基、カマド状遺構１基、柱穴約730基である。

＜竪穴住居跡＞ 調査区西側より１棟検出されている。平面形は隅丸方形を呈し、規模は336×292cmである。削平の進行により壁の残存状況は悪く、壁高は９～10cm程である。カマドは北壁ほぼ中央に位置し、煙道の主軸方向はＮ－39°－Ｅである。時期は出土遺物から９～10世紀に属すると思われる。

＜陥し穴状遺構＞ 調査区西側より竪穴住居跡に重複する形で１基検出されている。平面形は溝状を呈し、規模は開口部長軸径264cm、短軸径40cm、深さ57cmである。長軸方向はＮ－21°－Ｗである。遺物が出土していないため詳細な時期は不明であるが縄文時代と思われる。

＜掘立柱建物跡＞ 柱穴が730基検出されており、多数の建物が存在していたものと思われる。時期の考察を含め、今後さらにプランの検討をしていく必要がある。

＜井戸跡＞ 調査区南側より１基検出されている。平面形は円形を呈する。規模は開口部径118cm、深さは完掘していないため不明である。時期については出土遺物がないため不明である。

＜土坑＞ 調査区中央から西側寄りにかけて５基検出されている。そのうち２基は井戸跡の近くに位置し、形状などから井戸であった可能性もある。遺構の時期については不明である。その他の３基についても詳細な時期は不明である。

＜墓壙＞ 調査区東側より22基検出された。形状は円形状が６基、方形状が10基、長方形状が５基、その他長楕円形状が１基である。規模は円形状墓壙が直径42～90cm、深さ７～60cm、正方形状墓壙は長短軸48

～84cm、深さ9～58cm、長方形状墓壙は長軸98～128cm、短軸54～78cm、深さは12～28cmである。棺材は15基から検出された。遺構の時期は副葬品から近世と思われる。

<カマド状遺構> 調査区西側より１基検出されている。遺構が調査区外にかかるため全体形は不明であるが、検出分の平面形は鍵穴状を呈する。遺構の構造は焚き口部と単室の燃焼室、煙道からなる。検出された開口部の検出長は138cm、それに直交する燃焼室の最大幅は64cm、深さは23cmである。煙道の検出長は12cmである。詳細な時期については不明である。

<出土遺物> 竪穴住居跡から土師器・須恵器、墓壙から寛永通寶を主に銭貨約150枚、煙管約15点、柄鏡１点、和鏡１点、陶器丸碗１点、木櫛１点などが出土している。遺構外からは土師器・須恵器の他、近世～近代の陶磁器などが出土している。

３．まとめ

本遺跡は、断続的にではあるが縄文時代から近世にかけての遺跡であることが分かった。今後は掘立柱建物跡の検討を含め、周辺の遺跡との関連を踏まえながら分析を進めることにより本遺跡の性格をさらに明らかにしていきたい。

三日町Ⅰ遺跡２次遺構配置図

調査区全景

竪穴住居跡

井戸跡

墓壙群

遺物出土状況（墓壙）

三日町Ⅰ遺跡２次検出遺構・出土遺物

(6) 日の出町（ひのでちょういち）Ⅰ遺跡

所在地	宮古市日の出町56番４ほか
委託者	建設省東北地方建設局三陸国道工事事務所
事業名	職員宿舎建設
発掘調査期間	平成10年４月８日～５月22日
調査対象面積	1,300㎡
発掘調査面積	1,300㎡
遺跡番号・略号	ＬＧ24－2003・ＨＤＭＩ－98
調査担当者	浜田　宏・玉山健一
協力機関	宮古市教育委員会

遺跡位置　　1：50,000 宮古

１．遺跡の立地

日の出町Ⅰ遺跡は、㈱東日本旅客鉄道宮古駅の北北西約3.5㎞に位置し、宮古湾に延びる丘陵裾の東向きの緩斜面に立地している。調査区の北側は、盛り土により建設された国道45号線によって区画される。遺跡の標高は96～102ｍで、国道45号線よりも３～７ｍ低い。調査前の状況は雑木の生い茂る荒地で、調査区東端の低い部分は、国道建設により抜けの悪くなった水が貯まる沼地となっていた。

２．調査の概要

現在の国道45号線は、古い沢を埋め立ててつくられており、調査区北側ではその旧沢跡の落ち際が確認され、主にその周辺で遺構が見つかっている。検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡１棟、土坑１基、陥し穴状遺構１基、炉跡１基、焼土２基である。

＜竪穴住居跡＞　前述の旧沢跡への落ち際で検出されたが、壁は流失しており全体規模は不明である。石囲炉と柱穴２個のみ確認された。出土状況から、この付近から出土した縄文時代中期中葉～後葉の土器３個体は、この住居跡に伴うものと考えられる。

＜土坑＞　1.1×0.54mの不整な長方形を呈する時期不明の土坑が１基検出された。深さは15㎝程度である。

＜陥し穴状遺構＞　底面中央に副穴１個を有する縄文時代の円形の陥し穴状遺構が１基検出された。規模は直径１ｍ、深さ47㎝で、副穴の深さは底面からおよそ8㎝である。

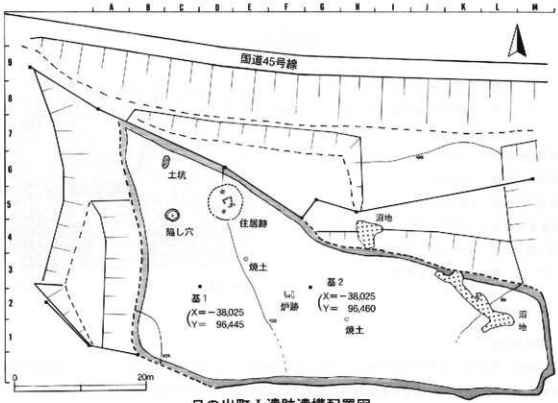
＜炉跡＞　調査区中央部に残した土層観察用ベルトの中に石囲炉が１基検出された。規模は43×55㎝で、礫は全周しない。住居跡に伴うと思われるが、周辺に柱穴は確認できなかった。時期は、縄文時代中期である。

＜焼土＞　現地性と思われる時期不明の焼土が２基確認された。規模は62×64㎝と20×100㎝である。

＜出土遺物＞　中コンテナ１箱分の縄文土器と80点余りの石器類、その他に石製垂飾品、鉄製の角釘、フイゴの羽口、鉄滓、陶磁器が出土した。土器の時期は、縄文時代早期・前期前葉・中期中葉～後葉が主体である。また、石器類のうち製品は30点余りで、器種は石鏃・石匙・磨石・凹石などである。

３．まとめ

今回の調査によって、本遺跡は縄文時代中期中葉～後葉を主体とする集落跡であることが確認された。周辺の状況や調査結果から、遺跡の主体は調査区西側丘陵上位にあるものと考えられる。



日の出町Ⅰ遺跡遺構配置図

遺跡全景

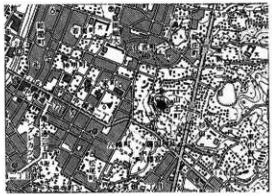
石製垂飾品出土状況

炉跡検出状況

日の出町Ⅰ遺跡検出遺構・出土遺物

(7) 山王山（さんのうやま）遺跡第９次調査

所在地	岩手県盛岡市山王町７－60
委託者	建設省東北地方建設局営繕部
事業名	盛岡地方気象台建設
発掘調査期間	平成10年４月８日～８月６日
調査対象面積	2,000㎡
発掘調査面積	2,000㎡
遺跡番号・略号	ＬＥ17－0068・ＳＮＹ－98
調査担当者	菊地榮壽・岩渕計・布谷義彦
協力機関	盛岡市教育委員会　盛岡地方気象台



遺跡位置　　1：50,000 盛岡

１．遺跡の立地

山王山遺跡はＪＲ盛岡駅の東約2.5kmに位置し、北に中津川、南に築川、西に北上川に囲まれた丘陵地に立地する。また、遺跡の標高は155m前後、北緯39°42′、東経141°10′付近に位置し、現況は盛岡地方気象台跡地である。以前は丘陵地で山王山神社として社があったが、大正12年（1923）９月１日に冷害や津波・洪水などの自然災害の発生の解明と内陸気象調査を趣旨とした岩手県営測候所（盛岡地方気象台の前身）が創立された。その後、昭和11年に庁舎が東側に増築され今日に至っている。周辺の遺跡には、川目遺跡、上八木田遺跡、柿ノ木平遺跡などがある。

２．調査の概要

平成４年より盛岡市教育委員会で発掘調査が行われてきており、本調査は盛岡地方気象台建て替え建設に伴う緊急発掘調査で、第９次の調査となる。調査区は、造成による削平、建物の基礎、地下施設（水道、ケーブル、排水）、あるいは戦時中の防空壕などにより溝状に攪乱を受けている。検出した遺構は、竪穴住居跡28棟、竪穴状遺構３棟、土坑119基、柱穴状小土坑34基、焼土遺構３基を検出した。

＜竪穴住居跡＞　庁舎の跡地で地上３階、地下１階の建造物があった調査区中央部は調査区域外であるがこの部分を除く、ほぼ調査区全域に竪穴住居跡は分布している。調査区西側に分布するものは、削平のため壁が残存するものは少ないが、平面形は円形、楕円形があり、炉の形態は土器埋設炉１基のみで他は石を円形状、長方形状、コの字状に囲った石囲炉である。時期は石囲炉をもつ住居跡は縄文時代中期中葉、埋設炉をもつ住居跡は埋設土器の特徴から中期後葉～末葉と考えられる。調査区南側に分布するものは、建物への進入道路により削平を受け、全体の形状が不明のものもあるが、平面形が明確なものは東西約９m、南北約８mの楕円形を呈する。壁溝の検出状況、石囲炉の検出状況より２回程度の建て替えが行われたと考えられる。炉は住居跡の中心から東壁に寄り、石を長方形状に二重に囲った石囲炉である。時期は出土遺物より縄文時代中期中葉と考えられる。調査区東側に分布するものは、削平により壁がほとんど残存しない円形の住居跡と楕円形の住居跡がある。ほとんど壁が残存しない住居跡では、床面全体に炭化物が検出され、焼失した住居跡と考えられる。炉は円形状に石を配置した石囲炉である。時期は、出土遺物より縄文時代中期中葉と考

えられる。楕円形の住居跡は東西約７m、南北約６mの大きさである。柱穴の検出状況より２回程度の建て替えが行われたと考えられる。炉は住居跡の中心から西壁に寄り、石をコの字状に囲った石囲炉である。時期は出土遺物より中期中葉と考えられる。調査区北側に分布するものは、遺構の重複関係、建て替えにより平面形の形状が不明確なものが多いが、円形、楕円形、やや隅丸方形を呈する。これらの住居跡のうち、中央部の住居跡から大小セットの埋甕、東部の住居跡から１基の埋甕が出土した。中央部の住居跡は円形を呈し、東西約９m、南北約７mの大きさである。壁溝の検出状況から２回程度の建て替えが行われたと考えられる。炉は石を長方形状に囲った石囲炉で、住居の軸線上やや南寄りに位置する。埋甕は炉の北側に位置する。また、東部の住居跡は楕円形を呈し、東西約５mの大きさである。壁溝の検出状況より２回程度の建て替えが行われていると考えられる。炉は石をやや台形状に二重に囲った石囲炉である。埋甕は炉の西側に位置する。時期は出土遺物より中期中葉と考えられる。

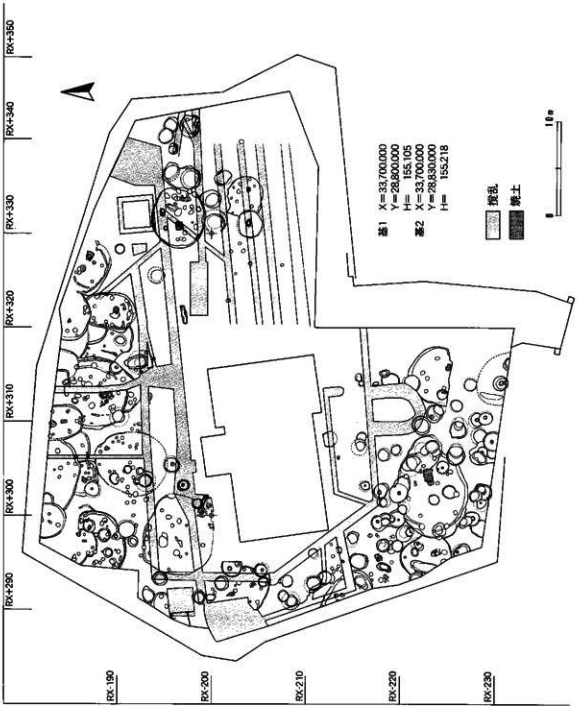
＜土坑＞ 調査区全域に分布し、上部を削平されているものがあるが、断面の形態から箱形、皿形、ビーカー形、フラスコ形に大きく分けられる。ビーカー形は、大きいもので開口部径約2.9m、底部径約2.8m、深さ1.1mである。また、フラスコ形は、大きいもので開口部径約1.6m、底部径約1.7m、深さ2.6mである。それぞれビーカー形、フラスコ形土坑の底部中央部に副穴が見られるものもある。個々の遺構について検討中であるが、重複関係や出土遺物より中期中葉～後期初頭にかけてと考えられる。

＜竪穴状遺構＞ 調査区北側と南側で検出した。上部が削平されたり、遺構の重複により、また調査区域外に延びることもあり、全体の形状は把握できなかったが、隅丸方形～楕円形を呈していると推定される。土層断面の観察や出土遺物より縄文時代早期の遺構と考えられる。

＜出土遺物＞ 今回の調査で出土した遺物は縄文土器、土製品、石器、石製品、古銭（寛永通寶）、煙管（雁首）などで、総量はコンテナ（大）で約27箱である。縄文土器は主体となる縄文時代中期中葉のものがほとんどである。土製品はわずかであるが、円盤状土製品、三角形土製品、土偶、有孔土製品などがある。石器では、磨製石斧、石鏃、石匙、石錐、削掻器、磨石、凹石などがある。石製品では、三角土壇形石製品、石皿、三日月形石製品が出土した。

３．まとめ

今回の調査は、盛岡市教育委員会の試掘結果から縄文時代中期の集落を想定しながら調査を行った。その結果、今回の調査区域は、丘陵地の平坦面を活用した特に出土遺物の多い縄文時代中期の居住域であることが確認できた。それに関連して居住域の中央に広場などの祭祀的空間が想定できるが、調査区域外で旧庁舎の地下構造により調査不可能であったため、資料を得られず不明である。今後、周辺の調査が行われれば、全体の状況がより明確になってくると思われる。


RX+350
RX+340
RX+330
RX+320
RX+310
RX+300
RX+290
RX-190
RX-200
RX-210
RX-220
RX-230
基1 X=33,700.000
Y=28,800.000
H= 155.105
基2 X=33,700.000
Y=28,830.000
H= 155.218
撹乱
地土
10m

山王山遺跡遺構配置図

調査区全景

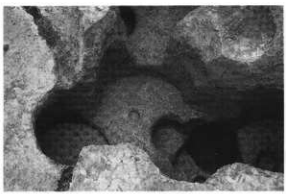
竪穴住居跡（RA008）

埋甕の出土した竪穴住居跡（RA018）

埋甕出土状況（RA018）

埋甕の出土した竪穴住居跡（RA020）

埋甕出土状況（RA020）



フラスコ形土坑

三角壔形石製品出土状況

山王山遺跡第９次検出遺構・出土遺物

Ⅱ．公団・公社関係

(8) 小幅遺跡第９次調査

所　在　地	盛岡市本宮字小幅88－11ほか
委　託　者	地域振興整備公団岩手総合開発事務所
事　業　名	盛岡南新都市開発整備事業
発掘調査期間	平成10年９月１日～９月30日
調査対象面積	819㎡
発掘調査面積	819㎡
遺跡番号・略号	ＬＥ16－2009・ＯＫＨ－98－09
調査担当者	溜　浩二郎・山口俊規
協力機関	盛岡市教育委員会

遺跡位置　　1：50,000 盛岡

１．遺跡の立地

小幅遺跡は東日本旅客鉄道仙北町駅より西約2.3kmに位置し、雫石川によって形成された標高125m前後の河岸段丘上に立地している。調査区の現況は林檎園である。本遺跡の西約1.4kmに志波城跡、南西に隣接して大宮北遺跡がある。

２．調査の概要

今回の調査区は今年度盛岡市教育委員会で調査した区域に隣接し、東側に位置する。調査区南側は旧沢跡になっており、遺構の大半は中央より北側にかけて検出されている。検出された遺構は平安時代の竪穴住居跡が４棟、土坑が５基、溝状遺構３条、円形周溝が１条、焼土遺構が４カ所、柱穴状遺構が調査区中央～南にかけて検出されている。

＜竪穴住居跡＞　４棟すべて平安時代の住居跡で、いずれも形状は方形を基調としている。最大のもので一辺が６ｍを越え、カマド煙道部が西に２カ所、南に１カ所、北に１カ所残存する。

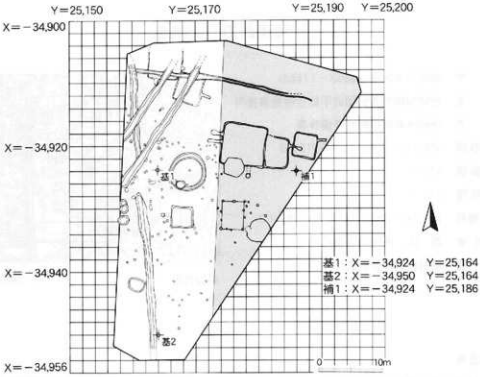
＜溝状遺構＞　５条の検出であったがこのうち２条は現代の攪乱と調査段階で判明したため３条を溝状遺構とした。いずれも時期は不明であるが１条は平安時代の住居跡を切るものである。

＜その他＞　調査区中央から円形周溝が１条検出された。近接する小幅遺跡第４次調査でも類似した遺構が検出されており同様の性格を持つと考えられる。他に柱穴状の小土坑が多く検出されており、掘立柱建物跡になる可能性が高く、今後再度検討を行う。

＜出土遺物＞　今回の調査では平安時代の土師器・須恵器の破片が大コンテナで４箱と他に若干の陶磁器片が出土している。

３．まとめ

これまでの調査で小幅遺跡が平安時代の集落を主体とする遺跡であることが確認されている。今回調査した区域からもこれまで同様、平安時代の竪穴住居跡、土坑、円形周溝などが見つかっており、今後は周囲の状況との比較検討が必要である。



小幅遺跡第９次調査遺構配置図

遺跡全景

平安時代の竪穴住居跡

平安時代の竪穴住居跡

円形周構

小幅遺跡第９次調査検出遺構

(9) 向中野館跡第４次調査

所　在　地　盛岡市飯岡新田２地割124－１ほか
委　託　者　地域振興整備公団岩手総合開発事務所
事　業　名　盛岡南新都市開発整備事業
発掘調査期間　平成10年７月１日～９月４日
調査対象面積　911㎡
発掘調査面積　911㎡
遺跡番号・略号　ＬＥ26－0205・ＯＭＮ－98－04
調査担当者　溜　浩二郎・山口俊規
協力機関　盛岡市教育委員会

飯岡
新田
向中野
水田
上野
下野
向屯田
上田
下田
上野
下野
向中野
館
上野
下野
上田
下田

面は平坦で壁面の傾きは西側が6～35°、東側が18～50°である。深さは88～100cmで、西から東へと延びる堀跡と合流するが構築は南北に延びる堀跡の方が新しい。中央を南北にはしる堀跡は幅350～460cm、底面は平坦で壁面の傾きは東西いずれも47°で、深さは最大残存部で74cmある。

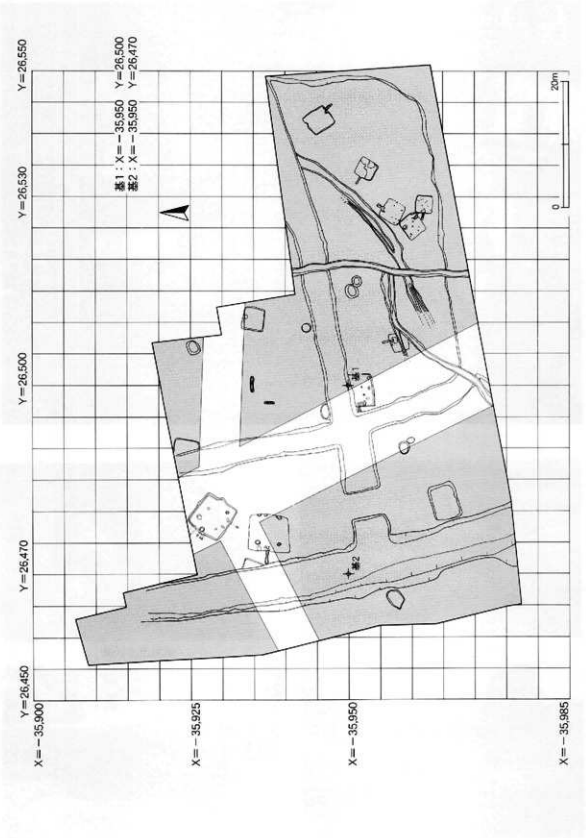
＜土坑＞　1基検出された。形状は不整な楕円形状を呈し、規模は開口部径200×166cm、底部径172×125cm、深さ31cmである。底面からは須恵器甕の破片が出土しており、遺構の時期は平安時代に属するものと思われる。

＜溝跡＞　1条が検出された。北東－南西に走る溝で全長は27mに及んでいる。埋土からは主に須恵器坏の破片が出土している。ただし、中世と思われる堀跡を切ることからこれより時期は新しい。

＜出土遺物＞　今回の向中野館跡第3次・第4次調査の成果として平安時代の土師器・須恵器の破片が大コンテナで4箱、陶磁器が1箱、また遺構外から縄文時代中期の土器片も微量であるが出土している。他に縄文時代の石鏃が1点、古銭（寛永通宝）6点、土製品2点が出土している。

3．まとめ

今回の調査で本遺跡が平安時代の集落跡と中世の館跡の一部であることが確認された。隣接する向中野館跡第3次調査区内では陥し穴状遺構が検出されたことから縄文時代にはこの地が狩猟場として利用されていた可能性がある。中世の向中野館跡に直接係わる建物跡の痕跡を今回の調査では確認出来なかったが堀跡が見つかったことで館の位置や規模を推察する手がかりを得ることができた。今後の調査で更に詳細な情報が得られることを期待したい。



向中野遺跡第４次調査遺構配置図

遺跡全景

平安時代の竪穴住居跡

遺物出土状況

中央部堀跡（平面）

中央部堀跡（断面）

向中野館跡第４次調査検出遺構

⑽　台太郎遺跡第19次調査

所　在　地	盛岡市向中野字向中野16－１ほか
委　託　者	地域振興整備公団岩手総合開発事務所
事　業　名	盛岡南新都市開発整備事業
発掘調査期間	平成10年７月２日～８月31日
調査対象面積	4,757㎡
発掘調査面積	4,757㎡
遺跡番号・略号	ＬＥ16－22・ＯＤＴ－98－19
調査担当者	下田隆衛、佐藤綾子、鈴木見誌
協力機関	盛岡市教育委員会

遺跡位置　　1：50,000 盛岡

1．遺跡の立地

本遺跡は、東日本旅客鉄道東北本線仙北町駅の南西約900mに位置し、雫石川右岸の河岸段丘上に立地している。調査区は、４区域に分かれて点在している。（A、B、C、Dの４区。遺構配置図参照。）標高は、121.1～122.1mで、北緯39度40分、東経141度８分付近にあたる。調査区は、台太郎遺跡第16次調査区と盛岡市に委託された第18次調査区に隣接し、現況は、水田と畑地でしめられている。

2．調査の概要

検出された遺構は、奈良時代の竪穴住居跡３棟，平安時代（９Ｃ中頃～10Ｃ初頭）の竪穴住居跡16棟、掘立柱建物跡３棟、竪穴状遺構６基、土坑17基、溝跡35条、波状状凸凹２群等である。

＜竪穴住居跡＞　規模は、最大のものは9.5×9.4mで平面形は、隅丸の方形を呈している。カマドは、北壁の中央部に設置されており、くり貫き式の煙道である。時期は、出土した遺物から奈良時代と推測される。また、最小のものは2.8×2.8mで平面形は、隅丸の方形を呈している。カマドは、北東コーナーに設置されており、この位置にカマドを有するのは、この１棟のみである。これもくり貫き式の煙道で、時期は平安時代と推測される。全体的に見て規模は、3.0～5.0mの隅丸方形を呈するものが多い。しかし、遺構同士の切り合いや遺構が調査区外に伸びる例もあり、全容不明のものが７棟ある。検出された住居跡のほとんどが平安時代のものと思われるが、奈良時代と目される３棟はいずれも平面形が隅丸の方形で、カマドは北壁の中央部にあり、煙道はくり貫き式である。住居跡は、それぞれカマドの設置された方向等から若干の時期差があると考えられる。しかし、Ｂ区東側の住居跡のようにカマドの位置を３回移し変えた例も見られる。(西壁、中央部南西コーナー寄り、北壁、中央部北東コーナー寄り、東壁、南東コーナー寄りの３個所。)

住居跡は、主にＡ区とＢ区から多く検出されており、南側の調査区からは見つかってはいない。(ただし、隣接する第18次調査区からは、検出されている。)このような数の偏りは、標高差などの地形的要因が関係していると考えられる。

＜掘立柱建物跡＞　検出された３棟の規模は、東側から桁行９間(19.3m)×梁行３間(6.0m)、桁行５間(10.6

m）×梁行５間（10.6m）、桁行４間（8.4m）×梁行３間（6.44m）(北側と東側に庇を持つ。)である。棟方向は、最も東に位置するものが南南西、残りの２棟が北北西を示しており、遺構の切り合いと間尺から時期は中世以降と推測される。

＜竪穴状遺構＞ 検出された６棟の規模は、長軸2.7～3.0m×短軸2.6～3.4mで、平面形は隅丸の長方形もしくは方形を呈している。時期は出土した遺物などから平安時代と推測される。Ｂ区から検出された３棟は規模、形状ともに似通っており、同時期のものである可能性がある。また、最も南側のものでは埋土から十和田ａ降下火山灰と考えられるものが検出されており、やはり平安時代頃のものである。

＜溝跡＞ 溝の規模は、最大のもので上幅2.6～3.0m×下幅0.5～0.9m、深さ0.88mであり、北東～南東に伸びている。遺物が多数出土しており、大部分は平安時代のロクロ使用の土師器（坏、甕）須恵器（坏、壺、甕）の破片だが、奈良時代の土師器や縄文時代後、晩期の土器片もわずかだが出土している。これは、平安時代の住居跡と思われる遺構を切っており、時期は、それ以降と推測される。規模は、上幅0.4～0.5m×下幅0.2～0.25m、深さ0.15～0.36m、長さ10～20m程のものが多く、大半がＡ区とＤ区に見られる。比較的新しい時代の溝が１条ある他は、出土した遺物と切り合いの様子からほとんどが平安時代頃のものである。

＜自然の流路＞ 検出された溝の中で、自然の流路とはっきりしているものは２条ある。その内の１条からは、平安時代のロクロ使用の土師器（坏、甕）須恵器（坏、壺、甕）の破片等の遺物が多数出土している。規模は上幅0.7～3.2m×下幅0.5～2.7m、深さ0.15～0.36m、長さ150mを越え、東西に伸びている。時期は、埋土から灰黄褐色の十和田ａ降下火山灰と考えられるものが検出されており、平安時代頃と推測される。

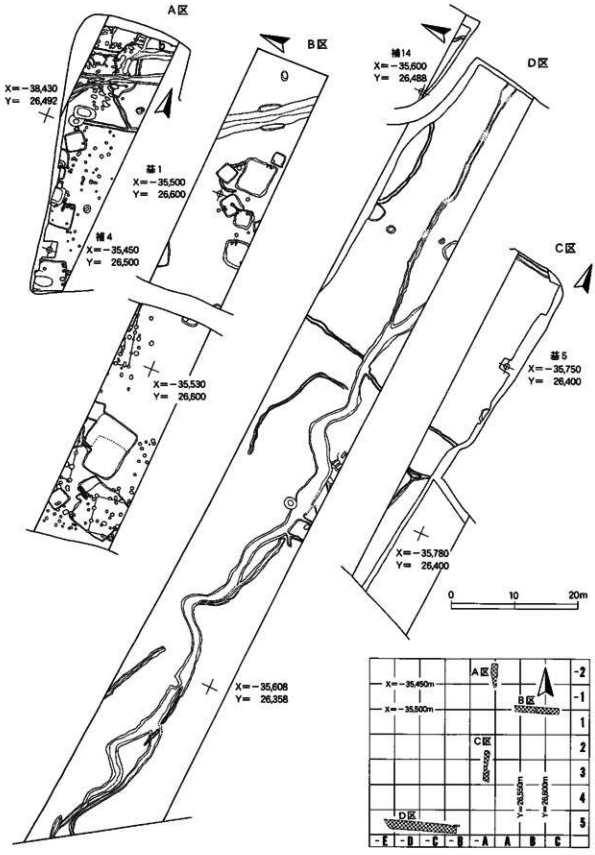
＜土坑＞ 土坑は、Ａ区から多く検出されている。出土した遺物や埋土の様子等から推測すると、平安時代頃のものと比較的新しい時代のものとに分けられる。新しい時代のものと思われるのは７基で、口径1.0～3.45m×0.65～2.4m、深さ0.24～0.75mと大きめのものが多いのが特徴である。平面形は、隅丸の方形や楕円形を呈している。平安時代頃と思われるものは７基で、口径0.75～1.85m×0.7～１m、深さ0.14～0.42mとやや小規模のものが多い。いずれも用途及び詳細は不明である。

＜波状状凸凹＞ その他の遺構としてＡ区とＤ区から、性格不明の土坑群が検出されている。規模は、長軸0.5～2.8m×短軸0.2～0.5m、深さ0.07～0.22mで、溝状である。いずれも上面を水に押し流されているようで、はっきりしない点も多いが、Ａ区は約60㎡、Ｂ区は約10㎡（調査区外も含めれば約78㎡）の範囲で広がっている。時期は、いずれも出土した遺物と遺構の切り合いから平安時代以前のものと推測される。

＜出土遺物＞ 多くは、竪穴住居跡と溝及び自然の流路から出土しており、大部分が奈良時代のロクロ不使用の土師器（坏、甕、壺、甑）、平安時代のロクロ使用の土師器（坏、甕）、須恵器（坏、甕、長頸壺）等である。土器以外では、平安時代の住居跡から紡錘車、石器等が出土している。中世以降の遺物としては、陶磁器類の破片が若干出土している。Ａ区から検出された柱穴群の付近から近世磁器の水滴（硯に水を入れる道具。）等が見つかっている。

３．まとめ

調査区の北側に奈良時代、平安時代の遺構と遺物が集中していることが分かった。また、中世以降の堀立建物跡や柱穴群もこの地区に集中している。同年度に行われた第18次調査においても同様に隣接した区域から遺構と遺物が多く見つかっている。このことから、前年度までの調査結果と合わせて、地域の集落変遷について考えるうえでの、有効な資料として活用されることが期待できるであろう。



台太郎遺跡第19次調査遺構配置図

台太郎遺跡Ｄ区遠景

平安時代の竪穴住居跡

奈良時代の竪穴住居跡

奈良（上）平安（下）の住居跡

波状状凸凹（Ａ区）

カマドからの土器出土状況

住居内土坑からの土器出土状況

台太郎遺跡第１９次調査検出遺構・出土遺物

(11) 秋浦（あきうら）Ⅰ遺跡

所在地	岩手郡岩手町大字川口第19地割 字門前75－２ほか
委託者	日本鉄道建設公団盛岡支社
事業名	東北新幹線盛岡・八戸間鉄道建設工事
発掘調査期間	平成10年４月10日～８月11日
調査対象面積	2,630㎡
発掘調査面積	2,630㎡
遺跡番号・略号	ＫＥ38－0112・ＡＵＩ－98
調査担当者	古館貞身・佐々木琢 柴田慈幸・鈴木浩二
協力機関	岩手町教育委員会

遺跡位置　　1：50,000 沼宮内

１．遺跡の立地

秋浦Ⅰ遺跡はＪＲ東日本東北本線岩手川口駅より東約1.6kmに位置し、西流して北上川に注ぐ古館川の右岸に形成された河岸段丘上に、南西に面して立地している。

遺跡の標高は250m前後、古館川との比高は約20mであり、調査区は南北に細長く、現況は水田と畑地になっている。

なお、本遺跡の南側には今年度調査した秋浦Ⅱ遺跡がある。

２．調査の概要

今年度の調査は昨年度からの継続調査であり、昨年度に調査できなかった箇所及び工事の都合により拡幅された箇所で、調査面積は昨年度の約３分の２である。

本遺跡は、元々は畑地であったが、昭和38年頃に大規模な開田事業が行われ、緩斜面及び沢状の地形が、南北に平らで、東西に段をなす田圃に造成された。その際、大量の遺物が収集されたと聞いていたため、浅い面での遺構検出はかなり難しいものと思われたが、場所によっては予想に反してかなりの数の遺構を検出し、また遺物も出土しており、今年度の調査で調査範囲の全体像がややつかめた。

調査区北端部は平安時代の住居跡１棟のみであったが、ここからやや緩やかな尾根状の部分を超えると南面した斜面上で遺構を多く検出した。その多くは、複式炉をもつ縄文時代の住居跡（大木９式土器を伴出）やフラスコ形の土坑であり、斜面の下方の調査区外に向かって展開しているようである。ここからも東側にカマドをもつ平安時代の住居跡を１棟検出している。

ここから沢状の地形を挟んで南側に行くと同じく複式炉をもつ縄文時代の住居跡が切り合いながら密集しており、さらにフラスコ形の土坑も密集している。

さらに南に一段下がると複式炉は全くみられなくなり、石囲い炉をもつ住居跡と土坑（フラスコ形が多い）の密集区である。平安時代の住居跡をここからは３棟検出した。

調査により検出した遺構は下記のとおりであるが、それらは主に縄文時代中期の住居跡と土坑であり、他に土師器をともなう平安時代の住居跡、集石、近世墓等がある。

<竪穴住居跡> 今年度検出した住居跡は31棟である。そのうち縄文時代のもの28棟、他は平安時代のもの３棟である。(昨年度は、縄文時代30棟、平安時代３棟)

縄文時代の住居跡は、調査区南側の一段低い面ではほとんどが石囲炉を持つものであるが、一段高い北側には複式炉を持つ住居跡が密集している。

平安時代の竪穴住居跡についてはいずれも調査区の南側で検出したが、カマド跡を検出できた２棟は東壁にカマドが設けられている。

<土坑> 151基検出した。そのうちフラスコ状を呈するものは100基である。(昨年度は122基のうちフラスコ状を呈するものは61基) これらは特に南側の一段低い面に密集しており、重複、切り合いが激しく原形をとどめていないものが多数である。他に皿状のものもあり、このうちのいくつかはフラスコ状土坑の底だった可能性がある。住居跡と同じく縄文時代中期から後期にかけてのものと思われる。

<炉跡> ９基検出した。(昨年度は12基) 削平や遺構の重複によるものと思われるが、いずれも周囲に住居跡としての床面や柱穴は確認できなかった。

<焼土遺構> 11基検出した。(昨年度は28基) １基は近代のもの。他はV層における検出であり、炉跡と同じく現地性のものについては、周囲に住居跡としての痕跡を確認出来なかった。

<柱穴> 118基検出した。(昨年度は265基) この中には、比較的新しい近世あるいは近現代のものもあるが、縄文時代の住居跡と同じ面で検出されたものが多数あり、これらの中には建物を構成するものもある。

<土器埋設遺構> ５基検出した。(昨年度はなし) いずれも調査区南側の一段低い面である。倒立のもの１基、底部を欠くもの１基、土坑の縁に埋設されたもの１基、他は正位に埋設されている。時期は前期末～中期初めと思われる。

<遺物包含層> 調査区南側の一段低い面の西側斜面に形成されていた捨て場である。出土土器は円筒下層式が多く、前期を中心に形成されたようである。

<出土遺物> 縄文土器が大コンテナ81箱 (昨年度79箱) と圧倒的に多く、その時代、時期は縄文時代中期を挟んで前期後半から後期にかけての円筒下層式、円筒上層式、大木7a～10式、十腰内式などである。土師器は中コンテナ１箱で他に、土偶２点、ミニチュア土器、円盤状土製品などがある。

石器は磯石器・剥片石器併せて約1,000点 (昨年度654点) ほどであり、剥片石器と磯石器の比率は６対４で剥片石器の方が多い。半円状扁平打製石器も多く、未使用と思われる磨製石斧が４本まとまって出土した例もあった。

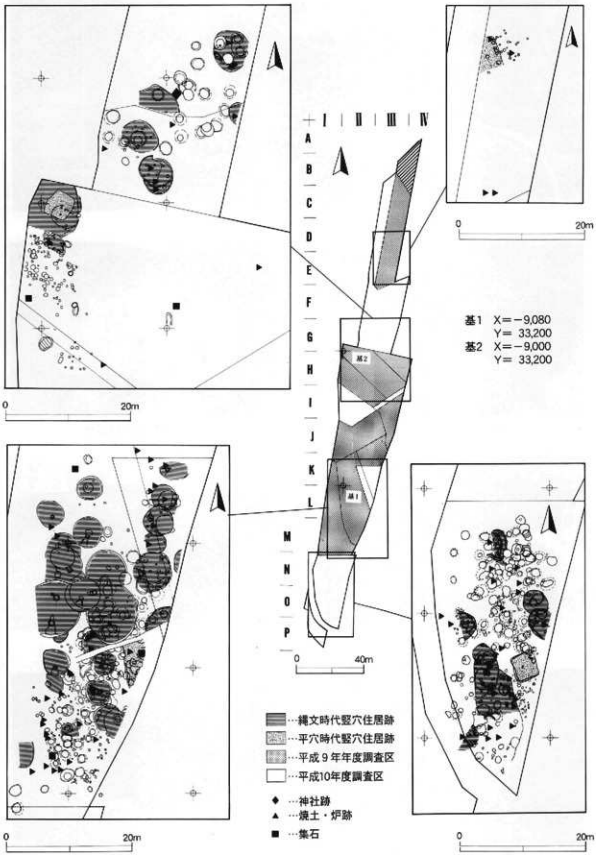
3．まとめ

昨年度調査と含めて、秋浦Ⅰ遺跡の様子が部分的にではあるがつかむことができた。

縄文時代前期後半には調査区南側が主に利用され、中期になると調査区全域、さらに南隣の秋浦Ⅱ遺跡まで居住域が拡大している。後期初頭になると調査区南側から秋浦Ⅱ遺跡にかけての部分が主に利用されているようである。

また縄文時代と平安時代の複合遺跡であることも判明した。

さらに複式炉の様々な形態があること、大木式土器と円筒式土器が供伴していること、住居跡とフラスコ状土坑の配置関係などを今後検討していく事により、この遺跡の性格をより一層明確にすることができるものと思われる。


I
II
III
IV
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M
N
O
P
M2
M1
0
40m
基1 X=−9,080
Y= 33,200
基2 X=−9,000
Y= 33,200
0
20m
…縄文時代竪穴住居跡
…平穴時代竪穴住居跡
…平成９年年度調査区
…平成10年度調査区
…神社跡
…焼土・炉跡
…集石

秋浦Ⅰ遺跡遺構配置図

遺跡全景

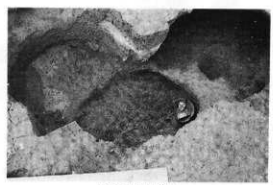
土坑に切られた住居跡

複式炉を持つ住居跡

フラスコ状土坑断面

フラスコ状土坑断面

焼土に被せられた石皿

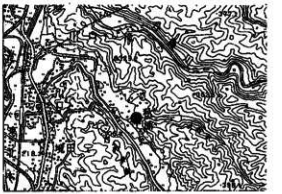


土坑の切り合い

秋浦Ⅰ遺跡検出遺構・遺物出土状況

(12) 秋浦（あきうら）Ⅱ遺跡

所在地	岩手郡岩手町大字川口第21地割字高無47番3ほか
委託者	日本鉄道建設公団盛岡支社
事業名	東北新幹線盛岡・八戸間鉄道建設工事
発掘調査期間	平成10年8月17日～11月27日
調査対象面積	2,680㎡
発掘調査面積	2,680㎡
遺跡番号・略号	ＫＥ38－0131・ＡＵⅡ－98
調査担当者	佐々木　琢・古館　貞身
	工藤　徹・鈴木　浩二
	平澤　里香・佐々木志麻
協力機関	岩手町教育委員会



遺跡位置　　1：50,000 沼宮内

1．遺跡の立地

秋浦Ⅱ遺跡は、岩手郡玉山村に隣接する岩手町のほぼ南、ＪＲ東北本線川口駅より東約1.6㎞、古館川に形成された河岸段丘上に位置している。標高は240.6～241.9mで、北緯39度54分、東経141度13分付近にあたる。古館川との比高差は約10m、調査区は南北に細長く、現況は宅地と水田になっている。本遺跡の北側には、秋浦Ⅰ遺跡がある。

2．調査の概要

本遺跡は、昭和30年代に大規模な開田事業が行われたため、浅い面での遺構検出はかなり厳しいと思われた。しかし、予想に反し場所によっては浅い面での遺構の検出、遺物の出土が確認できた。調査区を北から３区に、基本層位を耕作土（１層）・暗褐色土（２層）・黒褐色土（３層）・礫層（４層）の４層に分けた。耕作土を取り除いた時点で暗褐色土から数多くの遺物が出土しているが、調査区北側（Ａ区・Ｂ区北側～中央部）および調査区南側（Ｃ区）南端部では、耕作土の下の暗褐色土・黒褐色土が薄く、礫層が厚く堆積しており、遺構・遺物の存在は確認されなかった。Ｂ区南側からＣ区にかけては暗褐色土・黒褐色土が厚くなっており、出土遺物も多く、遺構も検出されている。

＜竪穴住居跡＞　検出した住居跡は41棟で、遺物が多く出土したＢ区南側～Ｃ区において検出され、全て縄文時代のものである。重複や削平により不明なものもあるが、壁高が低く、平面形はほぼ円形・楕円形で住居の大きさとしては、Ｂ区・Ｃ区とも、径ほぼ３～４ｍほどのものがほとんどであったが、中には礫層を掘り込んで住居跡が存在しているものもあり、南北８ｍ×東西5.5mの大型住居を検出した。炉は石囲炉・複式炉が中心であるが、住居によっては焼土が明確に存在せず、炉石のみがわずかに焼けているものもある。

＜土坑＞　調査区全体で35基検出、竪穴住居跡周辺で確認されたものが多い。このうち１基はフラスコ形土坑である。土坑内からは土器、石器、骨片などが出土している。Ｃ区においては、竪穴住居跡と同じように礫層を掘り込んでいるものもある。土坑の規模は、開口部径50～150㎝、深さ30～80㎝、断面形はＵ字形・

皿形に大別される。

＜炉跡・焼土遺構＞ 炉跡は12基、焼土遺構は18基検出した。場所によっては、焼土があまり明確に存在せず、炉石がわずかに焼けているものもある。

＜溝跡＞ C区において、調査区を東西に横切る形で２条検出された。C区中央部で確認された溝は長さ約12m40cm、幅約１m、深さ約30cmであり、溝の上には貝が厚くまとまった形で存在していた。この貝層中には灰が混じっており、貝は「カワシンジュガイ」であったが、この貝の時期は不明である。C区北側の溝は長さ約14m、幅約３m60cm、深さ約１m60cmで、多量の土器片を出土している。

＜柱穴状ピット＞ 138基検出。規模は15～45cm、深さは15～40cmのものが多い。柱穴内からは土器片や石器、骨片などを出土しているものもある。

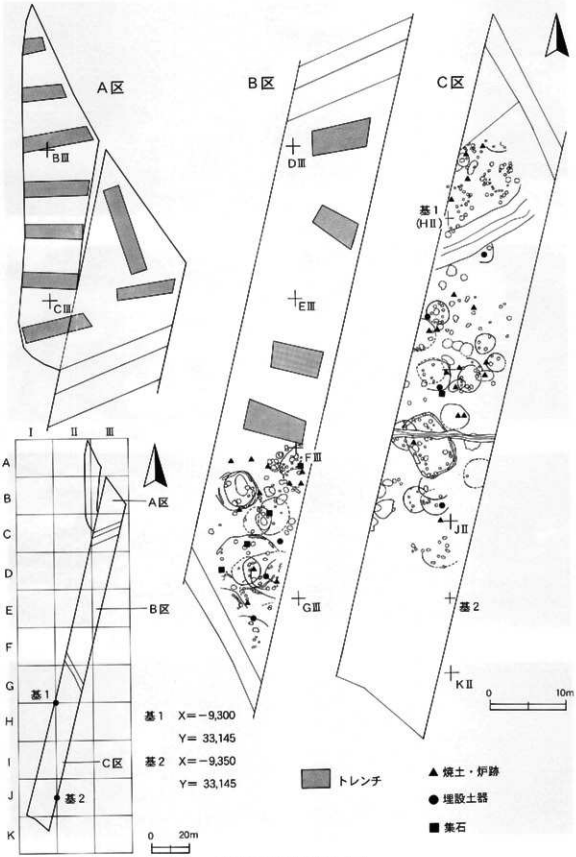
＜集石・配石遺構＞ ５基検出。いずれも不整形で、縄文時代のものと思われる。穴を掘って石を入れており、埋土に焼土ブロックが入っているものもある。

＜埋設土器＞ 埋設土器は７基確認、埋設状況は正立であった。

＜出土遺物＞ 調査区内において、遺構が検出されたB区南側からC区にかけて圧倒的に遺物が多く、土器は大コンテナで126箱、大木８ａ～10式、円筒上層式といった縄文中期を中心として、土師器・須恵器なども少量出土している。石器は剥片石器、礫石器あわせて中コンテナ６箱で、石鏃、削掻器、石匙、尖頭器、敲石、磨石、凹石、石皿等である。他に、板状土偶、耳飾、垂飾、古銭などを出土している。

３．まとめ

調査結果から、秋浦Ⅱ遺跡は縄文時代中期を中心とした遺跡であり、礫層を掘り込んでいる住居跡・土坑が存在しており、出土遺物は土器が圧倒的に多いが土器の量に比べて石器の量が少ないように思われる。調査区内だけでみると、中央部でやや北側から南側にかけての地域が住居域として利用されたいたようである。今後、調査結果の整理・分析を元に様々な観点から本遺跡の具体的な性格・内容を明らかにしていきたい。


A区
B区
C区
BⅢ
CⅢ
DⅢ
EⅢ
FⅢ
GⅢ
基1
(HⅡ)
JⅡ
基2
KⅡ
0
10m
I
II
III
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
A区
B区
C区
基1
基2
基1 X=−9,300
Y= 33,145
基2 X=−9,350
Y= 33,145
0
20m
トレンチ
▲ 焼土・炉跡
● 埋設土器
■ 集石

秋浦Ⅱ遺跡遺構配置図

遺跡遠景

複式炉

縄文時代の竪穴住居跡

土器出土状況

大型住居跡

土器出土状況

板状土偶出土状況

秋浦Ⅱ遺跡検出遺構・遺物出土状況

(13) 芦名沢(あしなざわ)Ⅱ遺跡

所在地	岩手郡玉山村大字馬場字芦名沢34－2他
委託者	日本鉄道建設公団盛岡支社
事業名	東北新幹線盛岡・八戸間鉄道建設工事
発掘調査期間	平成10年10月1日～10月29日
調査対象面積	590㎡
発掘調査面積	590㎡
遺跡番号・略号	KE47－1367・AZⅡ－98
調査担当者	古舘貞身・相沖吉彦
協力機関	玉山村教育委員会

遺跡位置　　1：50,000 沼宮内

1．遺跡の立地

芦名沢Ⅱ遺跡はＪＲ東日本東北本線好摩駅の東方約2.8kmに位置し、姫神山麓から北西に流れ北上川に合流する芦名沢川が枝分かれした中州状を呈する微高地に立地する。

遺跡の標高は212m前後、芦名沢川との比高は約２mであり、現況は休耕田である。

なお、芦名沢川及び道路を挟んで本遺跡の北東側約300mの所に昨年度調査が行われた芦名沢Ⅰ遺跡がある。

2．調査の概要

本遺跡は、昭和30年代の圃場整備に伴って、傾斜に沿って段状に整地されているが、元々の傾斜は調査区中央部から東側の芦名沢川に向かって傾斜する地形である。東側の傾斜地には数度にわたる河川による堆積層が見られその上部には造成による整地層（黒褐色土に黄褐色土がブロック状に混在する）が厚く堆積している。調査区の中央から西側は、平坦な地形となっており、耕作土である整地層は20cmと薄く堆積し造成時と思われる重機のキャタピラの痕跡も見られる。

調査により検出した遺構は、縄文時代の住居跡１棟、焼土遺構４基である。

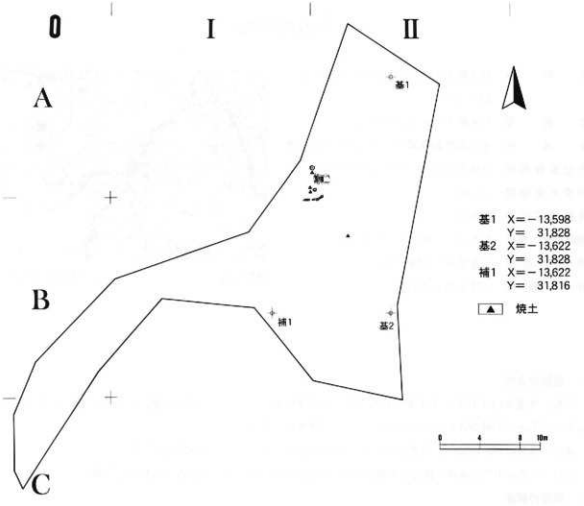
＜竪穴住居跡＞　複式炉をもつ縄文時代中期の住居跡１棟である。周囲が削平をうけており、炉及び柱穴２基と周溝の一部だけの検出であった。

＜焼土遺構＞　４基検出したが、うち３基は整地層にあり新しいものである。他の１基は縄文時代のものと思われ川沿いに傾斜した面での検出である。

＜出土遺物＞　縄文時代早期（ムシリ系）～晩期の土器・石器・土製品、土師器片、近世陶磁器片が出土している。

3．まとめ

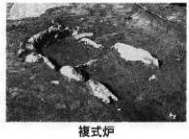
遺構は縄文時代中期と思われるが、遺物は縄文時代早期から晩期までと様々である。調査区の大半は削平をうけているが、かつては、これらの遺物を生み出した遺構が存在していたはずである。東西を山に挟まれた窪地であるが芦名沢Ⅱ遺跡は長く土地利用されていたことが分かった。



芦名沢Ⅱ遺跡遺構配置図

調査前風景（北から）

竪穴住居跡



複式炉

早期の土器出土状況

早期の土器出土状況

調査区（南から）

芦名沢Ⅱ遺跡遺構配置図・検出遺構

(14) 米沢(まいさわ)遺跡

所在地	二戸市米沢字家の上200番2ほか
委託者	日本鉄道建設公団盛岡支社
事業名	東北新幹線盛岡・八戸間鉄道建設工事
発掘調査期間	平成10年7月1日～10月22日
調査対象面積	6,505㎡
発掘調査面積	6,505㎡
遺跡番号・略号	ＩＥ99－0390・ＭＺ－98
調査担当者	工藤　徹・相津吉彦
協力機関	二戸市教育委員会

遺跡位置　　1：50,000 一戸

1．遺跡の立地

米沢遺跡は二戸市役所の北西約2.1km、東日本旅客鉄道東北本線斗米駅の西側10m地点に位置する。市内を北流する馬淵川左岸に形成された河岸段丘上に立地しており、遺跡の標高は102～106mで、東方約300mの馬淵川との比高は約25mを測る。遺跡の南方約150m地点には沢内川が流れており、約400m東流して馬淵川に合流する。遺跡の現況は、水田・畑地・宅地である。本遺跡の周辺には、家の上遺跡、沢内遺跡、沢内Ｂ遺跡、荒谷遺跡、荒谷Ｂ遺跡、長瀬遺跡群、上村遺跡、下村遺跡などがある。

2．調査の概要

本遺跡の発掘調査は、平成10～11年度の２カ年計画で行われる予定であり、今回はその１年目にあたる。調査区は南北に細長く延びているが、南端部では Ｉ層（耕作土）直下が礫層となり遺構は確認されず、出土遺物もごく僅かであった。これに続く調査区南側部分でも遺構は検出されず、遺物は小コンテナで約0.5箱ほど出土したのみである。遺構・遺物が多く確認されたのは、調査区中央部から北側にかけてである。今回の調査で検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡５棟、平安時代の竪穴住居跡４棟、土坑26基、柱穴状土坑69基、炉跡・焼土遺構６基、溝状遺構６条である。

＜縄文時代の竪穴住居跡＞　調査区のほぼ中央部から５棟検出された。１号住居跡は平面形がややゆがんだ隅丸方形を呈しており、規模は3.2×3.3m、壁高は10～40cm、床面中央から南西寄りに地床炉を持つ。柱穴は11基検出された。出土遺物は縄文土器片３点と少なく、時期を推定するには資料不足であるが、検出面等から縄文時代前期以降と思われる。２号住居跡は１号住居跡に切られる形で検出された。３号住居跡は平面形がほぼ隅丸方形を呈し、規模は2.7×2.5m、壁高は60～70cmを測る。壁際には溝状に掘りこまれた壁柱穴を持つ。出土遺物はなく時期については明確ではないが、検出面等から縄文時代前期のものと思われる。４号住居跡は直径約3.4mの円形の住居で、壁高は10～15cmである。遺構の時期は出土した土器の特徴や検出面から縄文時代後期と思われる。５号住居跡は一部調査区外へ延びており全容は明かではないが、平面形はほぼ円形と思われ、直径3.9m、壁高9～11cmである。床面中央部に石囲炉を持ち、柱穴は壁際に５基確認された。石囲炉近くでほぼ完形の深鉢形土器１点が出土している。遺構の時期は出土した土器の特徴、

検出面等から縄文時代後期に属すると思われる。

＜平安時代の竪穴住居跡＞ 調査区の中央北側から北端にかけて４棟検出された。いずれも調査区外に延びており全容は明かではないものの、検出した部分から推定すると形状は方形で、一辺が4.5～5.0m、壁高は45～70cmと考えられる。埋土は自然堆積の様相を呈し、いずれにも十和田ａ降下火山灰をブロック状に含んでいる。床面は南部浮石の上面まで掘りこまれ、硬く締まる。７号住居跡は北西壁にカマドを持つ。床面には炭化材が散在しており焼失を受けたものと考えられる。８号住居跡は北壁の中央やや東寄りにカマドを持ち、残存状態は比較的良好である。燃焼部には赤褐色を呈する焼土が形成され、煙道部は燃焼部から煙出し部に向かって緩やかに上昇する構造を持つ。煙出し部は柱穴状に落ちこみ、大小の礫が入り込んでいる。床面及び床面直上には多量の炭化材、現地性の焼土が検出されており、この住居跡も焼失を受けたものと思われる。東壁とその周囲には住居跡に伴う施設が構築されているものと思われる。

＜土坑＞ 調査区全体で26基検出された。多くは竪穴住居跡周辺で確認している。規模・形状は一様ではなく、平面形は円形・楕円形・隅丸長方形に、断面形は円筒形・皿形・浅鉢状などに大別される。遺物の出土した土坑は８基あるが、遺物量は少ない。底面に副穴を持つものは３基あり、検出した土坑の中では比較的大きく、直径160～200cmほどである。個々の時期については未検討であるが、出土遺物や検出面等から縄文時代前期、後晩期、平安時代に分類できると思われる。用途・性格についても不明な点が多いが、墓壙と思われるものが２基確認されている。

＜柱穴状土坑＞ 調査区中央部から北側にかけて69基検出した。規模は直径25～40cm、深さ30～60cmである。これらの配列からは住居跡の柱穴とは断定できず、住居の床面となる痕跡も確認されなかった。いずれも用途については不明である。出土遺物もほとんどなく、わずかに１号柱穴状土坑から縄文土器片１点が出土しているだけである。

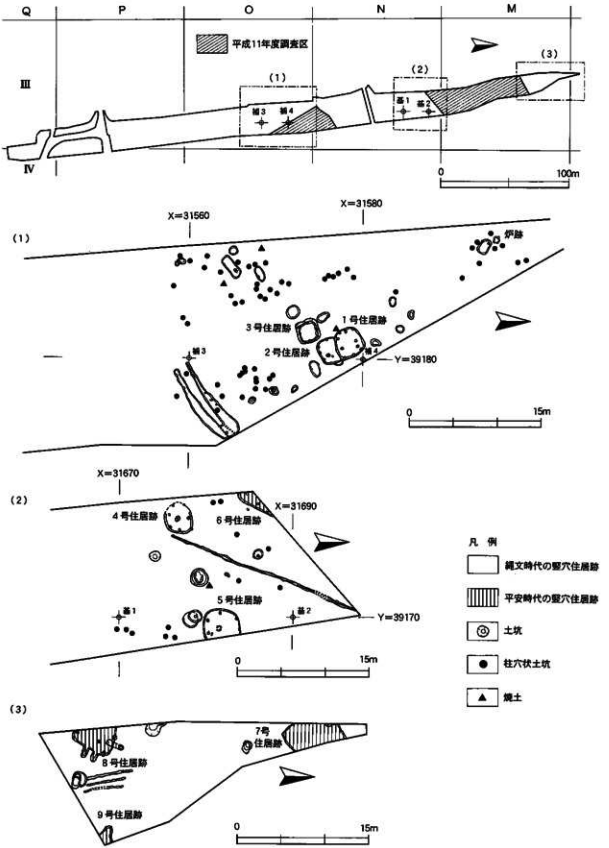
＜炉跡・焼土遺構＞ 炉跡１基、焼土遺構５基を検出した。炉跡は石囲炉で、楕円状に70×60cmの規模で大小の礫によって構築されている。住居内の炉跡の可能性は十分にあるが、炉跡の周辺は重機により1.5mの深さまで破壊されており、明確な柱穴や床面と判断できる痕跡も確認されなかった。焼土遺構５基は形状・規模とも一様ではない。出土遺物もなく、時期については特定できない。

＜溝状遺構＞ ６条検出された。最大のものは、長さ23m（さらに調査区外に延びる）、幅25～40cm前後、深さ30cm前後で、北東方向に延びる。調査区の北端で検出された３条はほぼ等間隔で、幅25cm前後、深さ10cmほどで、北に向かって延びている。埋土には十和田ａ降下火山灰が含まれる。出土遺物はない。

＜出土遺物＞ 出土した遺物は大コンテナで3.5箱である。その内、縄文土器は２箱で、時期は早期から晩期までの幅を持つが、前期と思われる土器の割合が多い。土師器は１箱出土している。９世紀後半から10世紀初頭と思われる甕、坏が住居跡を中心に出土している。土製品は土偶が１点、土器片を加工したと思われる円盤状土製品３点、近世と思われる泥面子１点が出土している。石器は0.5箱で、石鏃・石匙・尖頭器・削掻器類・磨製石斧・磨石・凹石・敲石等があり、石製品は砥石が１点出土している。その他、近世の陶磁器片１点、鉄滓２点が出土している。

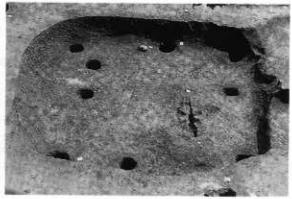
３．まとめ

今回の調査により本遺跡が縄文時代・平安時代の集落跡であることが判明した。周辺の遺跡からもほぼ同時代・同時期の遺構・遺物が確認されており、それらとの比較・検討を進め、分析・考察を加えることにより本遺跡の性格・内容をよりいっそう明らかにしていきたい。次年度も本遺跡の発掘調査が予定されており、調査が進むにつれ遺跡の全容が解明されるものと思われる。


Q
P
O
N
M
平成11年度調査区
Ⅲ
Ⅳ
(1)
(2)
(3)
補3
補4
基1
基2
0
100m
(1)
X=31560
X=31580
炉跡
3号住居跡
1号住居跡
2号住居跡
補3
補4
Y=39180
0
15m
(2)
X=31670
X=31690
4号住居跡
6号住居跡
5号住居跡
基1
基2
Y=39170
0
15m
(3)
7号住居跡
8号住居跡
9号住居跡
0
15m
凡 例
縄文時代の竪穴住居跡
平安時代の竪穴住居跡
土坑
柱穴状土坑
焼土

米沢遺跡遺構配置図

調査区全景（南から）



1号竪穴住居跡（縄文）

3号竪穴住居跡（縄文）

8号竪穴住居跡（平安）

同左　カマド跡

遺物出土状況

遺物出土状況

米沢遺跡検出遺構・出土遺物

(15) 狼沢(おいのさわ)Ⅱ遺跡

所　在　地	花巻市狼沢８地割
委　託　者	日本道路公団東北支社
事　業　名	東北横断自動車道釜石秋田線 建設工事
発掘調査期間	平成10年４月13日～７月15日
調査対象面積	3,040㎡
発掘調査面積	3,040㎡
遺跡番号・略号	ＭＥ15－1313・ＯＳⅡ－98
調査担当者	鳥居達人・中村比呂志
協力機関	花巻市教育委員会

遺跡位置　　1：50,000 花巻

1．遺跡の立地

岩手県花巻市狼沢８地割内に位置し東北自動車道花巻インターチェンジからほぼ南方に２km、東北自動車道下り車線沿いから 100mほど西方に離れたところにある。

遺跡は標高が平均97m前後で全体が平坦である。現況は山林で、巨大な杉や檜が立っていた。近所の住民の話によると、昨今は田など農地には利用されていなかったらしい。

基本土層は、遺跡北側Ⅰ区は表土の下はわずかに黒褐色土が堆積しその下は褐色土となる。遺跡中央部のⅡ区は、遺跡全体の中で比較的標高の低いところであり、黒褐色土が残存している区域で、特に沢跡と思われる部分と住居跡が検出された部分では40～50cmと厚い。その下に暗褐色土（10cm程度）褐色土そして黄褐色土となっている。しかし、沢跡の南側と住居跡検出部分の西側はⅠ区と同じように褐色土が薄く堆積するのみである。

遺跡南側Ⅲ区は住居跡の検出された部分は遺物含有層である暗褐色土が比較的厚く堆積し、その下に褐色土、砂状の黄褐色土となっている。その南側は表土の下は褐色土がわずかに残る程度である。

2．調査の概要

本調査区で検出された遺構は、竪穴住居跡が２棟、掘立柱建物跡が１棟、陥し穴４基、土坑21基、柱穴と柱穴状ピットあわせて61基、溝が９条である。

＜平安時代の竪穴住居跡＞　平安時代の竪穴住居跡が２棟検出されている。土器の出土状況からどちらも９世紀なかごろから９世紀後半のものと思われ、カマドはどちらも東側壁の南寄りに付設されている。

１棟は調査区南側の標高のやや高いところで検出された。大型の隅の丸い長方形型をしており、その長軸の長さは６mほどである。カマドは東側斜面の南に付設されており、煙道を堀り込んで作られている。カマドのそでを礫で形成し、芯材として土師器のかけらが使用されていた。また、支脚を土師器のカメを逆さにして使用している。

もう１棟は調査区中央部で検出された。正方形に近い形をしており長さは６mで、その床面積は上記のも

のより少し大きい。カマドは東側斜面の南に付設されているのは同じであるが、その規模は大型で煙道が短く、カマドを礫で囲み、その礫の下をくり抜き煙出しとしている。また、カマドの南側の床面を掘り込んで構築したような形跡が見られる。

２棟とも南壁際に２～３基の柱穴を確認できるが、その他の柱穴は判然としない。南壁際に２つの柱穴状のピットが見られるのも大きな特色である。

＜掘立柱建物跡＞　１基検出。間取りは２間・１間。調査区外にかかるために全体像は把握できなかった。柱穴は小さなもので、柱痕も認められる。地域の人の話によると以前この近辺に小屋のようなものがあったらしい。

＜陥し穴＞　４基検出。大型のもの３基、小型のもの１基。東西に１列に並んでいるかのように検出された。大型のもの３基のうち２基は明確な逆茂木痕をもつ。２号埋土下位から縄文土器片が出土した。

＜土坑＞　22基検出。埋土から縄文の土器片が出土したのは１基のみである。

＜溝＞　９条検出。北東－南西２条で、そのうちの１つは深さ30cmと深い。北西－南東７条は浅いものがほとんどである。３号溝の壁の黒色土から縄文土器の深鉢が出土したが、溝との関連性は低いと思われる。

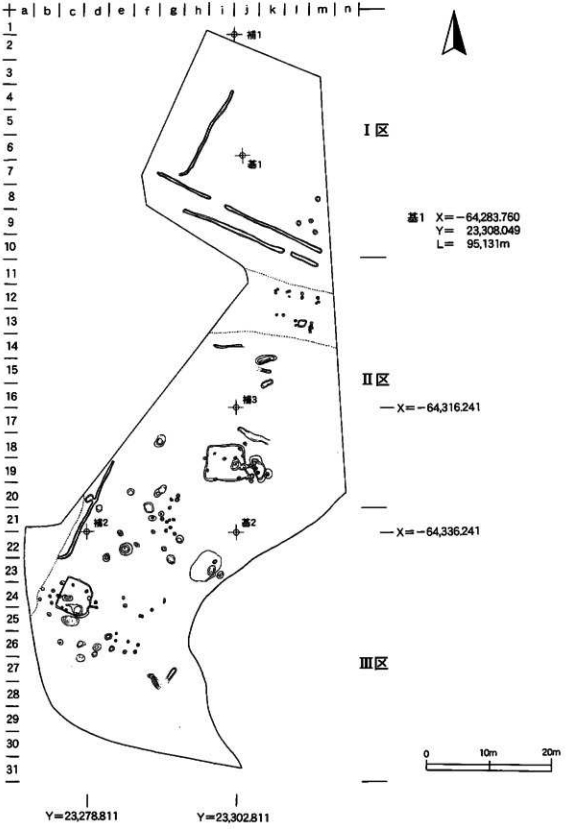
＜柱穴＞　大型のもの（長軸50cm程度）が、調査域南区から３基、北区から４基、また調査区中央区からも中型のもの（長軸30cm程度）が数基検出された。南区の３基は埋土などから縄文時代の掘立柱建物跡の可能性もある。中央区は平安時代、北区のものは比較的新しいものではないかと思われる。

＜柱穴状ピット＞　43基検出。ほとんどが並ばないように思えるが、沢跡に列を成すものもある。近世から近代におけるものと思われる。

＜出土遺物＞　土器は、土師器や須恵器が大コンテナで１箱出土している。これらはすべて２つの住居跡の埋土から床にかけてのものである。縄文土器は少なく、破片で10片ほど出土している。南区と中央区の比較的暗褐色土の残っているところからの出土で、さらに北区の黒褐色土からはほぼ完形に近い縄文土器の深鉢も出土している。石器は、縄文土器の出土量に比べれば比較的多く、石匙・石箆を中心に50点ほど出土した。その他では古銭（永楽通寶）１点、陶器片（17世紀ごろ）２点が出土した。

３．まとめ

今回の発掘調査において狼沢Ⅱ遺跡は、９世紀中ごろから後半の平安時代の集落跡であることが確認された。検出された２つの住居跡はしっかりとしたカマドをもつ大型のものであり、調査区域は舌状の河岸段丘の先端に位置することから、この地域は平安時代において集落を形成し、それは大きな広がりをもっていたのではないかと思われる。また陥し穴等の遺構や遺物などから、縄文時代前期ごろから人々はこの地域になんらかの関係をもっていたこともわかった。これらは北上川支流の瀬川上流域において貴重な考古学的資料といってよいであろう。


a b c d e f g h i j k l m n
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31
補1
基1
補3
補2
基2
Ⅰ区
Ⅱ区
Ⅲ区
基1 X=−64,283.760
Y= 23,308.049
L= 95,131m
X=−64,316.241
X=−64,336.241
0 10m 20m
Y=23,278.811
Y=23,302.811

狼沢Ⅱ遺跡遺構配置図

調査区全景（w→）

平安時代の竪穴住居跡

カマド

溝跡

陥し穴

狼沢Ⅱ遺跡検出遺構

(16) 似内(にたない)遺跡

所在地	花巻市上似内第10地割66－1ほか
委託者	日本道路公団東北支社
事業名	東北横断自動車道路建設
発掘調査期間	平成10年8月7日～11月13日
調査対象面積	2,560㎡
発掘調査面積	2,560㎡
遺跡番号・略号	ME16－2299・NN－98
調査担当者	金子昭彦・松川由次・布谷義彦

遺跡位置　　1：50,000 花巻

1．遺跡の立地

似内遺跡は、ＪＲ東日本東北本線花巻駅から北東約3.5㎞に位置する。沖積古期面に立地し周囲より1～2m高い微高地にある。遺跡はＪＲ釜石線似内駅から北に広がる南北350×東西350mの上似内集落を範囲とする。今回の調査区は、遺跡のほぼ北縁に当たり、現況は水田および宅地で、標高は76m前後である。

2．調査の概要

今年度は工事優先部分を調査したため、調査区（C、D、H区）は飛び地になっている（遺構配置図参照）。H区は、削平されていたため遺構等は全く検出されなかった。C区西端、D区東端についても同様である。

検出された遺構は、古代の竪穴住居跡・住居状遺構11棟、中世の竪穴建物跡2棟、平安時代の須恵器埋設遺構1基、古代の溝2条、陥し穴状遺構29基、フラスコ状土坑1基、土坑13基で、古代のものはほとんど平安時代（9世紀）と思われる。土坑は、縄文時代の可能性のあるもの5基、古代の可能性のあるもの3基などである。この他、掘立柱建物跡17棟、柱穴列8基、柱穴状土坑416基、墓壙3基、竪穴6基、溝6条などが検出されているが、ほとんどが近世以降のものと思われる。

＜竪穴住居跡・住居状遺構＞　11棟検出したが、4棟は調査範囲外に続く。全て古代で、平安時代（9世紀）のものがほとんどと思われる。D区中央付近に集中する部分があり重複するものもあるが、他は点在と言った感じである。集中部には規模の大きなものが多く、点在するのは一辺が4m前後の比較的規模の小さなものである。カマドを持つかどうかがわかるもの7棟のうち、2棟は明らかにカマドを持たない。

カマドを持つ5棟のうち1棟は調査範囲外に続くので規模は不明である。他4棟は、一辺の長さが4m前後のものが2棟、残り2棟は、6×5.3m、8.9×8.3mである。カマドの方向は、北が2棟、東が4棟で、1棟がくり抜き式で、他は掘り込み式のようである。明らかな煙道の作り替えが見られたのが1棟、煙道がはっきりしないものが1棟あった。

6×5.3mのものは、カマド北脇に須恵器の大甕が埋設してある。煙道ははっきりしなかった（全体を掘り下げてみたが）。床面中央に非常に堅く締まる部分を持ち、炉跡らしい焼土が検出された。8.9×8.3mの大形住居は、南側が近現代の竪穴(窯か防空壕？)に壊されており、北カマドで、くり抜き式、煙道の長さ2.6m、煙出の深さ（検出面から）1m。四本柱で、柱痕跡がはっきりと残っており、底面はグライ化していた。時期は9世紀初頭のようである。

カマドを持たない２棟のうち、１棟は、Ｄ区の最も大きな住居の東隣にあり、規模6.8×6.3m、北西隅に小さな張り出し部を持つが、底面は堅く締まらないので出入口のようには思われない。床中央に炉を持ち、その他にも焼土を７カ所持つ。炉付近の床は非常に堅く締まる。柱穴配置等、前述の６×5.3mの住居に共通する点を多く持つが、この遺構が特筆されるのは、埋土から金が出土したことである（後述）。

もう１棟は、Ｄ区西端のカマドを持つ住居の埋土中に検出され、黒土の上に赤土を貼って床としたものである。単なる埋土の一部とも考えられるが、表面が凸凹して堅く締まり、その上面から多くの土器が面的に出土したことから、別の住居と考えた。規模ははっきりしないが、一辺４m程度で、周溝を持つようである。

＜竪穴建物跡＞ 中世の竪穴建物跡は、Ｃ区西半部に２棟検出された。出土遺物がないので時期は特定できない。２棟とも一辺が３m前後の隅丸方形で、１棟は北西隅に、もう１棟は南辺中央に張り出し部を持つ。両方とも炉は持たない。

＜陥し穴状遺構＞ 溝のように細長く、幅が狭い割に深い長楕円形の土坑である。29基検出した。大きく見れば調査範囲全体に分布するが、密な部分と疎な部分がある。出土遺物が全くなく、時期を特定できない。フラスコ状土坑と重複したものが１基あり、本遺構の方が新しい。

＜フラスコ状土坑＞ Ｄ区中央よりやや西寄りに１基検出した。平面形は不整円形で、規模は開口部径約1.3m、底径約1.6m、深さ0.7m、陥し穴状遺構と重複し、本遺構の方が古い。

＜土坑＞ 13基検出した。縄文時代の可能性のあるもの５基、古代の可能性のあるもの３基、古代以降の可能性のあるもの５基である。古代の１基は、2.2×1.2mの楕円形で、深さ１m、ほぼ中層からは須恵器坏が流れ込むような形で出土している。その他の土坑からは、古代以降の１基を除き、遺物は出土していない。

＜溝＞ Ｃ区東端とＤ区西端の、別々の地点で検出したため２条としたが、その方向と形態の類似性から一つのものである可能性が高い。両方とも南北方向に延び、調査範囲外に続いており、幅約１m、深さ約0.6m、断面形は箱薬研。Ｃ区では埋土上層から須恵器坏、大甕の口縁部などが出土している。

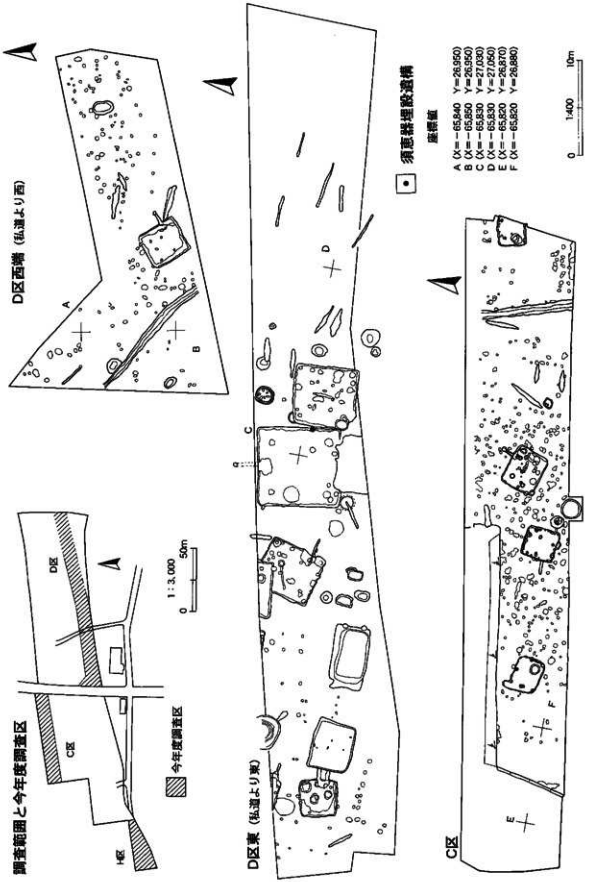
＜須恵器埋設遺構＞ Ｄ区の大形住居と住居状遺構の間に１基検出された。両方の壁を壊して埋設されており、より新しい。胴部最大径約20cm、高さ40cm程度の須恵器の壺（９世紀後半）が、正位に埋設されていた。重機による表土剥ぎの際に出土したので不明な点が多いが、口縁部を打ち欠いており、須恵器大甕の胴部破片で蓋をしていた可能性がある。出土状況から蔵骨器の可能性もあるが、骨等は出土しなかった。

＜出土遺物＞ 平安時代（９～10世紀）の土師器・須恵器が大コンテナ９箱出土し、須恵器の出土が非常に多く約半分を占める。この他、近世の陶磁器が約１箱出土しているが、縄文土器は出土していない。石器は、９点出土し、砥石が多くを占めるが石皿もある。出土位置からほとんどが古代のものである。鉄器は、14点出土し、雁股鏃、刀子等がある。住居状遺構埋土上部から出土した金は、1.2×0.4×0.3cm、重さ1.22ｇの小さなもので砂粒等を含んでいる。

３．まとめ

今回の調査で、平安時代の集落跡、中世、近世の集落跡が検出された。類例から考えれば、今回の調査区は、縄文時代には、フラスコ状土坑、陥し穴状遺構が掘られ、ある時期狩猟の場であったと推測される。

似内遺跡の調査は今回が３度目で、前２回は花巻市教育委員会が今回の調査区（Ｄ区）の南側を調査し、平安時代の住居跡を検出している。Ｄ区中央よりやや西寄りの南に隣接した部分では、今年度、竪穴住居跡から353点の土師が出土した。今回の調査でもＤ区からは平安時代最大規模の竪穴住居跡や金の出土など注目すべき成果が得られている。調査は来年度も継続しＤ区北側も調査予定に入っている。その成果が大いに期待されよう。


D区西端（私道より西）
A
B
C
D
E
F
須恵器埋設遺構
座標値
A (X=—65,840 Y=26,950)
B (X=—65,850 Y=26,950)
C (X=—65,830 Y=27,030)
D (X=—65,830 Y=27,020)
E (X=—65,820 Y=26,970)
F (X=—65,820 Y=26,980)
0 1:400 10m
D区東（私道より東）
C区
調査範囲と今年度調査区
D区
C区
H区
今年度調査区
0 1:3,000 50m

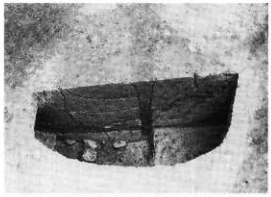
似内遺跡遺構配置図

調査区全景（南上空から）

最大規模の竪穴住居跡

金が出土した住居状遺構

竪穴建物跡



陥し穴状遺構と重複するフラスコ状土坑

須恵器埋設遺構

カマド脇に埋設された須恵器大甕

似内遺跡検出遺構・出土遺物

(17) 高松寺遺跡（たかまつでら）

所在地	花巻市高松第26地割39－1ほか
委託者	日本道路公団東北支社
事業名	東北横断自動車道路建設
発掘調査期間	平成10年4月10日～8月7日
調査対象面積	8,250㎡
発掘調査面積	8,250㎡
遺跡番号・略号	ME27－1104・TKM－98
調査担当者	金子昭彦・松川由次

遺跡位置　　1：50,000 花巻

1．遺跡の立地

高松寺遺跡は、ＪＲ東日本東北本線花巻駅の東約5.5km、東北新幹線新花巻駅の南約1kmに位置し、丘陵地に立地している。現況は原野で、標高は105～130m前後である。

2．調査の概要

調査区は、沢を挟んでＡ区とＢ区に分かれている（遺構配置図参照）。

Ａ区は、調査前から寺跡とわかっており、土塁、参道跡が確認されていた。調査では、土塁に囲まれた平場に礎石建物の痕跡を検出した。しかし土塁及び平場の規模に比べて非常に小さく、その続きがあるものと思い周囲を検出したが、確認できなかった。この他、縄文土器片数片、石鏃等の石器数点も出土している。

Ｂ区では、平安時代の竪穴住居跡１棟、縄文時代晩期後葉の捨て場１ヶ所、時期不明の溝１条を検出した。

＜竪穴住居跡＞　Ｂ区中央の沢のすぐ西に１棟検出した。斜面にあり、規模は３×2.8m、東カマドで、煙道は掘り込み式、カマドを挟むように南壁と東壁に周溝が見られる。土鍋、紡錘車が出土している。出土遺物から平安時代（９世紀）と思われる。

＜礎石建物跡＞　Ａ区平場に検出。残りが悪く礎石は残っていなかったが、割れた板状の石を含む根石の集中区が６箇所並んで検出された。平場の中で中央の西端に著しく偏っており、またその検出状況からして（平場の項参照）、これだけで建物を構成するとは思われないが、梁行１間桁行２間、梁方向の柱間３m、桁方向の柱間1.5mである。根石周辺から古銭が３点出土しており（寛永通宝（新）ほか）、江戸時代にこの建物が建っていた可能性が高い。

＜平場＞　Ａ区南に１ヶ所検出。調査範囲外（南）に続く。調査時には平面形が台形状を呈していて、北辺が短く12m、南辺が17m、西辺が17mで、東辺は崖になっているためはっきりしない。北東から南西方向に走る尾根（平場の中心よりやや西寄りと想定される）を削平し、東側斜面に土を盛って（最大厚0.5m）造成したものである。ただし平場とは言え東に向かって傾斜しており、生えている木が何れも若いことから考えて、木を切り出す際に削平等の改変を受けている可能性が高い。

＜土塁＞　平場を西から南にＬ字状に囲んでおり、大部分が南側の調査範囲外に続く。最大幅５m、最大高0.8mで、赤土を緩やかな山形に盛っている。

＜参道跡＞　平場から尾根沿いに北西方向に延び、調査範囲外に続いている。幅約3.5m、最大深約１mで

断面形は緩やかなU字形。両脇に土はほとんど盛っていない。この参道は、途中で痕跡的になってしまうが、下の観世音、白山神社を経由して丘陵下まで続いている（遺構配置図参照）。

<溝>　B区東端の尾根のすぐ脇に1条検出した。南北に延び調査範囲外に続いている。幅5～8m、深さ0.5m～3.5m、断面形は箱薬研に近い。両脇に土は盛っていないようである。調査範囲外では浅くなり痕跡的になっている所もあって、どこに続くのかはっきりしない。遺物も出土していないので、時代も特定できない。

<捨て場>　B区西寄りの南北に延びる沢跡の上部（南側）から、縄文時代晩期後葉（大洞A1～2式）の土器がまとまって出土した。埋まりかけた沢に土器を投げ込んだような出土状態である。該期の土器は、B区尾根脇からもブロック状に出土した。また、B区の沢に囲まれた平坦部の先端に黒土層が顕著に検出された（遺構配置図）。土器等の人工物は出土しなかったが、土壌から有機質のものを捨てた可能性がある。

<出土遺物>　縄文土器、弥生土器、土師器が大コンテナで3箱出土しており、弥生土器と土師器は、それぞれ0.5箱弱である。縄文土器は、後期前葉の土器が数点の他は大部分が晩期後葉（大洞A1～2式）で、弥生土器は、後期の土器が比較的多く出土している。土師器は平安時代の土器で、形になるものは少ないが鍋が出土している。石器類は、90点出土しているが、半分は石器製作時の剥片で、残り半分も磨敲器類が多く石鏃等の定形剥片石器は少ない。その他、縄文時代晩期後葉の中実結髪土偶1点、鉄製品は紡錘車が1点、古銭が3点出土している（一つは寛永通宝（新）、他はサビがひどくて不明）。

3．まとめ

今回の調査で、縄文時代晩期後葉の捨て場、平安時代の竪穴住居跡などが検出されたが、肝心の高松寺については、礎石建物の痕跡と古銭から、江戸時代には存在していたらしいとしかわからなかった。

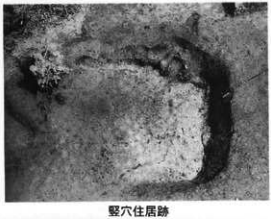
参道下の脇に古碑があり、それによると、高松寺は真言宗の寺で山号鷹尾山と称し、元は高松にあり山火事に遭って現在の鮫掛に再興されたが、明治維新となり廃寺になったらしい。草創年代、再興年代とも不明だが、元の高松寺跡と言い伝えられている場所からは古常滑が出土しているようである。

遺跡位置（右側は元の高松寺跡と言い伝えられている場所）

高松寺遺跡検出遺構（1）

B区からA区を望む

B区尾根付近（西から）



竪穴住居跡

A区平場付近（北から）

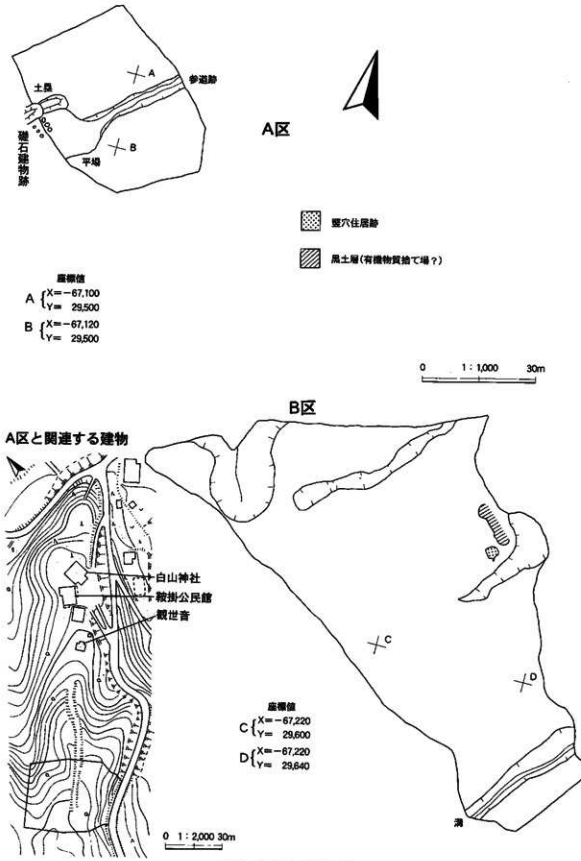
平場と土塁

礎石建物跡

参道跡（北から）

溝（南から）

高松寺遺跡検出遺構（2）


A区
土塁
礎石建物跡
参道跡
平場
A
B
竪穴住居跡
黒土層（有機物質捨て場？）
座標値
A X=−67,100 Y= 29,500
B X=−67,120 Y= 29,500
0 1：1,000 30m
B区
A区と関連する建物
白山神社
鞍掛公民館
観世音
C
D
座標値
C X=−67,220 Y= 29,600
D X=−67,220 Y= 29,640
0 1：2,000 30m

高松寺遺跡遺構配置図

(18) 上駒板遺跡（かみこまいた）

所　在　地	花巻市高松第32地割100ほか
委　託　者	日本道路公団東北支社
事　業　名	東北横断自動車道釜石秋田線建設
発掘調査期間	平成10年8月6日～10月1日
調査対象面積	6,640㎡
発掘調査面積	6,640㎡
遺跡番号・略号	ME27－2317・KKI－98
調査担当者	岩渕　計・菊地榮樹・布谷義彦
協力機関	花巻市教育委員会

遺跡位置　　1：50,000 花巻

1．遺跡の立地

上駒板遺跡は東北新幹線新花巻駅から南東に約3.0㎞に位置し、北上山地西端の中起伏山地に続く丘陵地と、山地を北方向に流れ、北上川に注ぐ小河川によって開析された沖積地の東側斜面に立地している。調査開始以前は水田で、棚田状に造成されている。また調査区を生活用道路が、南北と南西方向に走っている。

2．調査の概要

調査区を便宜上、生活用道路と高低差から、南西部分をA区、北東部分をB区、南東部分をC区、北西部分をD区として調査を行った。遺構・遺物が検出されたのはC区の東側とA区の東端部と西側で、その他の区域は水田造成時の旧地形の改変により、地山部分まで削平されており、遺構は確認されず、出土した遺物もごく僅かであった。またD区は山地からの出水により、湿地になっており、調査は不可能であった。検出された遺構は、土坑6基、焼土遺構1基、陥し穴状遺構1基、溝状遺構2条、柱穴状小土坑127基である。

＜土坑＞　平面形は円形、楕円形、隅丸方形である。遺物が出土したのは、C区の東側から検出した3基で、時期は縄文時代晩期と推定される。その他の土坑は出土遺物がなく、時期は不明である。

＜焼土遺構＞　C区の東側で検出されたが、焼成は良好ではない。出土遺物はなく、時期は不明である。

＜陥し穴状遺構＞　C区の南端部で検出した。形状は溝状を呈している。長さはおよそ3～3.5mで幅が約70cm、深さが約50cmである。出土遺物はないが、形状から、時期は縄文時代であると推定される。

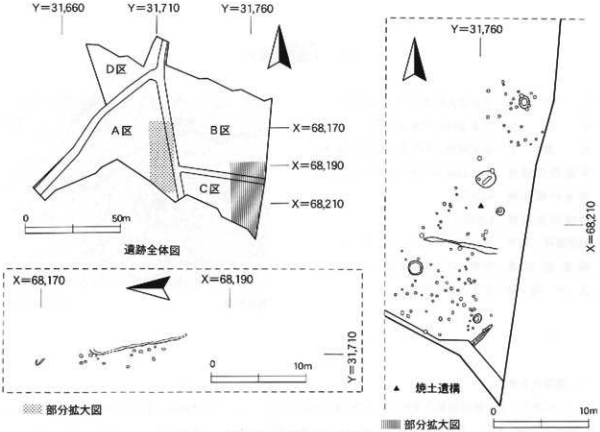
＜溝状遺構＞　A区検出の溝跡は、土師器片が1片出土している。C区検出の溝跡は、出土遺物はない。

＜柱穴状小土坑＞　建物跡と断定できる柱穴列はないが、縄文土器片や石器、土師器片が出土している小土坑があり、該期の遺構の可能性がある。また近現代の耕作に伴う小土坑もあると思われる。

＜出土遺物＞　土器が大コンテナで約1箱、石器が小コンテナで約1箱出土している。土器は縄文時代晩期の土器とロクロを使用した土師器が主体である。石器は石鏃、削掻器、打製石斧などが出土している。

3．まとめ

今回の調査で、縄文時代晩期、平安時代の人々の生活の痕跡が断片的に確認できた。遺跡は広い範囲で削平され、その主体部の存在は不明であるが、周辺に集落跡などが残っている可能性はあると思われる。



上駒板遺跡遺構配置図

遺跡近景

陥し穴状遺構

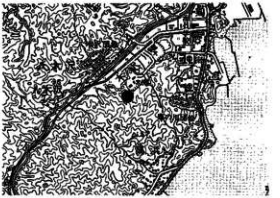
土坑断面

土器出土状況

上駒板遺跡検出遺構・遺物出土状況

(19) 島田（しまだ）Ⅱ遺跡

所在地	宮古市大字八木沢第４地割ほか
委託者	岩手県住宅供給公社
事業名	宮古短大地区宅地造成事業
発掘調査期間	平成10年５月25日～８月31日
発掘対象面積	4,500㎡
発掘調査面積	4,500㎡
遺跡番号・略号	ＬＧ43－0338・ＳＭＤⅡ－98
調査担当者	浜田　宏・酒井宗孝・小山内　透 宮本節子・星　雅之・杉沢昭太郎 玉山健一
協力機関	宮古市教育委員会



遺跡位置　　1：50,000 宮古

１．遺跡の立地

島田Ⅱ遺跡は、JR東日本旅客鉄道宮古駅の南方約2.5km付近に位置し、遺跡の北西部は県立宮古短期大学に接している。遺跡は、山地から北西～北東方向に延びる数本の尾根と、それに挟まれる深い埋没谷からなる。標高は17～84mで、最も高い尾根と現道路面との比高は約70mである。調査前の状況は、ほとんどが険しい山林で、一部が道路および休耕田となっている。

遺跡の周辺には、城館遺跡である磯鶏館山遺跡や八木沢古館・新館、古代集落の島田・中谷地遺跡、縄文・弥生・古代の複合遺跡である上村貝塚など、かつて本調査された遺跡も数多い。

２．調査の概要

今回の調査は、平成９年度に実施された当事業に係る県教委文化課の試掘調査の結果を受けて、当センターが全域にわたる遺構・遺物の分布状況を確認し、遺跡の範囲および全体規模を把握する目的で行われた詳細分布調査である。

調査は、尾根から谷に向かう急斜面を除く尾根の頂部や大きな埋没谷を中心に、それぞれ幅1.5～３m、長さ５～30m程度の試掘トレンチを設定し、遺構と遺物の分布状況を確認しながら進めた。遺構が検出されたトレンチについては、１／100で平面図を作成し、フィールドカードにその内容を記載した。出土遺物についても、トレンチ毎に層位で取り上げその種類・出土量等を記載した。遺跡総面積165,000㎡に対し、最終的に試掘トレンチ170本、面積にしておよそ4,500㎡の試掘調査となった。

調査の結果、検出された遺構は、平安時代の竪穴住居跡および住居状遺構が110棟、土坑墓40基、縄文時代の陥し穴状遺構５基、炭窯３基、製鉄・鍛冶関連５箇所（炉跡２基含む）、溝状遺構５条である。

３．試掘調査結果

昨年度の文化課による試掘調査では、主に尾根頂部の平坦面にトレンチが設定され、古代の遺構・遺物が確認されていた。その結果を基に、今年度は残りの尾根頂部と大小の埋没谷部分、谷部の裾や尾根の縁の比

較的緩やかな斜面部等に、地形に合わせたトレンチを設定した。

＜検出遺構＞ 設定した170本のトレンチのうち、何らかの遺構が確認されたものは75本のトレンチに及び、尾根部では主に竪穴住居跡や住居状遺構が、埋没谷の裾に向かう緩斜面部では製鉄関連遺構（炉跡含む）が検出された。その他の検出遺構は、尾根部で見つかっているものがほとんどである。これらの尾根の平坦部は、最も幅が広い所で20～30m、平均的には幅10m程度と狭く、竪穴住居跡や住居状遺構は、数棟が重複している部分も見られた。竪穴住居跡の規模は、一辺が４～５m台のものが多く、７mを越える大型ものも確認された。この大型の竪穴住居跡と思われた１棟にサブトレンチを入れたところ、遺構確認面から住居床面までの深さは約50cmを測り、床面直上からは鉄製の大型釣針・刀子が出土した。このことから、遺構・遺物の残存状況は極めて良好と思われる。これらの時期は、出土した遺物などから９～10世紀代を中心とする平安時代と考えられる。

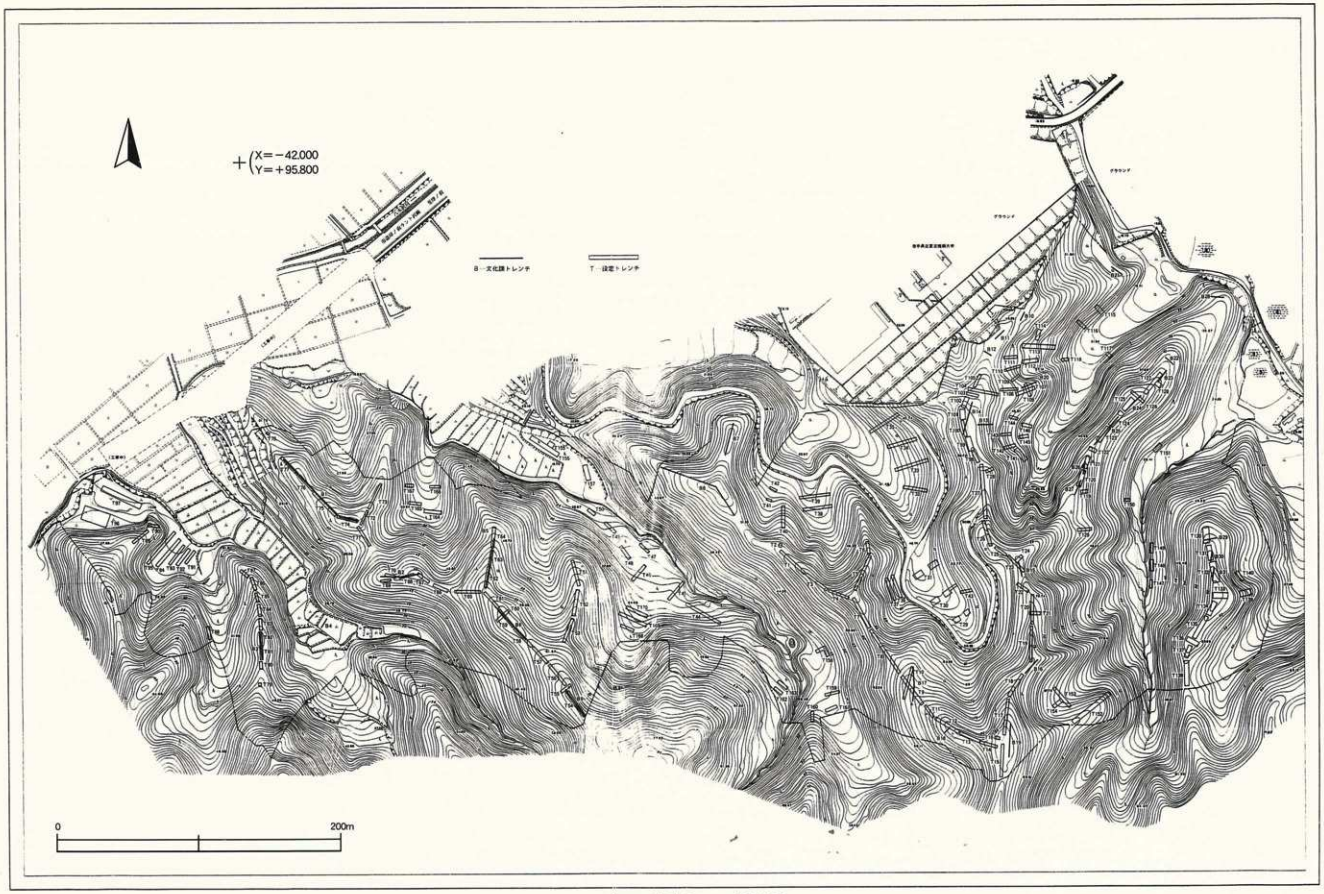
＜出土遺物＞ 土器類は、平安時代の土師器大コンテナ２箱、同じく須恵器小コンテナ１箱、フイゴの羽口中コンテナ１箱、縄文土器50点余りが出土した。土師器では坏が極端に少なく、羽口は数十個体に及ぶ。縄文土器の時期は、中期や後期が主体である。石器は、石鏃・磨石・砥石などが10点余り出土したのみである。鉄製品では、大型釣針１点、鉄鏃１点・鉈先１点のほか、刀子や角釘が併せて25点出土している。この他には、古銭２点（１点は「元豊通寶」もう１点は不明）、陶磁器20点余り、埋没谷から出土した鉄滓（製錬滓・鍛冶滓・流出滓）大コンテナ３箱、炉壁数点、獣歯（シカ）１点などがある。

４．まとめ

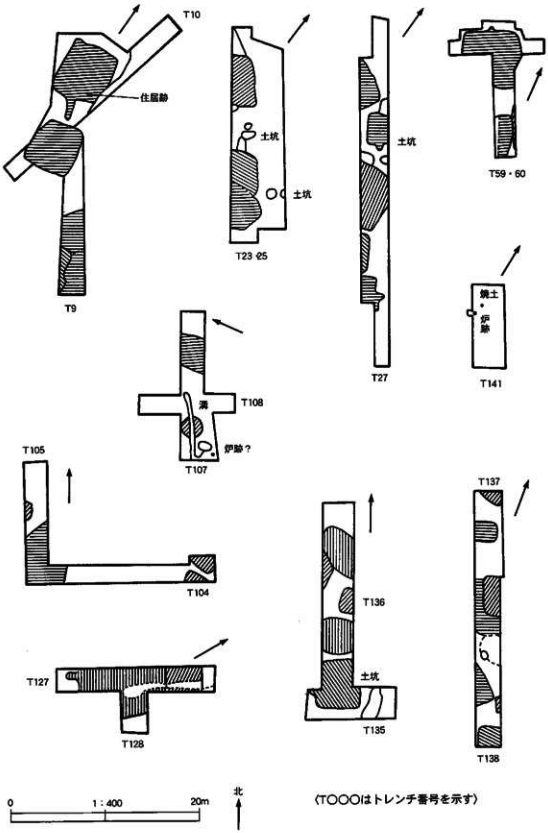
今回の試掘調査によって、本遺跡は、９～10世紀にかけての平安時代の大集落跡になることが明らかとなり、一部の地区で製鉄（鍛冶）関連遺構や遺物が確認されたことから、集落内の人々が生業の１つとして「鉄」に係わっていた可能性が高いと思われる。更に、大型の鉄製釣針が出土したことから、漁労に携わっていた人々がいたことも明らかである。いずれ、豊富な鉄製品を有する大集落であることは想像に難くない。遺構の密度は、調査区中央にある埋没谷の西側と東側で分けると、住居跡・製鉄関連遺構とも後者に集中しており、集落の中心は遺跡東側の海寄りにあることが予想される。

今後、全域の本調査が実施された場合には、多くの遺構の存在だけでなく、鉄生産・鉄加工あるいは漁業などの生業の面からも、該期の沿岸地域の様相が一層明らかとなるものと考えられる。

遺跡全景



島田Ⅱ遺跡トレンチ配置図



島田Ⅱ遺跡遺構検出状況図

基本層序

東区中央尾根部トレンチ

T22検出状況（住居跡）

T132検出状況（住居跡）

T138検出状況（住居跡）

T141炉跡検出状況

T111付近緩斜面

T141付近階段状の平場

島田Ⅱ遺跡遺構検出状況

Ⅲ. 岩手県・市関係

(20) 安栖野(あずまいの)遺跡

所在地	岩手県釜石町大字橋場 第４地割字安栖野129－19ほか
委託者	岩手県盛岡地方振興局
事業名	畜産経営環境整備
発掘調査期間	平成10年９月１日～10月28日
調査対象面積	4,000㎡
発掘調査面積	4,000㎡
遺跡番号・略号	ＬＥ02－2113・ＡＺＮ－98
調査担当者	浜田　宏・玉山健一
協力機関	釜石町教育委員会

遺跡位置　　1：50,000 釜石

１．遺跡の立地

安栖野遺跡は、JR東日本旅客鉄道釜石駅の西北西約6.5km、赤沢駅の北北西約2.7kmに位置し、釜石川の支流である安栖沢上流の南～南西向きの緩やかな尾根上に立地している。遺跡の標高は410～420mで、調査区南側は尾根の先端部にあたる。調査前の状況は牧草地である。

２．調査の概要

調査区は、過去に２回ほど草地造成工事を受けており、尾根頂部を中心に掘削が進んでいる。また、その際の整地層の厚さも30～60cmに及んでいる。

検出された遺構は、縄文時代の土坑７基、陥し穴状遺構１基である。

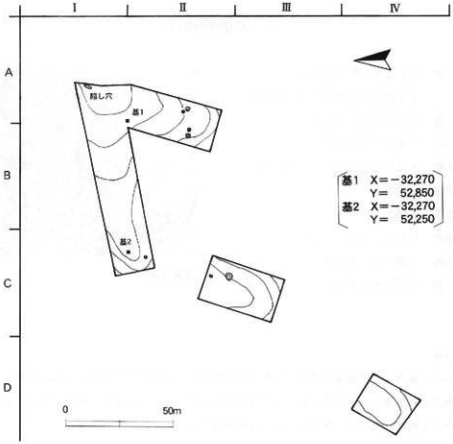
＜土坑＞　７基のうち、フラスコ形と呼ばれるものは２基検出された。ともに遺構上面は削平され、規模は開口部径90cm、底部径110cm程度である。他には、底面に副穴を３個有するものが１基あり、これは陥し穴状遺構の可能性もある。この規模は開口部径160cm、底部径110cm、深さ60cmである。

＜陥し穴状遺構＞　溝状を呈するものが１基検出された。規模は60×340cm、深さ80～90cmで、一部撹乱を受けている。底面に逆茂木痕は認められない。

＜出土遺物＞　中コンテナ１箱弱の縄文土器、中コンテナ２箱分の石器類が、すべて整地層中から出土した。土器の時期は、縄文時代前期前葉・後期・晩期末葉が主体である。石器類は、剥片石器、フレイク・チップ、残核類が１箱出土したが、製品が極端に少ない。この中は、石刃様の縦長剥片２点が含まれている。礫石器では、凹石・磨石・石皿などが見られるが、凹石の出土量が特に多い。

３．まとめ

今回の調査によって、少ないながら遺構・遺物とも確認され、本遺跡は縄文時代に狩り場や貯蔵場所として利用されていたことが明らかになった。前述のとおり、かつて行われた草地造成工事により地形改変が進み、消滅してしまった遺構もあったものと思われる。一方、遺物はすべて整地層から得られたものであるが、石刃様の石器や変形工字文を有する浅鉢形土器などは、今後この地区の該期の文化を考える上で、良好な資料となるものと思われる。



安栖野遺跡遺構配置図

遺跡全景

(21) 西舘跡（にしだてあと）

所在地	胆沢郡前沢町生母字西館46番地ほか
委託者	岩手県水沢市地方振興局
事業名	一般県道・前沢・東山線
発掘調査期間	平成９年８月１日～11月７日
調査対象面積	4,130㎡
発掘調査面積	4,130㎡
遺跡番号・略号	ＮＥ57－0193・ＮＤ－98
調査担当者	菊池貴広・半澤武彦
協力機関	前沢町教育委員会

遺跡位置　　1：50,000 水沢

１．遺跡の立地

本遺跡は、ＪＲ東日本東北本線前沢駅から東に約4.3km、北上川から東へ約1.5kmに位置し、北上川左岸に発達した更新世段丘上に立地する。地形が南北両側を深い谷に開析され、西方に張り出す舌状台地であり、西端が北上川の河床と約23mの比高がある明瞭な段丘崖となっている。本年度の調査範囲は、この舌状台地とその北側を開析する堀状の沢そして対岸の平坦面である。

２．調査の概要

調査は、現況平面図作成のため、範囲全体の雑物撤去から着手し、平行して試掘を行った。曲輪と推定測される部分はかつて畑であったが、現在は雛団状水田で地形が大きく改変され原地形を残すのは一部であるが、結果的に全面精査を実施した。

また、台地北側を開析する堀状の沢部分は、現況平面図を作成の後、重機を使用して断面調査をし、沢（堀状遺構）対岸も全面に及ぶ精査を実施したが、この部分から縄文土器の遺物包含層が検出された。

３．検出された遺構

①　縄文時代

土坑と雨烈溝及び遺物包含層が検出された。

（土坑）　沢の北側の平坦面で水田の耕作土を除去した地山面から３基検出された。規模は、径約2.5mで平面形は略円形と不整楕円形である。深さは約1.5m～約1.3mの範囲であるが、内２基は平面形・断面形とも不整形であり、土坑の性格については今後の検討課題である。１基については断面形がフラスコ状であり出土遺物から縄文時代後期初頭のものと想定される。

（雨烈溝・遺物包含層）　前記した土坑を検出した部分から南東から北西に延びる台地の南西斜面を開析する雨烈溝が１条検出された。上位部分は開田時に削平され、検出した部分で長さ約６m、幅約0.7m～0.4m、最深部で約1.2mほどの規模であり、旧地形の斜面部を台地頂上部から斜面を流れ落ちた小水路跡の可能性がある。

遺物包含層は、雨烈溝に接して検出された既述の不整形土坑、そして北側に隣接する窪地の埋土内に形成されており、縄文時代後期初頭の土器と石器が大コンテナで26箱出土した。出土した土器に官器が少なく、

ほとんどは破片で出土し復元可能個体は少ない。石器は約300点以上出土し、器種には石鏃や削器、掻器の剥片石器と凹石や磨石などの礫石器の他、石皿や磨製石斧などがある。

② 中世～近世

曲輪の他、土坑、堀跡状の沢がある

〔曲輪〕 調査範囲の主体をなす部分であるが、現状では南北両側を深い沢・崖で開析され最大幅約50m、奥行き約90mの広さを持つ舌状台地であり、既述のように元は畑であったが現在は雛壇状に削平して水田となり、旧地形はわずかに残存していたが、突端部よりを横断する溝が１条検出されたのみで、掘建柱建物跡に関係する柱穴状土坑は検出されず、曲輪として城館の一部となるかは不明である。

〔土坑〕 グリットⅡＣ区ⅡＢ区南東から縄文時代の遺構と同位面から2基検出されている。規模は検出面で径約3.7m～約3.0m、深さ2.0m～1.5mであるが平面形・断面形とも不整形である。性格は今後の検討課題である。縄文土器と石器を主体にかわらけ・須恵器・陶磁器片が出土し、時期の推定は今後の検討課題である。

〔堀状の沢〕 現況は道路や宅地となり不明であるが総延長約90m、最大上端約15m、底幅約15m、深さ約3.5mの規模があり、上流が狭く底面の標高が次第に高くなり浅くなる谷地形をなし、現況は水田として利用されていた。

実際の調査は上流部・中流部・下流部の３ヶ所に曲輪面から横断する試掘溝を設定し、明確な規模、底面の状態、人為的遺構なのかを明確にするため調査を行った。試掘溝は、当初人手で進めたが、底が深くなることが予測され重機に変更し、約3.5m掘り下げた層で砂礫層に到達し、底面であることは確認したが、降雨によって湧水が著しくて断面が崩壊してしまい、写真撮影や土層図の作成はできず、自然地形なのか人為的掘削の堀なのか、結論を得るに至らなかった。

③ 時代時期不明

〔溝〕 台地途端部から約13mの位置に横断する形で検出され、総延長約15m、幅が最大約1.5m、検出面からの深さ約0.5mの規模がある。検出位置は開田時に削平され旧表土が残存せず、地山面からの検出であり、上位が削平されたことは容易に推測される。埋土内から縄文土器片が出土したが時代時期・性格については今後の検討課題である。

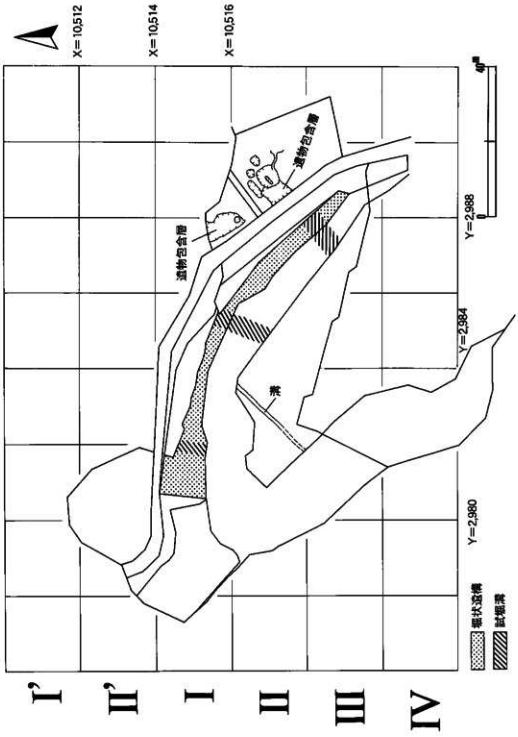
4．出土遺物

既述した雨烈溝と北側隣接地から縄文時代の土器片が大コンテナで26箱と石器・石製品が約300点以上ほど出土した。その他、中世・近世の遺物として陶磁器類の破片（高麗青磁片1点含む）や、古貨幣、かわらけがある。

5．まとめ

今回の調査範囲は曲輪と推測した台地と北側の堀状遺構であるが、台地は削平で旧地形が失われ中世遺構は検出されなかった。北側沢状地形は堀とされるが試掘溝の崩落で堀と断定するに至らなかったものの、前年度の調査結果から考察すると、本来は自然地形の沢であるが谷頭から尾根状台地を断切するように堀を掘削するなど、何らかの形で城館の施設の一部として機能していたと推測することは可能であろう。

縄文時代の遺構・遺物が確認され、土器・石器・石製品が大量に出土したが明確な遺構は確認できなかった。しかし、調査区外に縄文時代の遺構・遺物が存在する可能性が高い事は推測できるであろう。


A'
B'
C'
D'
A
B
C
D
I'
II'
I
II
III
IV
X=10,512
X=10,514
X=10,516
Y=2,980
Y=2,984
Y=2,988
遺物包含層
遺物包含層
溝
柵状遺構
試掘溝

西舘跡遺構配置図

遺跡全景

曲輪南東から

堀状遺構南東から

溝　南から

遺物包含層出土遺物状況

遺物包含層出土遺物状況

遺物包含層土坑北西から

遺物包含層土坑・雨裂溝南東から

西舘跡検出遺構・出土遺物

(22) 下醍醐遺跡

所　在　地	江刺市田原字高野前95ほか
委　託　者	岩手県水沢地方振興局
事　業　名	一級河川伊手川小規模河川改修工事 原体地区担い手育成基盤整備事業
発掘調査期間	平成10年4月13日～6月30日
調査対象面積	4,600㎡
発掘調査面積	4,600㎡
遺跡番号・略号	ＮＥ08－2047・ＳＤＧ98－Ｄ
調査担当者	木戸口俊子・佐々木志麻
協力機関	江刺市教育委員会

遺跡位置　　1：50,000 水沢・北上

1．遺跡の立地

下醍醐遺跡は、東北新幹線水沢江刺駅から北東約３km、県道玉里・水沢線の醍醐橋北側に位置し、伊手川左岸の沖積地に立地している。遺跡は概ね水田として利用されていたところで標高はほぼ46mである。

2．調査の概要

調査区を南北に分ける農道を境に南側調査区では、水田造成の際の客土と見られる層に縄文時代中期後葉の土器が多く含まれていた。遺構の多くは北側調査区からの検出である。低地では火山灰が堆積している。

＜竪穴状遺構＞　調査区北側に１棟検出している。規模は径５ｍ60cm～４ｍ60cm、壁高は40cmの楕円形の遺構である。焼土は検出していない。床面ではないが縄文時代の土器が出土している。

＜土坑＞　８基検出している。径220cm～95cm、深さは30cm～12cmで楕円形を呈しているものが多く、断面は擂鉢形である。遺物が出土した土坑は２基でいずれも縄文土器である。竪穴状遺構周辺に検出している。

＜焼土＞　３基検出している。いずれも縄文時代中期の土器が出土した南側調査区からの検出である。不整形で客土中の検出であり現地性のものではない。

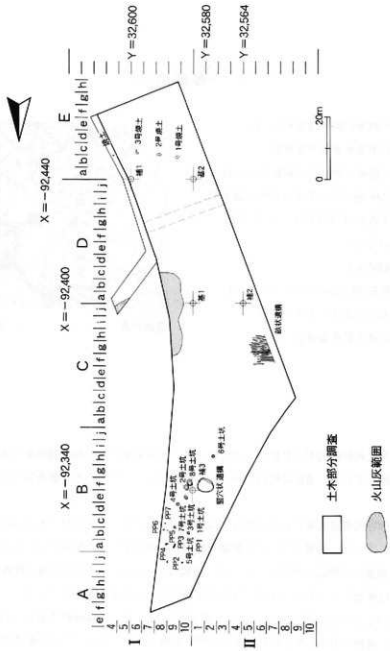
＜柱穴状ピット＞　８基検出している。径70～30cm、深さは42cmのものを除いてほとんどが20cm弱と浅いものが多い。建物跡になるようなつながりは見られなかった。土坑と同じ検出面である。

＜畝状遺構＞　砂層面で畝状に検出した。10ｍ×６ｍの範囲で14条確認することができた。もっとも深いところで13cmで南から北に傾斜しており徐々に浅くなっている。遺物は出土していない。

＜出土遺物＞　土器は大コンテナで4.5箱、石器は82点出土している。南側調査区から縄文時代中期後葉の土器がもっとも多く出土している。そのほか縄文土器、土師器、須恵器なども出土している。石器は剥片石器が８割を占める。そのほかキノコ形、円盤状、土偶などの土製品も出土している。

3．まとめ

今回の調査では河川の氾濫と見られる数層の砂礫層が確認されたが、その影響の少ない所に縄文時代晩期の生活の痕跡が見られた。調査区東方の微高地に集落の中心部があった可能性が高い。



下醍醐遺跡遺構配置図

遺跡近景

竪穴状遺構

下醍醐遺跡検出遺構

(23) 佐野原(さのはら)遺跡

所在地	水沢市佐倉河字佐野原35ほか
委託者	岩手県水沢地方振興局
事業名	県道水沢・米里線道路改良事業
発掘調査期間	平成10年10月1日～11月5日
調査対象面積	535㎡
発掘調査面積	535㎡
遺跡番号・略号	ME16－0365・SH－98
調査担当者	晴山雅光・平澤里香
協力機関	水沢市教育委員会

遺跡位置　　1：50,000 水沢

1．遺跡の立地

佐野原遺跡は、国史跡・胆沢城跡から南2.5kmの距離にあり、現在のＪＲ東北本線・水沢駅の北方約2.2kmに位置する。胆沢扇状地の東端、低位段丘である水沢段丘の縁辺にあたり、標高は45～47mである。現在の道路を挟んで西側は一段高い段丘面になっており、東向きの緩斜面に立地している。

2．調査の概要

今回の調査では、平安時代の竪穴住居跡が１棟、土坑が３基、中世以降と思われる土坑が７基、柱穴17個、柱穴状小ピット44個、時期不明の焼土が１、検出された。

＜竪穴住居跡＞　道路東側調査区の北東から検出された。一辺が3.5mの正方形と思われるが、東側壁面は削平され不明である。カマドや柱穴は検出できず、埋土上層からは土師器・須恵器が出土している。

＜土坑＞　平安時代の土坑が４基、道路東側調査区の西から検出された。どれも重複がみられ、焼土ブロックを多く含む土坑や土器を多く含む土坑のほか、深さ40cmと比較的深く掘り込まれ、下層に大型の須恵器壺片が出土したものなどがみられた。

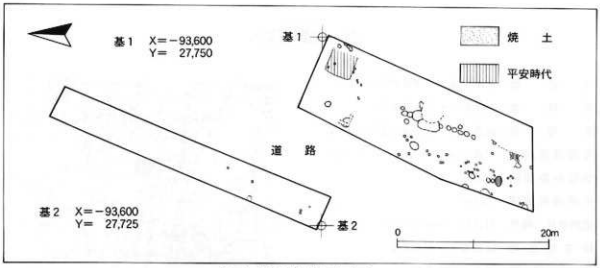
＜柱穴＞　口径が50cm以上で、形状が円筒形に掘り込まれたものを柱穴とした。道路東側調査区の中央に列をなしてみられる。

＜出土遺物＞　摩滅した縄文土器片が２片、不定形の剥片石器が１点のほか、土師器・須恵器片が中コンテナ（31cm×41cm×20cm）で１箱出土している。土師器には、内黒の坏、タタキの後ロクロ調整した甕などがみられ、須恵器では、坏、甕、壺などがみられる。

3．まとめ

今回の調査区は、現在の住宅に関わる建物の基礎部分や配管跡、造成時の切土や盛土によって大きく地層が改変されていた。また、今回検出の多くの遺構は、土師器や須恵器を埋土に含んでいるものの、一部陶磁器片を含む遺構もあり、比較的新しい時代のものと考えられる。

以上のことから、遺構については不明な点も多いが、出土遺物等より、縄文時代から現在まで、断続的に生活の痕跡がうかがえる遺跡であることが分かった。



佐野原遺跡遺構配置図

調査区全景

完堀状況

出土状況

竪穴住居跡

佐野原遺跡検出遺構・出土遺物

1縄文土器（晩期） 2土師器（甕） 3〜4須恵器（坏・蓋？） 5須恵器（鉢？）

(24) 上寺田遺跡

所在地	衣川村大字上衣川字上寺田97－3
委託者	岩手県水沢地方振興局
事業名	広域農道整備事業団胆沢南部地区
発掘調査期間	平成10年7月16日～9月30日
調査対象面積	900㎡
発掘調査面積	900㎡
遺跡番号・略号	NE54－0254・KTD－98
調査担当者	中村比呂志・鳥居達人
協力機関	衣川村教育委員会

遺跡位置　　1：50,000 水沢

1．遺跡の立地

上寺田遺跡は、東北自動車道平泉前沢インターチェンジから北西へ約7.1kmに位置し、南流する北股川の左岸の丘陵地に立地する。遺跡の標高は約76～77mで、調査区域は南北に細長く、現況は水田である。

2．調査の概要

本遺跡は、平成9年度調査区に隣接する北側を継続調査したもので、今年度は調査区南側から中央区にかけて掘立柱建物跡2棟・土坑23基・焼土遺構1基・柱穴112基・溝跡2条が検出された。調査区南側は礫に覆われ、それを取り除きながら遺構を検出し、中央区は、礫が少なく、地山の検出面が一面に現れていた。調査区北側については土器片を出土したが、遺構は認められなかった。

全体的に、水田造成工事による削平・攪乱が深くまで及んでおり、遺構の上部は消失していると思われる。

<掘立柱建物跡>　調査区南側耕土から1m下の礫層から2棟検出した。六本柱六角形のものが1棟、六本柱長方形のものが1棟である。柱穴の平面形は2棟とも円形に近いが、規模については、六角形のものが径90～100cm、深さ約60cmに対し、長方形のものが径70～80cm、深さ約100cmである。遺物は出土していない。

<焼土遺構>　調査区南側から1基検出した。規模は径220cmの円形、深さは約13cmで、この焼土から縄文時代後期の土器片や炭化物が出土している。

<土坑>　調査区南側から中央区にかけて23基検出した。平面形は円形または楕円形に近く、規模については、南側の土坑が径100cm前後のものと200cmを超えるものとがあり、深さは30～40cmで底部や壁が礫に覆われているものが多い。中央区の土坑は、径が80cm・100cm・120cmものなどが検出され深さは20～30cmである。また、中央区の土坑では、縄文時代後期の土器片が出土している。

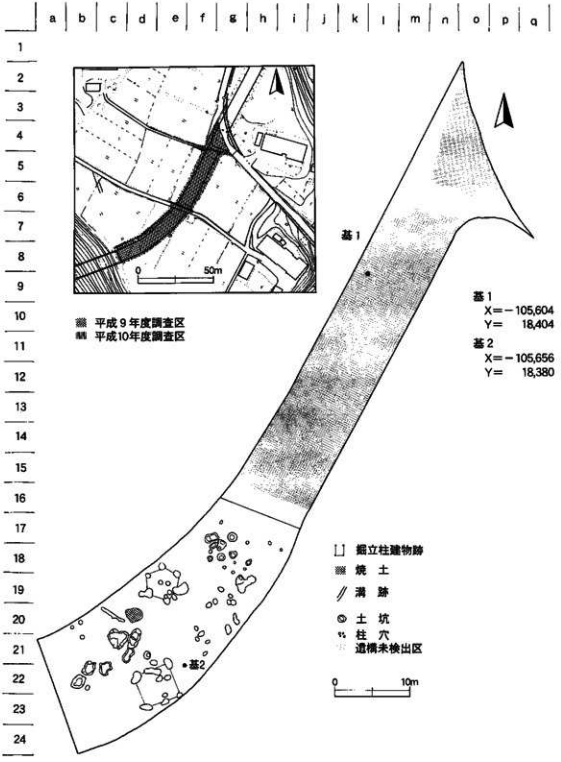
<柱穴群>　調査区南側から中央区にかけてそれぞれの区域にまとまって112基を検出した。規模は様々であるが、径は、30～80cm、深さは、20～50cm前後のものが多い。また、平面形は、円形や楕円形に近い形のものが多い。柱穴群を取り巻くようにして、縄文時代後期の土器片や石器類が出土している。

<溝跡>　調査区南側から2条検出した。規模は全長1.4mと3.6mで、深さは7～15cmである。遺構内には遺物は出土していない。

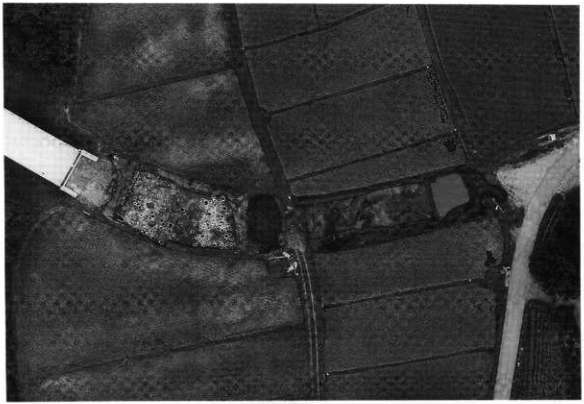
＜出土遺物＞　大コンテナ３箱分の遺物が出土した。内訳は土器・土製品・石器であるが、土器については縄文時代後期中心のものであり、土製品では縄文時代後期初頭と見られる鐸形土製品が出土している。石器については石鏃・石篦・石匙などが出土している。

３．まとめ

昨年度調査で掘立柱建物跡と考えられる柱穴が確認されたのをうけて、本年度調査を開始した。開田時の削平などにより遺構の上部が消失したと思われるものもありましたが、今年度の調査でも100基を超える柱穴の中から掘立柱建物跡の規模と配置をもつ柱穴が検出され、調査区や周辺に住居跡が存在したのではないかと推定される。

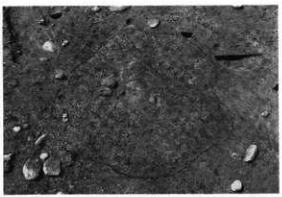

a b c d e f g h i j k l m n o p q
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24
0 50m
平成9年度調査区
平成10年度調査区
基1
基2
基1
X=－105,604
Y= 18,404
基2
X=－105,656
Y= 18,380
掘立柱建物跡
焼 土
溝 跡
土 坑
柱 穴
遺構未検出区
0 10m

上寺田遺跡遺構配置図



調査区全景

堀立柱建物跡



焼土遺構

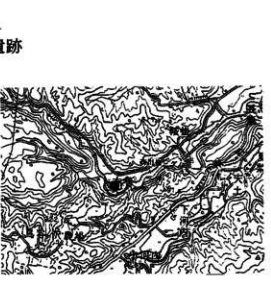
土坑

基本土層断面

上寺田遺跡検出遺構

(25) 本巻遺跡

所在地	衣川村大字上衣川字本巻43－13
委託者	岩手県水沢地方振興局
事業名	広域農道整備事業団胆沢南部地区
発掘調査期間	平成10年10月２日～10月30日
調査対象面積	510㎡
発掘調査面積	500㎡
遺跡番号・略号	ＮＥ64－1016・ＭＭ－98
調査担当者	鳥居達人・佐々木志麻
協力機関	衣川村教育委員会



遺跡位置　　1：50,000 水沢

1．遺跡の立地

本巻遺跡は東北自動車道平泉前沢インターチェンジから西約7.5kmに位置し、東流する北沢川左岸の河岸段丘上に立地している。北沢川は遺跡付近で大きく南側に蛇行し、舌状の張り出しを形成している。遺跡の標高は約114～115mで、現況は水田と畑地である。

基本層序は区域全体に表土と耕作土が30～40cm広がっている。その下に土器の出土する遺物含有層である黒褐色土が広がる。その遺物含有層が調査区東側の畑地のほうではほとんど削平されて失っているが、西側の水田地のほうに残る。その厚さは15～20cmである。その下は暗褐色土が20cm前後、そして黄褐色土が20cm前後となっている。暗褐色土から地山までは砂質で土器は出土しないが、石器は数点出土している。

2．調査の概要

調査区の東側半分は畑地の造成のために削平され確認の後、調査を終了した。西側半分の区域は黒褐色土が残り、検出された遺構は、土坑６基、柱穴状ピット13基、溝（水路）が１条である。

＜土坑＞　６基検出された。そのうち１基は埋土に縄文土器や石器が出土したがほかは遺物は確認されなかった。しかし、その埋土状況からもう１基は同時期で、その出土した土器から縄文中期中葉の遺構であると思われる。その他に関しては不明である。

＜柱穴＞　13基検出した。調査区西側の北端に集中する。埋土から土器の出土したものがある。またその並びから竪穴住居跡のものである可能性もあるが、判然としない。

＜溝跡＞　調査区西側南端で検出した。調査区東側に続く水路状のものである。時代は新しいものである。

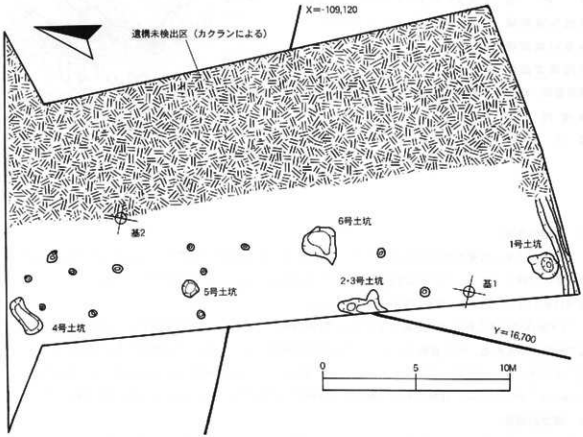
＜出土遺物＞　縄文土器が大コンテナで２箱出土した。復元できるものは少ないが、破片でも残存状況のよいものが多い。時期は縄文時代前期後葉から中期中葉にかけてのものである。

石器は、石匙・石錐など小コンテナで１箱出土した。その他では筒状の土製品が遺構内で出土している。

3．まとめ

調査の結果、期待された竪穴住居跡は確認されなかった。調査区域を含めた遺跡全体が牧草地や田の造成などで削平されたものと思われる。しかし、出土した土器片に時代を特定できそうなものが多く残ることは

幸運であった。多くが大木５・６・７・８式に属するもので、この本巻遺跡のある北沢川流域の縄文時代の生活を考える上で貴重な資料を提供することができた。



空中写真

調査区全景（北より）

本巻遺跡遺構配置図・検出遺構写真

(26) 水ノ口遺跡

所在地	胆沢郡前沢町白山字水ノ口57他
委託者	岩手県水沢地方振興局 胆江土地改良事業所
事業名	担い手育成基盤整備事業 真城地区（圃場整備）
発掘調査期間	平成10年4月16日～6月18日
調査対象面積	2,700㎡
発掘調査面積	2,700㎡
遺跡番号・略号	NE37－2033・MK－98
調査担当者	半澤武彦・菊池貴広・平澤里香
協力機関	前沢町教育委員会

遺跡位置　　1：50,000 水沢

1．遺跡の立地

水ノ口遺跡は、ＪＲ東日本東北本線陸中折居駅の西約1.5㎞に位置し、胆沢扇状地扇端東部の、寿安中堰に潤される微高地上にあり、水沢市との境界が付近を通っている。古来から胆沢扇状地の湧水に恵まれたところであり、遺跡の東約２㎞には北上川が南流し、標高は約35.6m～32.8mを示している。

調査区は、中央部を横断するように原地形が残ったものと思われる幅５mの小川が滞留し、それを境にして北側部分は休耕田転用の畑地、南側部分は盛土の畑地となっている。周辺部の現況は、水田が一帯に広がっているが、調査区も含めて昭和30年代の圃場整備により造成されているため、地形が改変されている部分が見られる。

2．調査の概要

寿安中堰に関連する、用・排水路部分の工事に伴う発掘調査であるため、調査区範囲は最大幅３mの、狭く細長いごく限られたものとなった。検出された遺構・出土遺物については、平安時代の住居跡や、鍛冶炉遺構（または製鉄遺構）、近世のものと思われる溝状遺構や陶磁器片、井戸に伴うワッパ等が挙げられる。

<住居跡・住居状遺構>　出土遺物等から、平安時代のものと推定される住居跡が６棟、住居状遺構が１棟の計７棟が、調査区の中央から南側部分において検出された。その形態は隅丸方形を成し、規模は大きいものでも直径５m程度で、大小の顕著な差異はない。それぞれの遺構は切り合ってはおらず、住居跡６棟のうち、カマドを伴うものが２棟あり、その方角はほぼ東向きに設けられていた。煙道・煙出しについては、調査区南東部の住居のカマドからは検出されたものの、もう一方の調査区南西部にある住居のカマドが、調査区の東側壁面にそでの部分のみ辛うじて検出されたため、確認することはできなかった。遺物については、特にカマドを伴う住居跡から、十分に接合が可能な形が整った土師器・須恵器が、主にカマド基部及びカマド中央の底部から出土している。

<焼土遺構>　カマドのそでが東側壁面にある、調査区南西部住居跡のほぼ中央床面に、長軸約１m短軸約50cmの焼土遺構が検出された。焼土の厚さは５cm程度であるが、焼土内部やその付近から遺物等の出土はなかった。

＜鍛冶炉または製鉄遺構＞　調査区北東部南側壁面から、北側に長軸約1.5m・短軸約50cmの「舌状」に伸びる、鍛冶炉跡または製鉄跡と思われる遺構が検出された。底面には焼土と炭化物が伴い、付近からはフイゴの羽口片が出土しており、その規模から鍛冶炉遺構ではないかとの判断から、遺構部分やその周辺部の土壌をサンプルとして採り上げたが、鍛造剥片や鉄鉱滓らしきものは含まれてはいなかった。

その一方で遺構から北へ約30cmの、調査区と平行する位置に、約50cm幅で東西方向に約８m伸びる赤褐色土の帯が併せて検出され、その上に散らばっていた脆い構造の鉄の塊らしきもの（径約２～３cm）をサンプルとして採り上げ、改めて見てみたところ、鉄が酸化し風化したものらしいということが判明した。今後実施されるサンプルの化学的な分析結果から、正確な遺構の様子が明らかになることだろう。

＜陥し穴＞　調査区南西部の隅と北東部に、それぞれ１か所ずつ、平面形が楕円で溝状の陥し穴が検出された。調査区南西部の隅のものは、長軸約２m・短軸約30cm・深さ約1.5mで、もう一方のものについては、上部が削平されており、長軸・短軸ともに上記と同規模で深さ20cm程度の底部が残っていたに過ぎない。どちらも、陥し穴の底部に見られるような杭の穴跡らしきものや出土遺物もないため、時期等は不明であるが、縄文時代のものと推定される。

＜土坑＞　全体で42基検出され、平面形は円形・楕円形・円形と楕円形の複合形等がある。人為的に礫を埋めたものはなく、土壙と思われるものはない。数は少ないがそれぞれの遺構内部からは、土師器・須恵器片が出土しており、時期は平安時代のものがほとんどであると推定される。

＜井戸跡＞　調査区中央東側にある民家裏から、直径約１m・深さ約1.7mの井戸跡が検出された。周囲の土壌は、表土から深さ30cmの付近から硬く締まった径２～３cmの礫層であるが、井戸跡だけは底部のグライ化した部分を含んだ粘土層・シルト層で、表土下約1.5mの付近から、一部炭化した跡がある緩く湾曲した木片と、底部からは下半分のみが残ったワッパが出土した。この位置のすぐ南脇は、約1.5mほど削られた休耕田で、常時深さ50cm程度水が溜まっており、井戸跡の実測は困難であった。

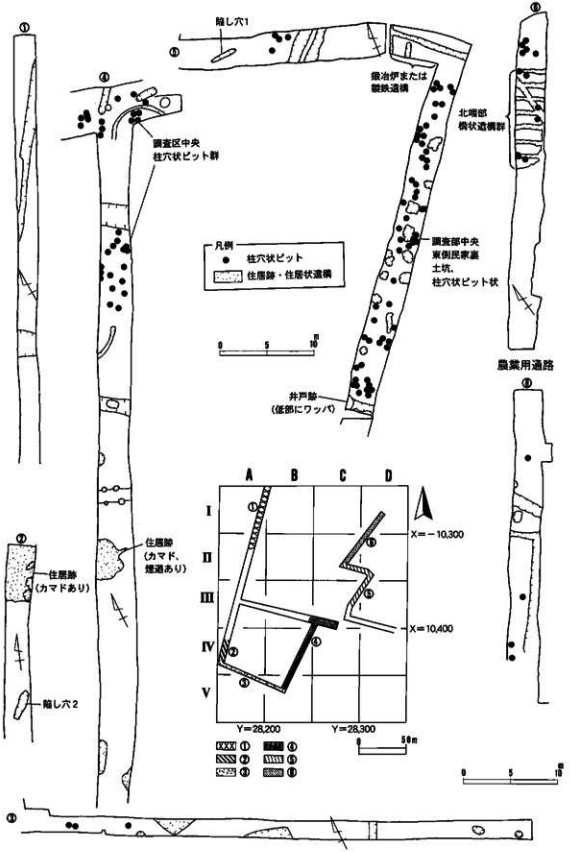
＜柱穴状遺構＞　柱穴状ピットは80基検出された中で、調査区中央東側にある民家裏付近、及び調査区中央の部分が最も多く、規模は直径・深さともに20～30cm程度、埋土は単層のものが大半で、野外調査では掘建柱建物跡を形成するまでのものは確認できなかった。

＜溝状遺構＞　検出された溝状遺構は22条で、調査区の北側に集中して７条、それ以外のものは、北側から中央部にかけて分布している。22条のうち埋土・出土遺物等から、平安時代と考えられるものが４条でその他は近世・近代のものと推定している。北側に集中する溝状遺構については、３m幅の狭い調査区内を東西方向へ横断するように規則的に並列しており、唐津産の陶磁器が出土した。県教委文化課の試掘では、北西方向の調査区外に、この続きの部分と思われる同規模の溝状遺構が検出されている。

＜出土遺物＞　大コンテナ４箱分の土器・陶磁器・石器が出土した。大半を平安時代のもの（土師器・須恵器）が占めるが、調査区中央東側の民家裏付近から常滑焼片、調査区中央部からの緑釉陶器片が挙げられ、石器については、旧石器的なブレード状剥片１点が、調査区北東部から出土している。

３．まとめ

「水ノ口」という名前が示す通り、自然湧水に恵まれ、古くから現在まで住環境に最適の地であることが検出・出土した縄文時代の陥し穴、平安時代の土師器・須恵器片、近世から近代にかけての溝状遺構・陶磁器片等からも伺い知ることができる。発掘調査区は用・排水路建設に伴う、幅２～３mの狭く細長いごく限られたものとなったが、今後、調査区に囲まれた耕作地部分の様子を明らかにすることができ得れば、遺跡のより明確な姿を掴めることだろう。


陥し穴1
鍛冶炉または
製鉄遺構
北端部
柵状遺構群
調査区中央
柱穴状ピット群
凡例
柱穴状ピット
住居跡・住居状遺構
調査部中央
東側民家裏
土坑、
柱穴状ピット状
農業用通路
井戸跡
(底部にワッパ)
住居跡
(カマド、
煙道あり)
住居跡
(カマドあり)
陥し穴2
A
B
C
D
I
II
III
IV
V
X=−10,300
X=10,400
Y=28,200
Y=28,300
50m

水ノ口遺跡遺構配置図

「カマド・煙道」がある住居跡（北東方向）

「カマド」がある住居跡（南方向）

調査区中央　柱穴状ピット群（南西方向）

井戸跡の底部にワッパ（西方向）

調査区北端　溝状遺構群
（南方向）

土師器出土状況（南西部住居床面）

土師器出土状況（南西部住居床面）

水ノ口遺跡検出遺構・出土遺物

(27) 休場遺跡

所在地	胆沢郡胆沢町小山字外浦70ほか
委託者	岩手県水沢地方振興局
事業名	担い手育成農村整備事業
発掘調査期間	平成10年9月1日～11月6日
調査対象面積	3,200㎡
発掘調査面積	3,200㎡
遺跡番号・略号	ＮＥ45－1144・ＹＢ－98
調査担当者	中村直美・平めぐみ
協力機関	胆沢町教育委員会

遺跡位置　　1：50,000 水沢

1．遺跡の立地

休場遺跡は東北自動車道平泉前沢インターチェンジから北西約4.8kmに位置し、東流する岩堰川の右岸に形成された河岸段丘上に立地する。遺跡の標高は約120～121m、現況は畑地である。

2．調査の概要

検出した遺構は、竪穴住居跡7棟、焼土遺構３基、土坑15基、陥し穴10基、柱穴状小ピット11基（以上縄文時代）、溝跡（現代）である。出土遺物には縄文土器（早期～前期）、石器（石鏃・石匙・磨石・凹石）がある。調査区は造成工事による削平・撹乱が深くまで及んでおり、遺構の上部は消失したと思われる。

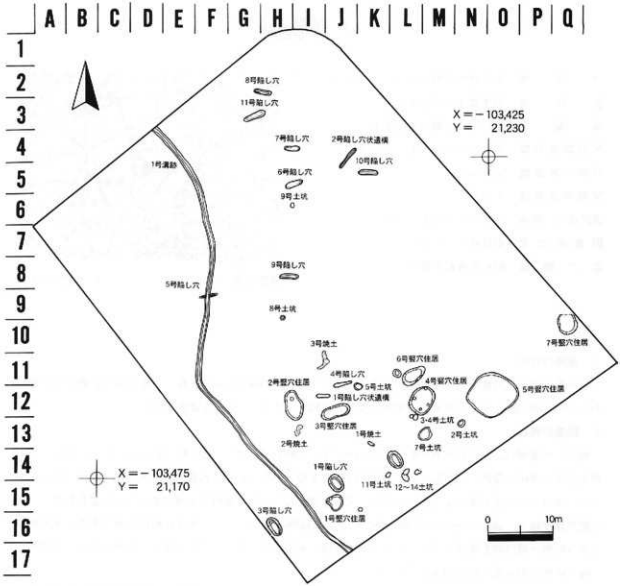
＜竪穴住居跡＞　調査区南半部で7棟を検出した。造成時の削平により、残存状態は不良である。平面形は不整な円形～楕円形を基調とする。底面には炉を持つものと持たないものとがある。時期は出土した遺物から縄文時代早期末葉～前期初頭と考えられる。

＜土坑＞　調査区南半部を中心として15基を検出した。平面形は円形を基調とする不整形を呈するものが多い。断面形はビーカー状や皿状をなす。いずれも埋土中に縄文土器小破片を含んでいる。時期は出土した遺物から縄文時代早期末葉～前期初頭に相当すると考えられる。

＜陥し穴状遺構＞　調査区北半部で10基を検出した。楕円形のものが３基、溝状のものが７基である。楕円形のものが底面長方形を呈し、底部に逆茂木痕と思われる杭穴の痕跡を持ち、埋土上部に白色火山灰の堆積が観察されるのに対し、溝状のものは長楕円形を呈し、埋土には火山灰を含まない。このことから両者には時期差があると考えられる。

3．まとめ

今回の調査によって、本遺跡は縄文時代早期末葉～前期初頭を主体とする集落跡および狩場跡としての性格を持つ遺跡であることが確認された。遺構の分布には差異が見られ、北半部は陥し穴状遺構が多いのに対し、南半部は竪穴住居跡が集中している。竪穴住居跡や土坑からは、裏表に縄文を施したり、繊維を含み底部が尖底を呈する土器破片が出土しており、該期の好資料を追加することができた。



休場遺跡遺構配置図

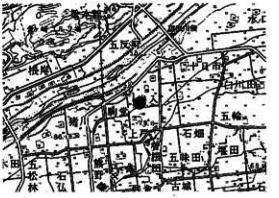
調査区全景

竪穴住居跡

休場遺跡遺構配置図・検出遺構

(28) 中半入遺跡（なかはんにゅう）

所　在　地	岩手県水沢市佐倉河字中半入ほか
委　託　者	岩手県水沢地方振興局
事　業　名	担い手育成基盤整備事業東田地区圃場整備工事
発掘調査期間	平成10年４月14日～10月30日
調査対象面積	6,800㎡
発掘調査面積	6,106㎡
遺跡番号・略号	ＮＥ15－0282・ＮＨＮ－98
調査担当者	高木　晃・木戸口俊子・鈴木　聡 佐々木志麻
協力機関	水沢市教育委員会・胆沢町教育委員会



遺跡位置　1：50,000 水沢

1．遺跡の立地

中半入遺跡はＪＲ水沢駅から北西約６㎞に位置し、奥羽山脈から東流する胆沢川が形成した胆沢扇状地の北端、水沢段丘低位面に立地している。胆沢川の現在の流路は遺跡の北0.4㎞にある。調査区の標高はおよそ75～78mの範囲で、現地形は西から東に向かい徐々に低くなる状態である。深掘りトレンチにより旧河道や低湿地状の部分を複数確認しており、近現代の水田造成以前には現在より地表の起伏が複雑であったと推測される。遺跡の南南東約２㎞には日本最北の前方後円墳として知られる角塚古墳が位置する。

中半入遺跡と蝦夷塚古墳は市町境で隣接した一連の遺跡で、今回の圃場整備工事が両者にまたがることからまとめて調査対象となった。調査区は道路、用排水路用地の本調査対象区と新規造成水田用地の範囲確認調査対象区からなる。また両遺跡をあわせて１～６区に区分しており、このうち水沢市域に位置する１～４区が中半入遺跡に相当する。調査実施面積は本調査区が2,971㎡、範囲確認調査区は対象面積29,309㎡に対し実施面積が3,135㎡である。

2．調査の概要

(1) **縄文～弥生時代**　縄文晩期、弥生前期、同後期の遺物が各区で少量出土する。遺構は未確認である。

(2) **古墳時代中期～後期**　本調査区域で20棟の竪穴住居跡を調査しており、他に範囲確認調査区域で最大に見積もって50棟前後の存在を確認している。住居跡の分布は３・４区にまたがる微高地が中心となり、他に１区、２区東側に散在する。住居跡の年代は出土土師器から４世紀末～６世紀後半にまたがり、５世紀後半以降の須恵器（坏、高坏、甕他）を伴う。形態、規模は１辺４～６m程の方形を呈しカマドを持つものと持たないものの両者が見られる。柱穴配置が判明するものは基本的には４本柱である。住居跡内外から出土した遺物には土師器、須恵器の他に後北、北大式土器片、黒曜石製スクレイパー類、同フレイク類、砥石、方割石（盤状礫石器）、石製模造品（剣形、双口円盤）、玉類（勾玉、管玉、琥珀平玉）、馬臼歯がある。黒曜石は剥片を含めて千点以上出土しておりその大部分が宮城県湯倉産の原石を用いている。

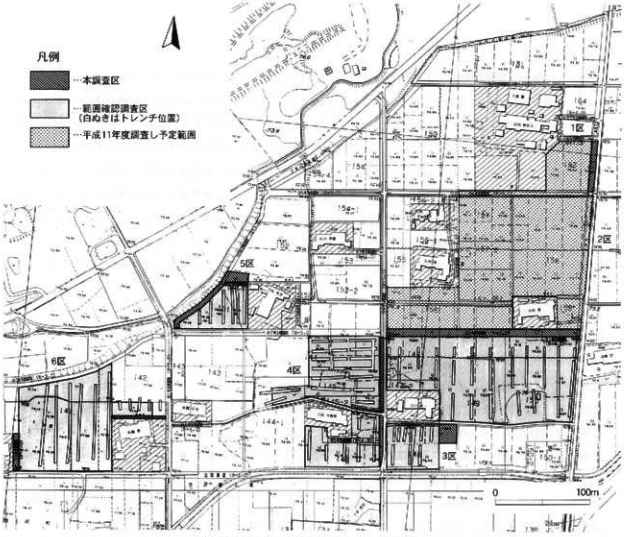
(3) **平安時代**　２区において十和田ａ降下火山灰層を挟み上下２面の水田遺構がある。下層水田は一次堆積

火山灰層に被覆されている約300㎡を検出した。火山灰層は二次堆積の部分を含め部分的には40㎝の厚さで堆積する。水田区画は４～12m前後の区画で田面には人間の足跡と思われる20～25㎝前後の凹みが散在している。この他田面には直径５㎜程度の小穴に火山灰が混入した斑点状の痕跡が多数見える。上層水田は洪水による粘土層、砂層に被覆された約400㎡を検出した。北東～南西方向の平行する２本の大畦畔があり、間隔は13m程になる。畦畔部分を除いた田面は草本類の腐食層で覆われる。２面の水田遺構とも２区、４区の範囲確認調査区域に20,000㎡以上にわたって広がる状況である。

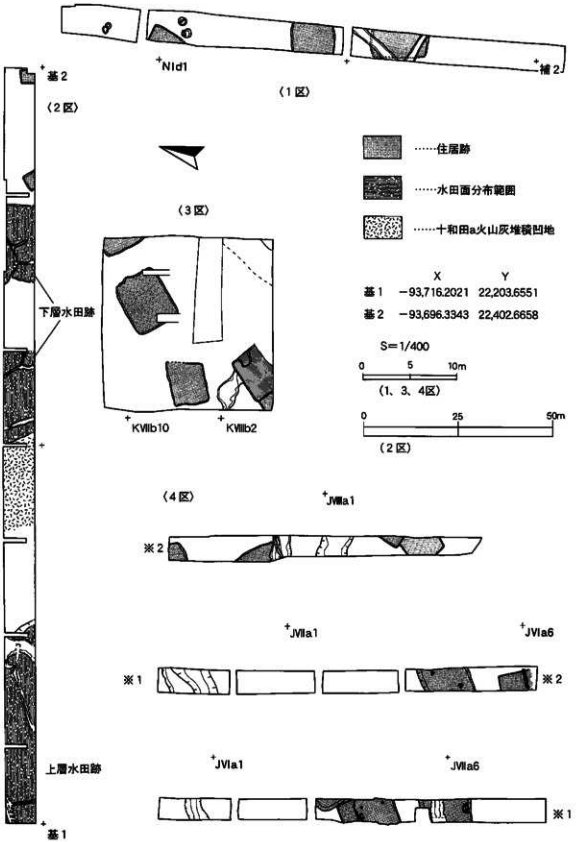
(4) **近世**　水路跡を複数検出している。

3．まとめ

今回の調査により古墳～平安時代にかけての土地利用について検討する材料が得られた。特に古墳時代については遺構数、遺物出土質量とも豊富であり、角塚古墳築造の背景となった胆沢扇状地における在地集落の様相を明らかにし得る資料である。また、平安時代の２面の水田跡は遺存状況が良好で、当時の生産域の広がりを追うことができる。今後上層水田跡の年代、田面を覆う植物遺体の種類、下層水田跡で検出した斑点状痕跡の形成過程、水利の問題などについて検討する必要がある。次年度には隣接区域の調査を予定しており、古墳時代の生産域、平安時代の居住域の解明に期待が持たれる。



中半入遺跡・蝦夷塚古墳　全体図



中半入遺跡遺構配置図（本調査部分）

調査区全景

上層水田

下層水田

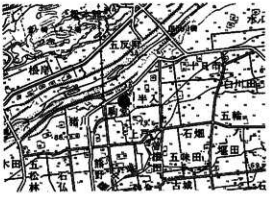
竪穴住居跡（焼失）

竪穴住居跡

中半入遺跡検出遺構

(29) 蝦夷塚古墳（えぞづかこふん）

所在地	岩手県胆沢町南都田字駒堂ほか
委託者	岩手県水沢地方振興局
事業名	担い手育成基盤整備事業東田地区圃場整備工事
発掘調査期間	平成10年4月14日～10月30日
調査対象面積	2,200㎡
発掘調査面積	2,574㎡
遺跡番号・略号	ＮＥ15－0178・ＥＺＴ－98
調査担当者	高木　晃・鈴木　聡
協力機関	水沢市教育委員会・胆沢町教育委員会



遺跡位置　　1：50,000 水沢

1．遺跡の立地

蝦夷塚古墳は中半入遺跡（28）と一連の遺跡で、胆沢町に位置する５・６区の部分である。調査実施面積は本調査区が700㎡、範囲確認調査区は対象面積12,853㎡に対し実施面積が1,874㎡である。なお近世文書には塚十数基が存在していたという記述があるが、現在は全く残っていない。

2．調査の概要

(1) **縄文～弥生時代**　縄文晩期、弥生前期の遺物が５・６区で少量出土する。遺構は未確認である。

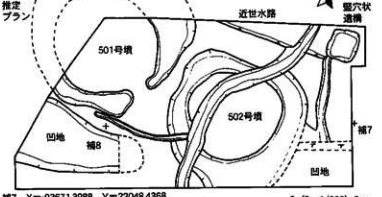
(2) **古墳時代中期後半～後期**　５区範囲確認区域で竪穴住居跡を１棟検出している。

(3) **奈良時代**　５区で遺跡名の由来となった終末期古墳を２基検出した。両者とも主体部を含め墳丘は削平されており円形に巡る周溝のみの確認である。規模は周溝外径が８ｍ程で８世紀代の須恵器長頸瓶と土師器内黒坏が周溝から出土している。周溝に近接して規模の小さい直線に伸びる溝と竪穴状遺構も検出された。

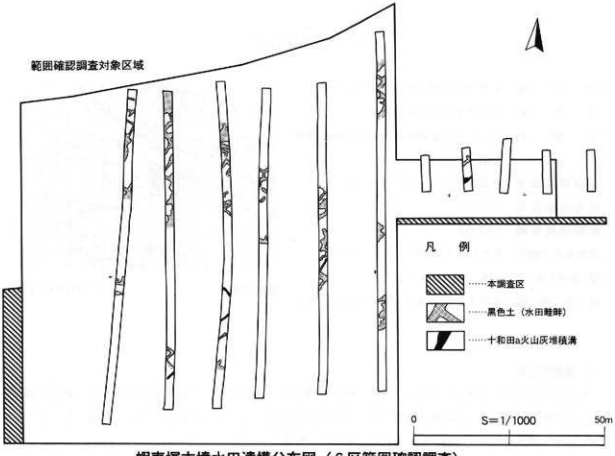
(4) **平安時代**　５・６区範囲確認区域で氾濫堆積物の粘土層に被覆された水田遺構の広がりと、この被覆層を切る十和田ａ降下火山灰層が堆積した溝跡複数を検出した。水田面は5,000㎡以上に広がり黒褐色土を耕作土とした小区画水田が展開する。

3．まとめ

終末期古墳は胆沢川北岸の西根古墳群との関連を検討する必要がある。水田遺構は十和田ａ火山灰より古い氾濫堆積物で被覆されており、年代の上限は不明だが東隣に展開する中半入遺跡下層水田より遡る時期の遺構と考えられる。



蝦夷塚古墳遺構配置図（５Ａ区）



蝦夷塚古墳水田遺構分布図（６区範囲確認調査）

501号墳

502号墳

周溝内遺物出土状況

畦畔検出状況

蝦夷塚古墳検出遺構

(30) 下醍醐遺跡（しもだいご）

所在地	江刺市田原字高野前95ほか
委託者	岩手県水沢地方振興局
事業名	県営担い手育成基盤整備事業原体地区
発掘調査期間	平成10年6月15日～6月30日
調査対象面積	280㎡
発掘調査面積	280㎡
遺跡番号・略号	NE08－2047・SDG98－N
調査担当者	木戸口俊子・佐々木志麻
協力機関	江刺市教育委員会

遺跡位置　　1：50,000 水沢・北上

1．遺跡の立地

下醍醐遺跡は、東北新幹線水沢江刺駅から北東約3㎞、県道玉里・水沢線の醍醐橋の北側に位置し、伊手川左岸の沖積地に立地している。伊手川はここで大きく西流しており、舌状の張り出しを形成しながら3.5㎞先の北上川に注ぐ。遺跡は概ね水田として利用されていたところであり、標高はほぼ46mである。周辺には五位塚、豊田館、字名の由来となっている醍醐寺跡の伝承地などがある。

2．調査の概要

調査区を南北に分ける農道を境に南側調査区と北側調査区に分けられる。南側調査区では、水田造成の際の客土と見られる層に遺物が含まれる。北側調査区は農道沿いの極めて狭い範囲で、農道の工事の際に盛土された礫を1m30cmほど下げると十和田a降下火山灰が数cm部分的に堆積している。それより下層はグライ化した粘土層があり、さらに砂層へと続く。遺物は全く含まれない。

遺構は南側調査区から検出した焼土1基だけであり、遺物も同調査区からのみである。

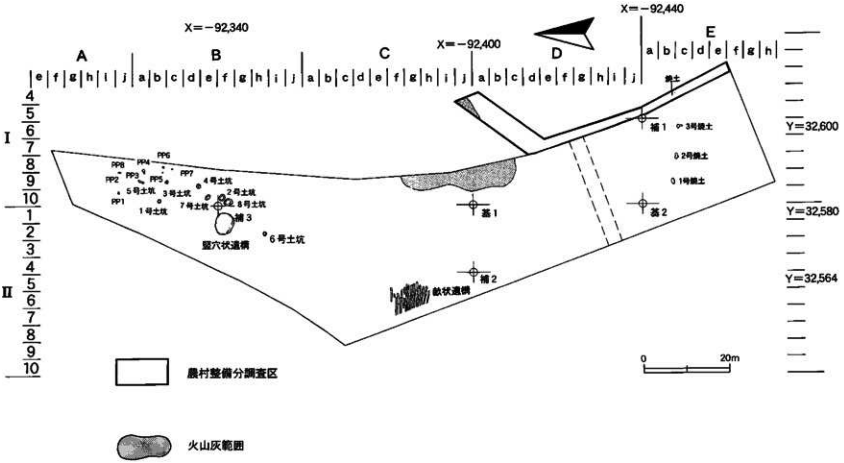
＜焼土＞　南側調査区の客土中の検出である。摩滅した土器とともに他から運ばれたもので現地性ではない。

＜出土遺物＞　摩滅した土器の小破片が出土しているが、周辺の出土土器から縄文時代中期後葉の頃の土器と思われる。原形をとどめないものがほとんどである。

3．まとめ

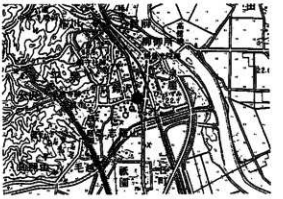
今回の調査区では水田として利用するために造成した際の客土から遺構・土器が出土している。調査区周辺の現在集落のある微高地では農作業時に土器を見かけることも多く、土器の使用された時期の遺構が広がっている可能性が高い。

下屋敷遺跡遺構配置図


X=−92,340
X=−92,400
X=−92,440
A
B
C
D
E
I
II
Y=32,600
Y=32,580
Y=32,564
PP1
PP2
PP3
PP4
PP5
PP6
PP7
PP8
1号土坑
2号土坑
3号土坑
4号土坑
5号土坑
6号土坑
7号土坑
8号土坑
1号掘土
2号掘土
3号掘土
井1
井2
井3
竪穴状遺構
畝状遺構
0
20m
農村整備分調査区
火山灰範囲

(31) 志羅山遺跡第73次

所在地	西磐井郡平泉町平泉字志羅山8番31号
委託者	岩手県一関地方振興局
事業名	都市開発街路毛越寺線
発掘調査期間	平成10年4月9日～5月15日
調査対象面積	105㎡
発掘調査面積	105㎡
遺跡番号・略号	NE76－1088・SY－98－73
調査担当者	朝倉雄大・羽柴直人
協力機関	平泉町教育委員会



遺跡位置　　1：50,000 一関

1．遺跡の立地

本遺跡は東日本旅客鉄道平泉駅の西約150m、国道4号と主要地方道平泉・厳美渓線との交差点付近に位置する。遺跡の標高は23～24mであり、遺跡周辺の地形は全体的に北西から南東方向に緩やかに傾斜している。遺跡の東側には泉屋遺跡、西側には毛越寺跡や観自在王院跡、倉町遺跡、北側には花立Ⅱ遺跡、白山社遺跡がある。

2．調査の概要

志羅山遺跡は、これまで平泉町教育委員会と当埋蔵文化財センターによって発掘調査が進められてきた遺跡である。今回の調査は平成7年度から実施している都市計画街路整備事業に係わる継続調査である。

検出された遺構は、塀跡1条、溝跡4条、池状遺構1条、柱穴状小穴19基である。

＜塀跡＞　12世紀に属する塀が67区（調査区名はこれまでの調査に基づき命名）より検出されている。上端幅124～142cm、深さ36～41cm、検出長約10.2mである。軸線方向はN－100°－Eである。確認された板材は54枚あり、そのうち4枚は軸線方向に対して直交しており、その間隔は西から150cm、166cm、151cmである。板材の状態が比較的良好なもので残存長約27cm、幅約12cm、厚さ約3cm程である。本遺構の下より溝跡が重複して検出されていることから、この塀跡は溝を転用し作られたものと思われる。また、本遺構は隣接の72区へと延びるが、72区では明確な塀の板材は確認できなかった。

＜溝跡＞　4条検出されたが、すべて12世紀に属する。67区1号溝は、検出長9.86m、上端幅78～106cm、深さ36cm、軸線方向はN－103°－Eである。67区塀跡1号と重複関係にあり、本遺構が新しい。

67区塀跡1号の下から重なるように検出された67区溝跡2号は、塀跡の底面から34cmの深さがある。軸線方向はN－102°－Eである。本遺構は67区塀跡1号と同様に72区へと続いている。

その他2条の溝は72区において検出されている。形状、規模とも似通っており、検出長116～130cm、上端幅22～36cm、深さ7～9cmである。軸線方向はそれぞれN－6°－E、N－12°－Eである。

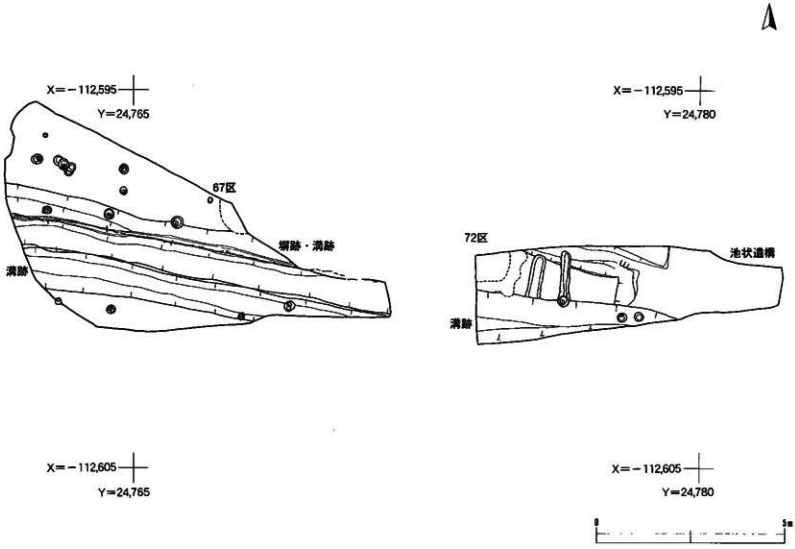
＜池状遺構＞　72区から検出されている。遺構が調査区外に広がるため全体形は不明であるが、池状部分とそれに流れ込む溝状部分からなるものと思われる。本遺構における底面の標高は23.7～24.2m、池状部

分の広がりは標高24.1m前後付近から始まっている。本遺構は重複関係にあるどの遺構よりも古い。時期は12世紀に属する。

<出土遺物> 最も多く出土しているのはかわらけで大コンテナ約４箱分である。手づくねかわらけがロクロかわらけに比べ圧倒的に多い。内折れかわらけは４点出土している。国産陶器は主に常滑産や渥美産の壺・甕の破片が大コンテナ２箱分約350点、中国産磁器では白磁の小破片が５点出土している。また、木製品では下駄、曲物、箸、漆塗り椀などが出土している。

３．まとめ

今回の調査により、12世紀の奥州藤原時代における志羅山地区の様相の一端が明らかになった。調査面積は狭かったものの堀跡をはじめ溝跡や池状遺構など、当時の町割り及び生活をしていた上級階層に関連するであろう遺構が検出されたことは興味深い。今後は、これまでの志羅山遺跡及び平泉町内における発掘調査成果との比較・検討を進めることにより、本遺跡の分析を進めていきたい。



志賀山遺跡第73次遺構配置図

67区全景

堀跡・堀跡下溝断面

堀跡

堀跡板材

堀跡下溝遺物出土状況

堀跡下溝遺物出土状況

池状遺構断面

池状遺構全景

志羅山遺跡第７３次検出遺構・出土遺物

(32) 清水遺跡

所在地	一関市舞川字清水46番地４号ほか
委託者	岩手県一関地方振興局
事業名	一般県道薄衣舞川線建設
発掘調査期間	平成10年４月14日～11月17日
調査対象面積	16,000㎡
発掘調査面積	8,062㎡
遺跡番号・略号	ＮＥ87－1199・ＳＺ－98
調査担当者	村上　拓・七田芳直
協力機関	一関市教育委員会

遺跡位置　　1：50,000 一関

１．遺跡の立地

清水遺跡は東日本旅客鉄道一関駅の北東約4.7km、山ノ目駅の東北東約3.8km、北上川左岸の山麓緩斜面上に立地する。調査前は宅地・畑地・水田等として利用され、多くの部分で攪乱を受けていた。

２．調査の概要

清水遺跡の調査は２ヶ年で合計16,000㎡を対象としており、今回の調査はその初年度分にあたる。遺跡は中貝山から北上川に向かって南西側にのびる尾根の先端部に位置し、調査区はこの尾根を北西から南東にかけて横断している。今年度の調査区は北西側の谷～尾根頂部の緩斜面中央部までの範囲で、全体のほぼ半分の面積を調査した。

検出された遺構は、捨て場１箇所、帯状焼土遺構２基、焼土遺構１基、柱穴状ピット750基、陥し穴状遺構２基で、捨て場からは縄文時代中期末葉～後期初頭の土器を中心に大コンテナ約470箱分の遺物が出土している。

＜捨て場と焼土遺構＞　柱穴群などの遺構が集中する尾根頂部の緩斜面は、北西側で谷に向かってやや急な斜面となり、さらにこの谷に直交する沢によって半擂鉢状の凹地が形成されている。この凹地には南側上方から地山粘土ブロックを含む多量の廃棄土が繰り返し投げ込まれており、捨て場の縁は北側へ向かって扇状にせり出してきている。廃棄土層どうしの間に形成された自然堆積層からは多量の土器が出土し、層位的に良好な状態を保っていた。

また、土砂や土器の廃棄によってせり出した捨て場の北辺に沿って形成された帯状の焼土遺構２基が確認され、[土砂の廃棄] → [土器等の廃棄] → [帯状焼土の形成] という過程が少なくとも２回繰り返されていることが判明した。この帯状焼土遺構は、①焼土直上に繊維の明瞭な炭化物層がのること、②焼土断面に炭化物や黒色土の混入が全く認められないこと、③焼土断面の分層線が周囲の黒色土の分層線と連続すること、④下方に向かって凸レンズ状に赤変していること、などから、別の地点で生成した焼土を廃棄した結果とは考えにくく、現地性のものである可能性が高いと判断される。しかし、長さ14.0m、幅2.0mと大規模なものであることに加え、焼土層の厚さが最大40cmにも及んでいることに疑問を持つ意見もあり、今後類例を

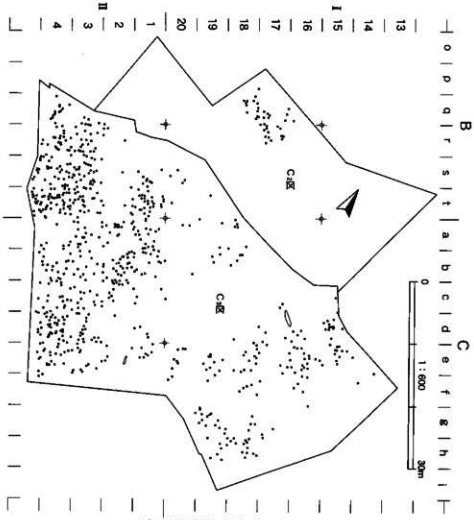
探し再度検討を加える必要があると考えている。

<柱穴群> 捨て場の上方にあたる尾根頂部の緩斜面では750基あまりの柱穴が検出された。その規模は径20cmほどのものから1m近くのものまで多種あり、柱穴の多くに柱痕跡が認められる。しかしこの区域はほぼ全面にわたって過去に耕作を受け地山以下まで削平されているため、残存しなかった遺構もあるものと思われる。柱穴群からは、4～6基が平行に配置されているものや環状に並ぶものを抽出することができ、前者は掘立柱建物跡、後者は竪穴住居に伴う柱穴である可能性がある。これらについては今後、より詳細な分析を行なう必要があろう。また、この区域の中央部は柱穴の分布が希薄になっており、この現象が持つ意味についても次年度の調査結果とあわせて検討することとしたい。

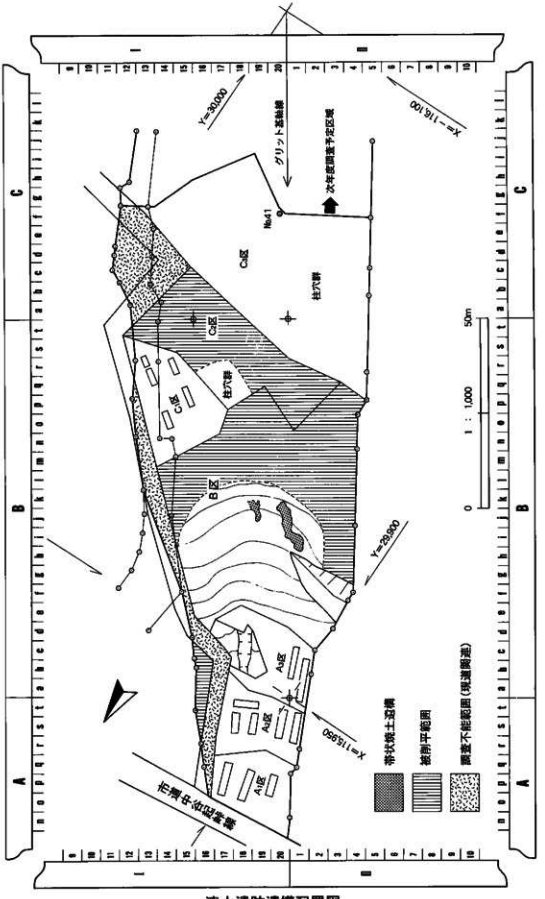
<陥し穴状遺構> 柱穴群と同様の区域で2基のみ検出された。いずれも溝状の土坑である。柱穴が密な箇所と分布が重複しており、陥し穴としての性格を想定した場合柱穴群とは時期を異にする遺構であると考えるのが妥当であろうか。

3．まとめ

今回の調査結果から、清水遺跡は縄文時代中期後葉～後期前葉の集落跡であると判断される。また、該期の土器が捨て場から良好な状態で大量に出土したことは、その変遷の詳細が不明瞭な該期の土器研究に貴重な資料を追加したと言えよう。次年度の調査を待ち、集落の全容と該期土器の内容について検討を深めたい。



清水遺跡柱穴群【C_2・C_3区】


Y=30,000
X=-116,100
グリット基軸線
次年度調査予定区域
No41
C区
柱穴群
B区
A区
Y=29,900
X=-118,950
0
1 : 1,000
50m
帯状検土遺構
地形平坦面
調査不能範囲(現道周辺)
柱穴群
A
B
C
I
II

清水遺跡遺構配置図

調査区全景（写真上が南）

帯状焼土遺構（西から）

土器出土状況

柱穴群（C$_4$区）

陥し穴状遺構

清水遺跡検出遺構・出土遺物

(33) 篠館跡

所　在　地　遠野市上郷町細越第16地割字赤羽根94番地６ほか
委　託　者　岩手県遠野地方振興局
事　業　名　一般国道283号線“仙人峠道路”改築事業
発掘調査期間　平成10年４月15日～11月２日
調査対象面積　19,300㎡
発掘調査面積　10,000㎡
遺跡番号・略号　ＭＦ76－0298・ＳＮＤ－98
調査担当者　小笠原健一郎・熊谷佳恵
協力機関　遠野市教育委員会

遺跡位置　　1：50,000 遠野

1．遺跡の立地

本遺跡は、東日本旅客鉄道釜石線平倉駅の東南東約800mに位置し、仙人峠から西流し猿ヶ石川に注ぐ早瀬川の左岸に張り出す尾根上に立地している。遺跡の北側は断崖を呈し、南側を急峻な山体、東西を谷で挟まれた天然の要害を利用して築城されている。遺跡の標高は約400～504m、調査区は遺跡を横断する林道北側の標高約400～492mの範囲に広がっている。遺跡の現況は山林である。本遺跡の周辺には、瓜ヶ森館跡、刃金館跡、林崎館跡等の多くの中世城館が伝承とともに存在している。

2．調査の概要

今回の調査で検出した遺構は、堀跡 4条、土塁 4基、曲輪13カ所、集石12基、切岸11カ所である。いずれも遺物の特徴から16世紀を中心とした遺構と考えられる。

調査区のほぼ全面にわたり替請が施され曲輪、切岸等が構築されている。

<堀跡>　北西側の尾根に４条、空堀で断面形はＶ字型を呈する。内２条は南側の谷に回り帯曲輪に続いている。いずれも空堀である。未了区の側に竪堀２条、東側斜面に１条を現況確認している。また、調査区外の尾根の基部にも竪堀２条を確認している。

<土塁>　北西側の堀の外側に 4基を検出した。

<曲輪>　尾根上の曲輪は全て削平により階段状に築かれていおり、それらを囲む帯曲輪等は盛り土により構築されている。これまで、13カ所を検出している。未了区で曲輪を10カ所現況で確認している。また、調査区外（南西側）の斜面にも６カ所を確認している。

<切岸>　曲輪の周りやそれらの間に11カ所を検出している。削平と盛り土により造られている。

<集積>　最も比高差のある切岸上の堀と土塁、それに続く帯曲輪より８基を検出した。いずも不整形で地山の自然石（貫岩）が用いられている。投石用のものと考えられる。主郭部分で検出された４基は、来年度継続調査となった。

4．出土遺物

今回の調査では中国産磁器（染付、青磁、白磁）、国産陶器（唐津、美濃産）、ロクロ成形かわらけ片、他に永楽通寶、洪武通寶などの銭貨11点、漆塗りの小札、煙管、鉄鍋片、鉄鏃、弾丸、石製品（茶臼、硯、砥石）、弥生土器片が出土している。

5．まとめ

篠（ヶ）館は、別名関口館とも呼ばれており阿曽沼氏時代（1189～1600年）の城館とされているが、歴史的資料は『上閉伊郡志』(1913)に「鱒沢左馬之助広勝の一族の関口某」の記載があるだけで一切は不明である。出土した遺物や遺構の配置から16世紀後半を中心とした遺跡と考えられるが、今回の調査では館主や創建年代を特定できる遺物は検出されなかった。また、遺物の総量からみて日常的生活を想定することは困難であり、合戦等の非常時に使用された城館と考えられる。未了になった区域は来年度継続調査となった。

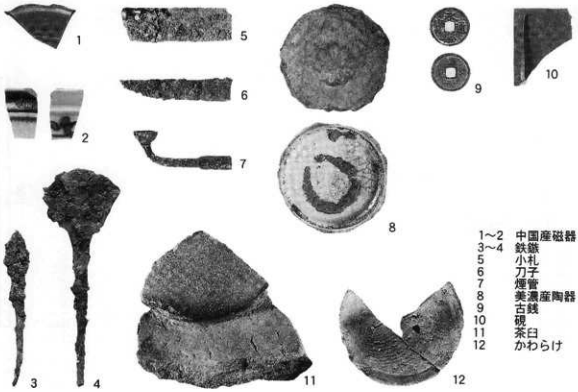
調査区全景

調査区西側

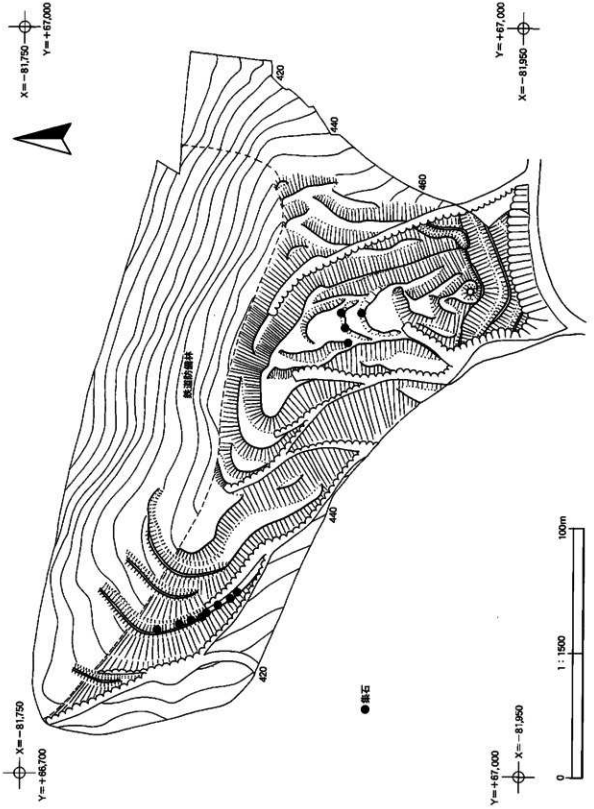
調査区東側

3号掘充抵

1号集石



篠館跡検出遺構・出土遺物


X=−81,750
Y=+67,000
X=−81,950
Y=+67,000
420
440
460
440
420
X=−81,750
Y=+66,700
X=−81,950
Y=+67,000
0
1:1500
100m

篠館跡遺構配置図

(34) 大向上平遺跡（おおむかいうわだいら）

所在地	二戸市似鳥字大向上平８番地２ほか
委託者	岩手県二戸地方振興局
事業名	一般農道整備事業
発掘調査期間	平成10年６月１日～８月31日
調査対象面積	3,000㎡
遺跡番号・略号	ＪＥ18－0199・ＯＭＫ－98
調査担当者	中村直美・平めぐみ
協力機関	二戸市教育委員会

遺跡位置　　1：50,000 浄法寺

１．遺跡の立地

大向上平遺跡は東日本旅客鉄道東北本線二戸駅より南西約5.3mに位置し、東流する安比川の右岸に形成された河岸段丘状に立地する。遺跡の標高は約137～140m、安比川との標高差は約10mで、現況は畑地である。

２．調査の概要

検出した遺構は、縄文時代後期初頭の埋設土器２基、平安時代の竪穴住居跡７棟、土坑15基、畠跡と考えられる畝間状遺構２群、柱穴列１列である。

＜埋設土器＞　調査区中央部で２基を検出した。埋設状況は正立と倒立があるが、耕作による削平を受け上部が欠失しており遺存状態は悪い。正立の状態で検出された北側の１基は、埋土のなかから鹿角製の管玉２点と、頂部を穿孔した貝製の丸玉70点以上が出土している。南側の１基は倒立の状態で埋設されている。中から遺物は出土していない。埋設された土器の時期からこれらは縄文時代後期初頭のものであると考えられる。

＜竪穴住居跡＞　調査区北側で３棟、南側で４棟の計７棟を検出した。このうち、北側の２棟は昨年度の未了分で、道路下やプレハブ下にかかっていたため調査を持ち越していたものである。検出した住居跡の平面の形はいずれも隅丸方形を基調としており、埋土にはいずれも上位から下位にかけて白頭山火山灰や十和田ａ火山灰ａ小ブロックを含んでいる。住居跡の壁にはカマドが設けられ、北に持つもの１、西と東に持つもの１、南と西に持つもの１と造られる位置に違い認められる。

＜土坑＞　調査区北側から中央部にかけて12基を検出した。埋土の中にはすべて十和田ａ火山灰の小ブロックを含んでおり、平安時代のものと考えられる。平面形は円形～楕円形を基調としており、底面に焼土が形成されているものもある。

＜畝間状遺構＞　畠跡と考えられる畝間状の遺構は調査区北側と南側の平坦部で２箇所確認された。上部削平により残存状態は悪い。埋土にはいずれも十和田ａ火山灰を含んでおり、平安時代の遺構と考えられる。形状には緩い弧状をえがくものや、直線状の溝が数条直行するものがある。

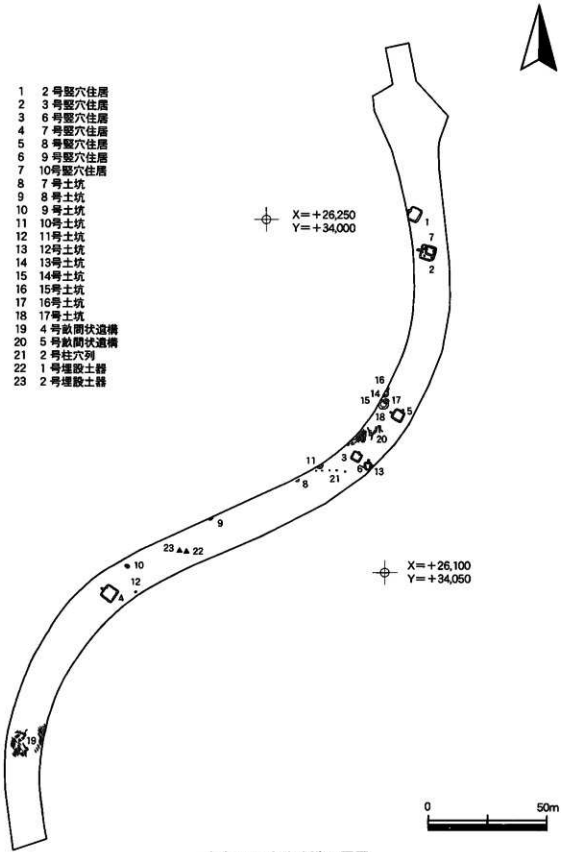
＜柱穴列＞　調査区中央部で１列を検出した。埋土には十和田ａ火山灰の小ブロックを含んでいる。柱穴列

は単独で、建物を構成するようなものではない。中から遺物は出土しておらず、詳細は不明だが埋土の状況から平安時代の遺構と考えられる。

<出土遺物> 大コンテナ５箱分の土器、石器、石製品、鉄製品が出土した。殆どが平安時代の土器で住居跡出土のものが大部分を占める。縄文時代の遺物の内訳としては、後期初頭の土器、石鏃２点、硬玉製大珠２点、鹿角製(？)の臼玉３点、貝製の小玉70点以上、平安時代の遺物の内訳としては土師器坏、長胴甕、小形甕、須恵器大甕、鉄製品としては紡錘車１点、鉄鏃１点、鞘先１点、形態不明の鉄製品３点が出土している。

３．まとめ

昨年からの継続調査により、本遺跡は平安時代（10世紀中葉）の集落遺跡であることが判明していた。今回の調査では、昨年に引き続き竪穴住居跡や鳥跡と考えられる畝間状の遺構等が確認され、集落を構成する遺構の分布が更に南側に延びていたことが確認された。また、縄文時代後期初頭の埋設土器中から、糸魚川産の硬玉を用いた大珠・東北地方の貝塚では例を見ない南海産巻貝の小玉などが発見され、貴重な資料を追加することができた。



大向上平遺跡遺構配置図

調査区全景

埋設土器

平安時代住居跡

平安時代土坑

畝間状遺跡

大向上平遺跡検出遺構・出土遺物

(35) 長袖（ながそで）Ⅰ遺跡

所在地	二戸郡浄法寺町大字浄法寺字長袖104番22ほか
委託者	岩手県二戸地方振興局
事業名	広域農道整備事業
発掘調査期間	平成10年8月3日～9月30日
調査対象面積	1,778㎡
発掘調査面積	1,778㎡
遺跡番号・略号	ＪＥ35－1389・ＮＳＩ－98
調査担当者	晴山雅光・平澤里香
協力機関	浄法寺町教育委員会

遺跡位置　　1：50,000 浄法寺

1．遺跡の立地

本遺跡は、浄法寺町の中心地である浄法寺地区に所在する町役場の西南西約4.2kmに位置する。貂庶岳の東裾野にあたり、遺跡の北側に長袖沢が、南側に高曲沢が東流する。標高は285～295mで、南から北へ下る緩、急、斜面部分（現況は林野・畑地・農業用道路）が遺跡の範囲である。

2．調査の概要

今回の調査区は、現道の整備に伴う拡幅部分が対象で、遺跡を東西に貫く。次年度以降も、遺跡内の発掘調査が予定されており、緩やかに湾曲し南北に貫く形となる。

検出された遺構は、縄文時代と思われる土坑が２基、時期不明の土坑が１基と柱穴状土坑が１である。

＜土坑＞　縄文時代と思われる土坑は、調査区東端から長楕円形の比較的浅いものが検出され、付近からは石鏃が出土している。また、調査区中央からは、楕円形で斜めに深く掘り込まれた土坑が検出され、埋土上層からは炭化物や縄文土器片が出土している。時期不明の土坑については、調査区外に延び、現道によって削平されていることから不明な点が多い。

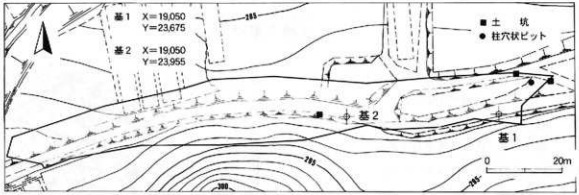
＜柱穴状土坑＞　調査区の東側、わずかに削平された現況畑地より検出された。遺物等はなく、時期は不明であるが、新しい時期のものと思われる。

＜出土遺物＞　縄文土器が４片出土している。貼瘤のみらる鉢の胴部と、縄文を施した深鉢の胴部の２個体である。また、石鏃が１点（無茎凹基）のほか、青磁茶碗（中世）の底部も出土した。

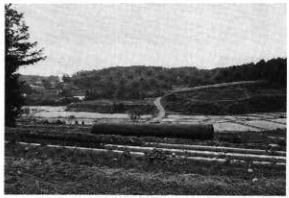
3　まとめ

今回の調査結果では、縄文時代（中期～後期）と中世の人々の生活痕跡をうかがい知ることができた。

しかし、その結果は、あまりにも断片的であるため、結論づけは今後の調査によるところが大きい。とりわけ、中世における館跡と当遺跡の関係（交易）についてなど、今回の出土遺物からみて興味深い。



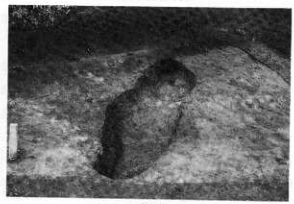
長袖Ⅰ遺跡遺構配置図



調査区遠景

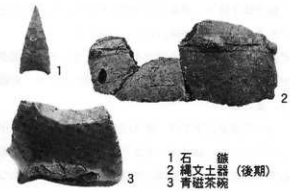
調査区全景

出土状況



土坑

土坑



長袖Ⅰ遺跡検出遺構・出土遺物

(36) 南田（みなみだ）Ⅰ遺跡

所在地	九戸郡九戸村大字伊保内第26地割ほか
委託者	岩手県二戸地方振興局
事業名	畑地帯総合整備事業
発掘調査期間	平成10年4月9日～6月1日
調査対象面積	735㎡
発掘調査面積	735㎡
遺跡番号・略号	ＪＦ22－0147・ＭＤＩ－98
調査担当者	杉沢昭太郎・晴山雅光・平澤里香
協力機関	九戸村教育委員会

遺跡位置　　1：50,000 一戸

1．遺跡の立地

本遺跡は、九戸村の中心地である伊保内地区に所在する村役場の北西50mに位置する。瀬月内川西岸の舌状の張出し部分にあたり、南側と北側に沢が東流する。標高は285～295mで、西から東へ下る緩斜面部分（現況は畑地・草地）が遺跡の範囲である。

2．調査の概要

検出された遺構は、縄文時代晩期の竪穴住居跡が３棟、土坑類７基、土器埋設遺構４基、平安時代の竪穴住居跡が２棟、時期不明の溝遺構が１条、焼土遺構２基、柱穴状ピットが120個である。

＜竪穴住居跡＞ 縄文時代晩期の住居跡は、旧道によって上面が削平されたものが２棟、重複して検出された。石囲炉と、土器埋設の炉をもつ住居で、石囲炉も内部に土器を埋設している。

平安時代の住居は、一辺が４mの正方形で、北辺にカマドを構築しているものと、調査区にかかる畑道部分のみ検出されたものの２棟で、どちらも土師器甕の破片を伴出している。

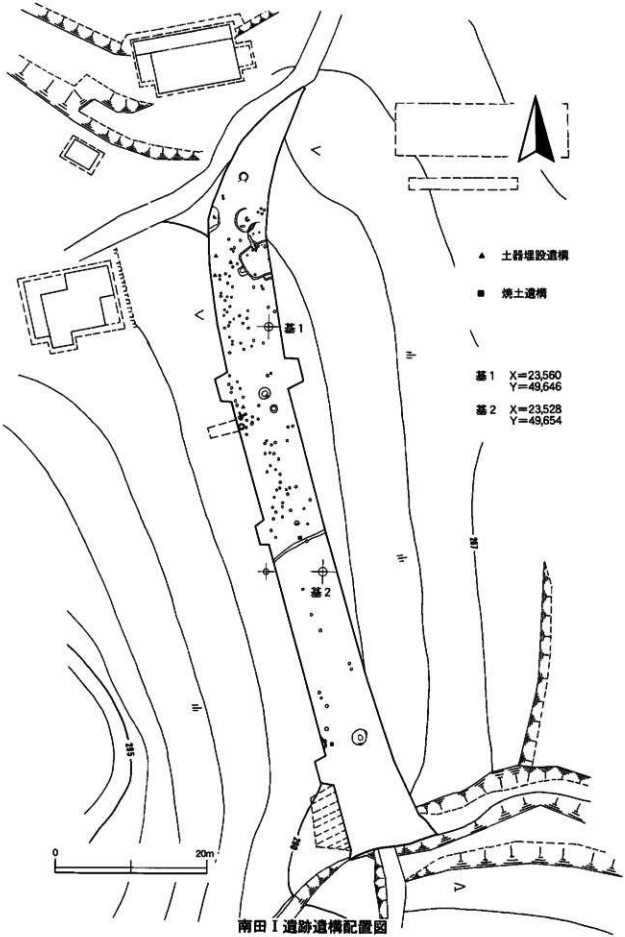
＜土坑＞ 土坑には遺物を伴うものが少なく、時期の特定困難なものもあるが、底面直上の土器などから縄文時代と思われる。

＜土器埋設遺構＞ 土器埋設遺構は、一部集中してみられる地域があり、斜面に沿って斜めに埋設されているものが多い。また、土器の底部を切断し、反転して埋設しているものや、埋設土器内部に他の土器片を包含するものなどがみられた。

＜出土遺物＞ 今回の調査では、遺構内から大コンテナで１箱、遺構外から大コンテナで12箱、出土している。その大半を占める縄文時代の土器の中でも晩期前葉から中葉頃のものが９割以上で、その他後期および中期の土器片がわずかにみられる。また、土師器の甕が住居に伴って出土したほか、土偶や剥片石器（石鏃・石鹿・不定形）および礫石器、それと鉄滓、陶磁器片がわずかに出土している。

3　まとめ

今回の調査結果から、縄文時代晩期と平安時代を主体とする複合遺跡であることが分かった。また、縄文時代中期および後期の土器片や近世の陶磁器片などもみられることから、断続的な人の営みがうかがえる。



南田Ⅰ遺跡遺構配置図

調査区遠景

調査区全景（直上）

出土状況

出土状況

住居跡（縄文）

住居跡（平安）

土器埋設遺構

柱穴状ピット群

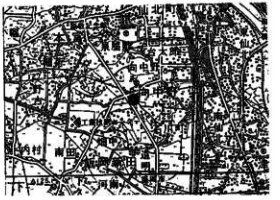
南田Ⅰ遺跡検出遺構

1～8　縄文土器（晩期）深鉢・壺・注口・台付鉢・皿形土器
9～10　土偶（晩期）　11～12　土師器（甕）　13～14石鏃

南田Ⅰ遺跡出土遺物

(37) 小幅遺跡第８次調査

所　在　地　盛岡市本宮字小幅88－11ほか
委　託　者　盛岡市
事　業　名　盛岡南新都市開発整備事業
発掘調査期間　平成10年８月17日～10月６日
調査対象面積　529㎡
発掘調査面積　529㎡
遺跡番号・略号　ＬＥ16－2009・ＯＫＨ－98－08
調査担当者　溜　浩二郎・山口俊規
協力機関　盛岡市教育委員会



遺跡位置　1：50,000 盛岡

１．遺跡の立地

小幅遺跡は東日本旅客鉄道仙北町駅より西約2.3kmに位置し、雫石川によって形成された標高125m前後の河岸段丘上に立地している。調査区の現況は林檎園である。本遺跡の西約1.4kmに志波城跡、南西に隣接して大宮北遺跡がある。

２．調査の概要

今回の調査は第９次調査区に隣接し、途中これと同時進行で調査を行なった。調査区南側は旧沢跡になっており、遺構の大半は中央部から北半で検出されている。検出された遺構は平安時代の竪穴住居跡が４棟、溝状遺構１条、他に若干の柱穴状の遺構が検出された。

＜竪穴住居跡＞　４棟すべて平安時代の住居跡で重複関係にあり、いずれも形状は方形である。最大のもので一辺が６ｍを越え、カマド煙道部が西に２カ所、南に１カ所、北に１カ所残存する。

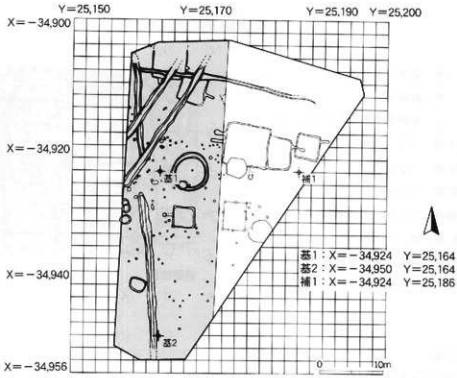
＜溝状遺構＞　全長は40mほどでこのうち東半分が調査区に載る。埋土から土師器片が数点出土しているが詳しい時期は不明である。

＜掘立柱建物跡＞　調査区中央よりやや南側に２間×３間の掘立柱建物跡を検出した。柱間は1.7mを基準としている。時期は不明である。

＜出土遺物＞　今回の調査では平安時代の土師器・須恵器の破片が大コンテナで４箱と他に若干の陶磁器片が出土している。

３．まとめ

これまでの調査で小幅遺跡が平安時代の集落を主体とする遺跡であることが確認されている。今回調査した区域からもこれまで同様、平安時代の竪穴住居跡、土坑などの遺構や平安時代の遺物が見つかっており、今後は周囲との比較による遺跡全体の性格を検討することが必要である。



小幅遺跡第８次調査遺構配置図

遺跡全景

平安時代の竪穴住居跡

遺物出土状況（カマド煙道部内）

遺物出土状況（住居床面）

小幅遺跡第８次調査検出遺構

(38) 向中野館跡第３次調査

所在地	盛岡市飯岡新田２地割124－１ほか
委託者	盛岡市
事業名	盛岡南新都市開発整備事業
発掘調査期間	平成10年５月19日～９月４日
調査対象面積	2,944㎡
発掘調査面積	2,944㎡
遺跡番号・略号	ＬＥ26－0205・ＯＭＮ－98－03
調査担当者	溜　浩二郎・山口俊規
協力機関	盛岡市教育委員会

遺跡位置　　1：50,000 盛岡

１．遺跡の立地

向中野館跡は東日本旅客鉄道仙北町駅より南西約1.3kmに位置し、雫石川右岸の河岸段丘上に立地している。遺跡の標高は121m前後で現況は水田跡および畑地である。本遺跡の北約300mの位置には奈良・平安時代の複合遺跡の台太郎遺跡がある。

２．調査の概要

調査においては周囲に農業用水路が巡っていること、粘土質の土壌から雨天時は勿論、遺構を掘ると水が湧いてくるということで発掘条件としては極めて劣悪な環境であった。特に堀跡の調査にあたっては全体を掘りあげるまでに壁面が崩落する状態で調査に多大な影響を及ぼした。また調査区現況は前述のとおり水田跡であり、開田時に平坦にするための削平を受けており特に高地であった西側において激しくなっている。

検出された遺構は平安時代の竪穴住居跡が10棟、土坑が７基、溝状遺構５条、竪穴状遺構が１基、堀跡３条である。

＜竪穴住居跡＞　全体で10棟が検出されている。いずれも正方形を基調とし、規模は最大で629×592cm、最小278×268cmで全体の形を確認できたものに関しては１棟を除き、いずれもカマドを有する。住居内におけるカマドの構築場所は規則性はなく、西側にカマドが設けられた住居跡が３棟と最も多い。住居跡にはいずれも貼り床等の跡は見られず、床面には大・小の礫が剥きだしになっているものが数棟あった。また開田時の造成により遺構はかなり削平されており特に南側に位置する住居跡の埋土の深さは３～７cm程と極端に浅かった。

＜堀跡＞　中世と考えられる３条の堀跡がそれぞれ東西、南北方向に巡っており、切り合いから新旧関係が確認できる。出土遺物は木片１点と若干の土師器片であるが遺跡内からは中世の陶器片も出土していることや本遺跡が中世の時代、この地方を支配下に置いていた飯岡氏の領内にあり、『志和軍記』に「南は湯沢領から赤林村地頭赤林左衛門領まで及び、北は猪去館領、太田館領を経て大釜館大釜奇衛領に至り、東は向中野館向中野金吾領を巡回して三本柳村地頭三本柳四郎衛門領に達していた。」との記述があることから今回検出された堀跡がこれに関連した遺構である可能性が高い。西側の堀跡は南北にはしり、幅は約640～820cmあ

り、底面は平坦で壁面の傾きは西側が6～35°、東側が18～50°である。深さは88～100cmで、西から東へと延びる堀跡と合流するが構築は南北に延びる堀跡の方が新しい。遺跡の中央を南北に走る堀跡は幅350～460cm、底面は平坦で壁面の傾きは東西いずれも47°で、深さは最大残存部で74cmある。

＜土坑＞　7基検出された。形状はいずれも円・楕円形を呈し、規模は最大で299×218cm、最小で98×91cmである。時期は出土遺物から平安時代のものと考えられる。

＜陥し穴状遺構＞　2基検出された。形状はいずれも溝状を呈し、開口部の径はそれぞれ172×31cm、251×43cmである。埋土からの出土遺物はない。

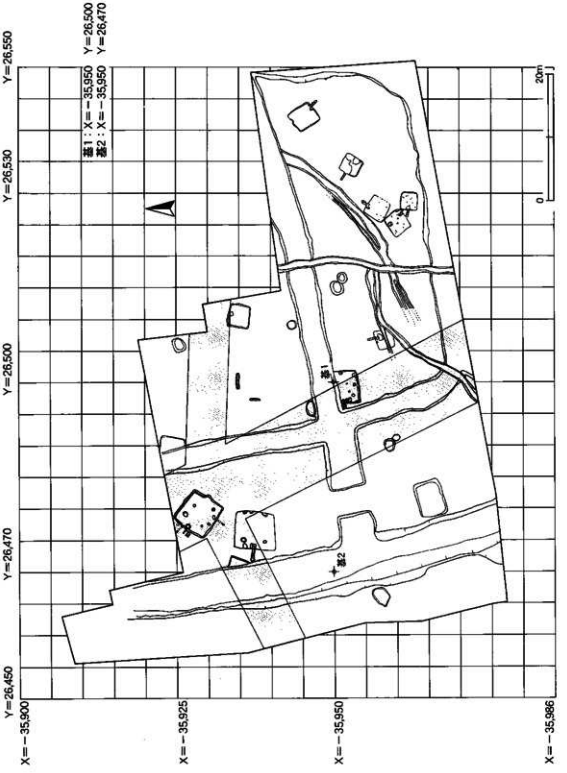
＜溝跡＞　5条が検出された。南北に走る溝は本遺跡内で最も新しいと思われ、出土した遺物は近・現代の陶磁器片や日用品等である。また他の溝状遺構に関しては時期は不明であるが埋土からの出土遺物は土師器・須恵器・近世陶磁器片などで前述の溝に切られている。

＜その他＞　ⅡＡ区の堀跡東側から竪穴状遺構が1基検出されている。形状は長方形状を呈し、規模は588×436cmである。埋土からは微量の土師器片が出土しているが隣接する堀との関連は不明である。

＜出土遺物＞　今回の向中野館跡第3次・4次調査では平安時代の土師器・須恵器の破片が大コンテナで4箱、陶磁器が1箱、また遺構外から縄文時代中期の土器片も微量であるが出土している。他に縄文時代の石鏃が1点、古銭（寛永通宝）6点、土製品2点が出土している。

3．まとめ

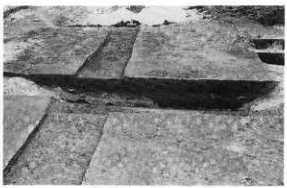
今回の調査で本遺跡が平安時代の集落跡と中世の館跡の一部であることが確認された。また陥し穴状遺構が検出されたことから縄文時代にはこの地が狩猟場として利用されていた可能性がある。向中野館跡に直接係わる建物跡の痕跡を今回の調査では確認出来なかったが堀跡が見つかったことで館の位置や規模を推察する手がかりを得ることができた。今後の調査で更に詳細な情報が得られることを期待したい。



向中野館跡第３次調査遺構配置図

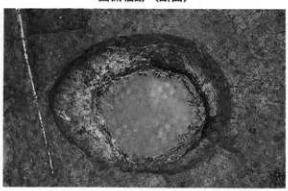
遺跡全景

西側堀跡（平面）



西側堀跡（断面）

平安時代の竪穴住居跡



土坑

向中野館跡第３次調査検出遺構

(39) 台太郎遺跡第18次調査

所在地	盛岡市向中野字向中野16－6ほか
委託者	盛岡市
事業名	盛岡南新都市計画整備事業
発掘調査期間	平成10年4月15日～11月20日
調査対象面積	27,133㎡
発掘調査面積	26,404㎡
遺跡番号・略号	ＯＤＴ－98・ＬＥ16－2269
調査担当者	高橋義介・金子佐知子・下田隆衛・溜浩二郎・佐藤綾子・鈴木見誌・山口俊規
協力機関	盛岡市教育委員会

1．遺跡の立地

本遺跡は、東日本旅客鉄道東北本線仙北町駅の南西側約900mに位置し、雫石川右岸の河岸段丘上に立地している。標高は120.90～121.90mで、北緯39度40分、東経141度8分付近にあたる。調査区の現状は休耕田と畠地で占められている。遺跡の東側は平成9年度調査の第16・17調査区が隣接し、北東側150mには昭和60年に盛岡市教育委員会によって調査が行われ奈良・平安時代の集落跡を検出した第3・4次調査区が続いている。

2．調査の概要

検出された遺構は、竪穴住居跡108棟、掘立柱建物跡13棟、竪穴状遺構19棟、土坑157基、炉跡1基、カマド状遺構4基、焼土遺構13基、堀1条、溝跡103条、波板状凹凸4箇所、円形周溝2基、井戸跡1基、柱穴状土坑630基、自然の流路5条等である。

＜竪穴住居跡＞ 奈良時代の竪穴住居跡は35棟検出されている。規模は1辺が3～6m前後のものが多く、平面形は隅丸方形、隅丸長方形、円形を呈している。内2棟は集落の中心的な役割を果たしたと思われる1辺が約9mの大型竪穴住居跡である。柱穴は4本柱を基本としている。カマドの設置位置は北壁と西壁の中央部とコーナーに寄るものとがあり、前者が多くを占めている。袖部の芯材に土師器の甕を伏せて使用するもの、小型の甕を支脚に転用した例もある。煙道部は大部分が刳りぬき式である。

平安時代の竪穴住居跡は73棟検出されている。規模は1辺が3～7m前後で、平面形は隅丸の方形と長方形を呈し、柱穴は確認できないものが多い。カマドの設置位置は西・東・北壁の3方向に散在し、中央部からコーナーに寄るものが多くを占めている。大部分の煙道部は刳りぬき式であるが、天井部と側壁に礫を使用した掘り込み式も1棟ある。

＜掘立柱建物跡＞ 13棟検出しており、内5棟は中世である。中世の掘立柱建物跡の規模は①桁行5間（10.8m）×梁行3間（6.2～6.4m）、②桁行9間（19.2～19.3m）×梁行3間（6～6.3m）、③桁行4間（8～8.2m）×梁行3間（6.3～6.4m）、④桁行5間（10.6～10.7m）×梁行5間（10.7m）である。棟方向は①②が南

北棟、③⑤が東西棟を示している。柱穴の掘り方は径25～90cmで、平面形は円形を基調とし他に楕円形・隅丸長方形がある。②は全てに④が一部に礎石を現存している。

近世の掘立柱建物跡の規模は、桁行６間（11.5m）×梁行４間（7.9m）である。棟方向は東西方向を示す。

＜竪穴状遺構＞ 規模は１辺が2.5～5.1mで、平面形は楕円形・隅丸長方形・不整形状である。時期は奈良時代が６棟、平安時代以降と思われるものも数棟ある。

＜土坑＞ 157基検出している。規模は開口部が30cm～4.3m前後で、平面形は円形・方形・楕円形・隅丸長方形状・不整形等がある。時期は平安時代が12基、中世１基である。大部分は時期不明なものが多い。

＜炉跡＞ １基検出している。焼土は赤褐色変化を生じ堅く締まっており、焼土直下に３cm程の炭層が見られる。

＜カマド状遺構＞ ４基検出している。燃焼部に焚き口と思われる土坑が付属し、平面形は８の字形を呈している。規模は1.6～2.3m×38～45cmである。

＜焼土遺構＞ 13基の規模は径12～70cm、平面形は円形と不整形状を呈している。焼成の厚さは３～最大14cmを測り、いずれも現地性の焼土である。時期は出土遺物がなく不明であるが、奈良時代と近世の掘立柱建物跡に伴うと思われるものが多い。

＜堀＞ 西側の大部分が調査区域外に延びているために規模の全容は不明である。本次調査で確認された長さは北辺側が26m、西辺側が53mで、北西側にコーナーがある。上幅は４～4.4m、下幅が２～2.5m、深さが70～90cm前後で巡っている。中世の環壕の一部と思われる。

＜溝跡＞ 大小合わせて103条検出している。時期は奈良・平安時代が22条、他は不明である。規模は上幅が18cm～2.1m、下幅が10cm～1.4m、深さ５～58cm、長さ3.2～60m前後である。調査区内を北西～南東方向に延びる平安時代大溝跡の埋土ににぶい黄橙色の十和田ａ降下火山灰のレンズ状の堆積が見られる。

＜波板状凹凸＞ ４箇所から検出している。幅20～60cm、長さ60～3.3mの不整な浅い土坑が長軸方向を同一にして並んでいる。土坑間の距離が接近している事から、畠とは考えにくい。これらの凹凸の機能は不明な点もあるが、道路跡の可能性がある。

＜円形周溝＞ ２基検出しているが竪穴住居跡や土坑で削平されており、全容は不明である。確認された規模は径4.2×3.7m、溝幅が30～50cm、深さ３～13cm、平面形は楕円形状を呈すると思われる。

＜井戸跡＞ １基検出している。開口部は４×3.8mの円形を呈し、深さは底まで掘っていないので不明である。検出面の1.8m下位から側板と井筒が出土している。側板は90cm方形で、中に単筒式の井筒がある。

＜柱穴状土坑＞ 規模は径25～50cm前後、平面形は円形・楕円形・不整形状等を呈している。調査区の中央付近と東側を中心に630基検出しているが、建物跡の柱穴や柵列にはならず用途および時期は不明である。

＜自然の流路＞ ５条検出しており、最も長いものは南側調査区をほぼ東西を横切るように流れている。また、支流と思われる小規模な流れも見られる。

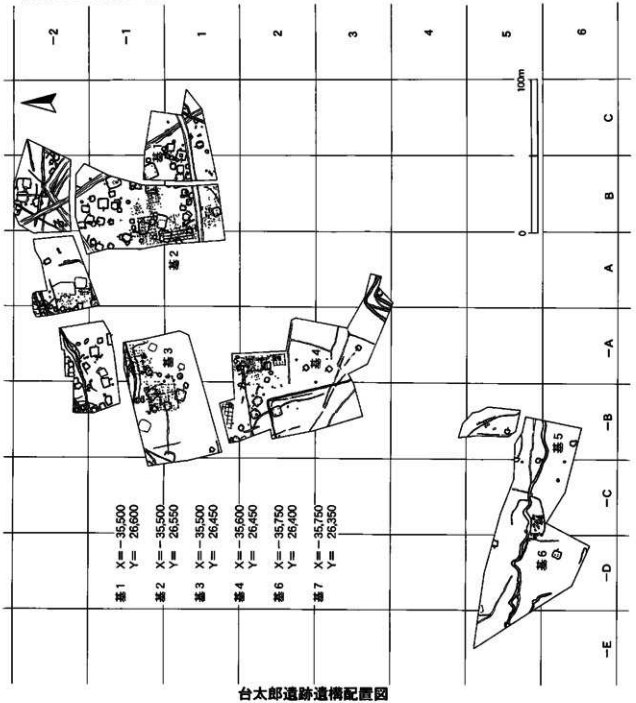
＜出土遺物＞ 縄文時代の遺物は土器と石器が数点出土しているだけである。大部分は奈良・平安時代の土師器と須恵器で占められている。器種は坏・高台坏・甕・大甕・壺・長頸壺・提瓶・甑等があり、中に墨書の坏や山形の文様を口縁部に施文した甕もある。一部の甕の表面には朱の痕跡が認められるものもある。

生活用具は土製紡錘車・土錘、鉄製品は刀子・釘・鉄鏃・環状製品・鋤先・鎌、石製品は砥石・磨石の種類がある。装飾品奈良時代の住居跡から碧玉製の管玉１点、コバルトガラス製の小玉が１点、平安時代の大溝から碧玉製の管玉１点出土している。他に青磁茶碗（中世）の破片、永楽通寶、寛永通寶・キセル（江戸時代）もある。

3．まとめ

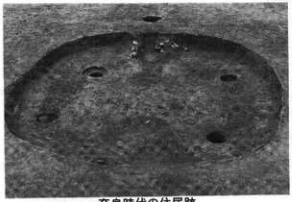
今回の調査では108棟の竪穴住居跡が検出されており、平成９年度と合わせると170棟以上の奈良～平安時代を中心とする大集落である。また、西側に巡る堀跡が中世の環濠の一部であることも確認され、段丘縁辺部から南側地域に奈良時代・平安時代・中世・近世の集落が断続的に立地する事が明らかになった。

竪穴住居跡からは多くの土師器や須恵器をはじめとし、農耕具の鋤先・鎌、武器である鉄鏃が出土している。北西側約２kmに位置する古代城柵の志波城跡と集落構造の関連性を考える上での貴重な資料を提供している。今後周辺の遺跡調査が進むにつれて、奈良時代・平安時代・中世の各時期における集落変遷の様相が明らかになると思われる。



台太郎遺跡遺構配置図

調査区全景



奈良時代の住居跡

平安時代の住居跡

波板状凹凸

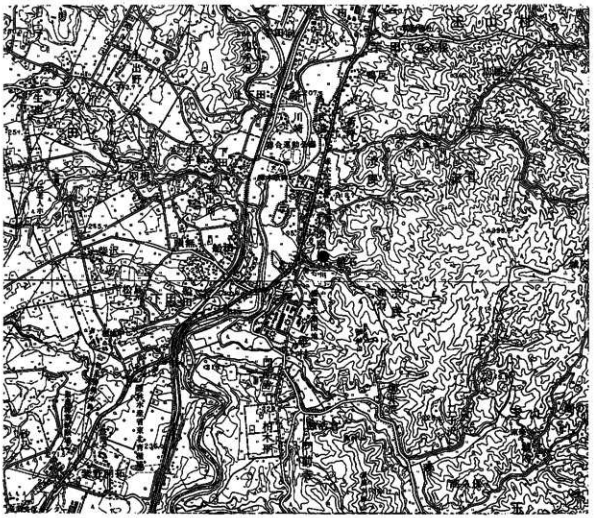
掘立柱建物跡

台太郎遺跡検出遺構

Ⅳ. 本　報　告

(40) 大森Ⅳ遺跡

所　在　地　岩手郡玉山村大字渋民字長渡45－3ほか
委　託　者　建設省東北地方建設局岩手工事事務所
事　業　名　国道4号渋民バイパス改築工事
発掘調査期間　平成10年4月8日～5月6日
調査対象面積　850㎡
発掘調査面積　850㎡
遺跡番号・略号　KE67－0122・OMⅣ－98
調査担当者　工藤　徹・相津吉彦
協力機関　玉山村教育委員会



遺跡位置　　1：50,000 盛岡・沼宮内

1．調査に至る経過

大森Ⅳ遺跡は、「一般国道４号、渋民バイパス改築工事」の施行に伴って、その事業区域内に存することから発掘調査を実施することとなったものである。

一般国道４号は、東京都中央区を起点として青森県青森市に至る延長約835kmのわが国最長の国道で、東北地方の大動脈となっている主要幹線である。このうち岩手郡玉山村の渋民地内は、幅員が狭く、(W7.8～8.5m）且つ両側に歩道が無い状態であり、近年の自動車交通の増大と大型化に伴い、沿道環境の保全及び交通安全の確保が困難になっている。このため、交通の円滑化、交通安全の確保、沿道環境の改善などを目的に昭和60年度の実施調査を経て、昭和61年度に事業着手し、現在事業を進めている。

この区間の埋蔵文化財包蔵地については、岩手県教育委員会が分布調査を実施しており、大森Ⅳ遺跡も確認されている。また、平成７年度には試掘を実施している。その結果に基づいて岩手県教育委員会は建設省東北地方建設局岩手工事事務所に対し事業について照会した。回答を受けた岩手県教育委員会は建設省東北地方建設局岩手工事事務所と協議を行い、発掘調査を財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることとした。これにより、岩手県教育委員会は平成10年度事業について、財団法人岩手県文化振興事業団へ通知した。これを受けて財団法人岩手県文化振興事業団は、大森Ⅳ遺跡について同年４月１日付けで委託契約を締結し、実際の調査は平成10年４月８日～５月６日の間実施した。

報告書作成に係る室内整理は冬季間に実施したが、調査によって発見された遺構・遺物とも些少であったことから、調査略報（平成10年度）に掲載して一切の報告を終了することとした。

2．遺跡の立地

大森Ⅳ遺跡は、東日本旅客鉄道東北本線渋民駅の東北東約1.6kmの地点にあり、北上川東岸の丘陵地の裾から北上川支流の舘石川に向かって低く傾斜する緩斜面に立地する。遺跡の標高は211～215mを測る。調査区の現況は山林・原野で、中央部には湧水があり湿地化している。本遺跡の周辺には、長渡遺跡、小長根Ⅱ遺跡、八幡館遺跡、芋田Ⅱ遺跡などがある。

3．基本層序

調査区域内では、基本的には右図に示すような層序が観察される。本遺跡の基本層序は以下のとおりである。

Ⅰ層　黒褐色土（10YR3/1）　現表土で、草木根が入る。締まりは中で、粘性は特に感じられない。層厚13～19cm。

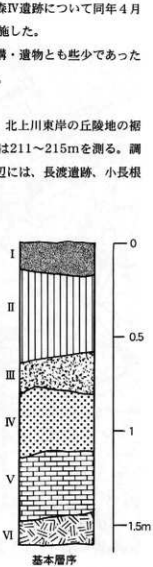
Ⅱ層　黒褐色土（10YR2/2）　粘性はなく、締まりがやや密である。締まりが密で、粘性が強い黄褐色土（10YR5/6）が斑状に混入する。畑あるいは水田造成時の盛土と考えられる。調査区中央部から南にいくにつれ厚くなり、北側の緩斜面では見られない。層厚0～52cm前後。

Ⅲ層　暗褐色土（10YR3/3）　締まりはやや密で、粘性は特に感じられない。明褐色パミス粒を微量に含む。調査区中央から北側では認められない。層厚０～19cm。

Ⅳ層　黒色土（10YR2/1）　締まり、粘性ともに中。層厚30～35cm。

Ⅴ層　黄褐色土（10YR5/6）　締まりはやや弱く、粘性は強い。層厚35cm前後。

Ⅵ層　褐色土（10YR4/4）　締まりはやや密で、粘性がやや強い。大小の礫を含む。層厚10cm以上。



4．調査の概要

今回の調査で検出された遺構は、土坑１基、陥し穴状遺構１基、柱穴状土坑２基である。いずれも調査区南側の平坦面で検出されており、中央部及び北側の緩斜面では遺構は確認されなかった。

＜土坑＞ 調査区の南西側の平坦面、ⅡＢ12区のⅢ層中で検出された。土坑の規模は、開口部137×111cm底部109×81cm、深さ34cmで、形状は平面形が楕円形、断面形が浅鉢状を呈する。埋土は褐色土の単層で、暗褐色土がブロック状に混入する。底面はほぼ平坦で、壁はゆるやかに外傾して立ち上がる。出土遺物はない。時期・性格についての詳細は不明である。

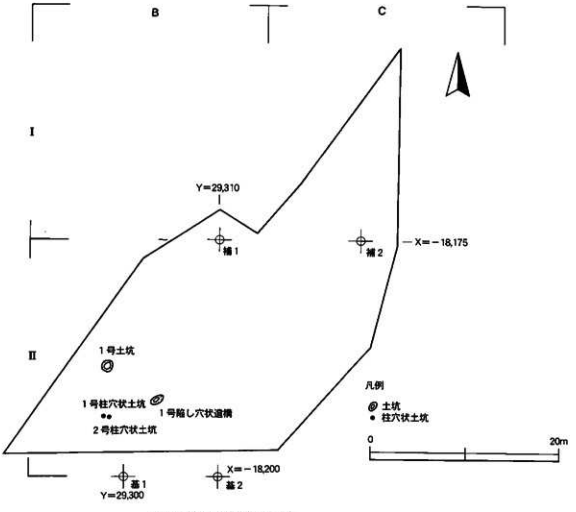
＜陥し穴状遺構＞ 調査区南側の平坦面、ⅡＢ18区のⅢ層中で検出された。土坑の南東約5.5mに位置する。規模は、開口部153×60cm、底部71×17cm、深さ91cmで、形状は、平面形が長楕円形、断面形が袋状を呈する。埋土は２層に細分され、黒褐色土を主体とする。底面は溝状で、硬く締まる。壁はほぼ直立して立ち上がり、開口部でやや外傾する。副穴等は確認されない。出土遺物は縄文土器片１点である。出土遺物が１点と少なく、詳細な時期を特定するには資料不足である。

＜柱穴状土坑＞ 調査区南側の平坦面、ⅡＢ17区のⅢ層中で２基検出された。１号柱穴状土坑の規模は、開口部51×35cm、底部61×30cm、深さ54cmで、形状は、平面形が楕円形、断面形が円筒形を呈する。埋土は２層に細分され、黒褐色土を主体とする。上位から縄文土器片１点が出土している。２号柱穴状土坑は１号柱穴状土坑の東約20cmの地点で検出された。規模は、開口部37×34cm、底部28×23cm、深さ61cm、形状は、平面形がほぼ円形で、断面形が円筒形を呈する。埋土は２層に細分され、黒褐色土を主体とする。出土遺物はない。これら２基の柱穴状土坑の配列からは竪穴住居跡の柱穴とは断定できず、住居跡の床面と判断できる痕跡も確認されず、性格・時期については特定できない。

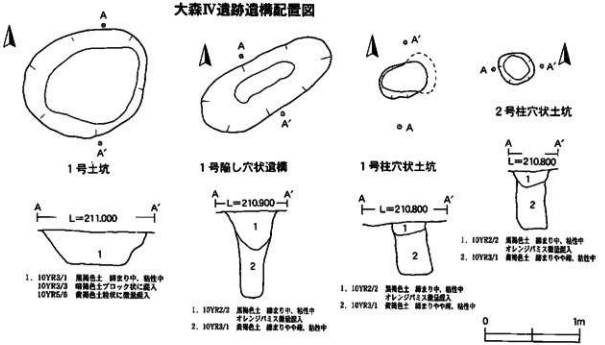
＜出土遺物＞ 出土した遺物は、小コンテナで0.5箱で、縄文時代の土器片７点、続縄文時代と思われる北海道系土器片５点、平安時代の土師器片29点、近現代の陶器片２点、石器16点である。特に集中して出土した区域はみられない。遺物の出土層位はⅠ層直下及びⅢ層である。以下、図版及び写真図版に掲載した遺物について若干の説明を加えることとする。１は１号陥し穴状遺構の埋土上部から出土した深鉢土器の胴部破片である。胎土は砂粒・繊維を僅かに含みやや粗い。羽状縄文が施される。土器片の特徴から縄文時代前期前葉に属すると思われる。２は調査区北側の緩斜面部のⅡ層中から出土した鉢の口縁部片である。口唇部に小山形突起を持ち、口縁部に平行沈線が施される。口縁部内側にも沈線が施され、丁寧に磨かれる。土器片の特徴から、縄文時代晩期中葉に属すると思われる。３～６は北海道系土器で、後北Ｃ２・Ｄ式に相当する。胎土や器形・文様構成等の特徴からいずれも北海道産のものと推定される。３は注口付深鉢形土器の注口部分で、微隆起線と三角形及び円形刺突列が施文される。４は深鉢形土器の底部で、微隆起線、帯縄文が施文される。５・６はいずれも深鉢形土器の胴部破片と思われ、微隆起線、帯縄文が施文される。これらの北海道系土器とほぼ同様の土器は、本遺跡の周辺では盛岡市の永福寺山遺跡から出土している。７は北側斜面部Ⅰ層直下から出土した土師器甕の口縁部片、８は中央部平坦面Ⅲ層から出土した土師器坏の口縁部片である。いずれも平安時代のものと思われる。

5．まとめ

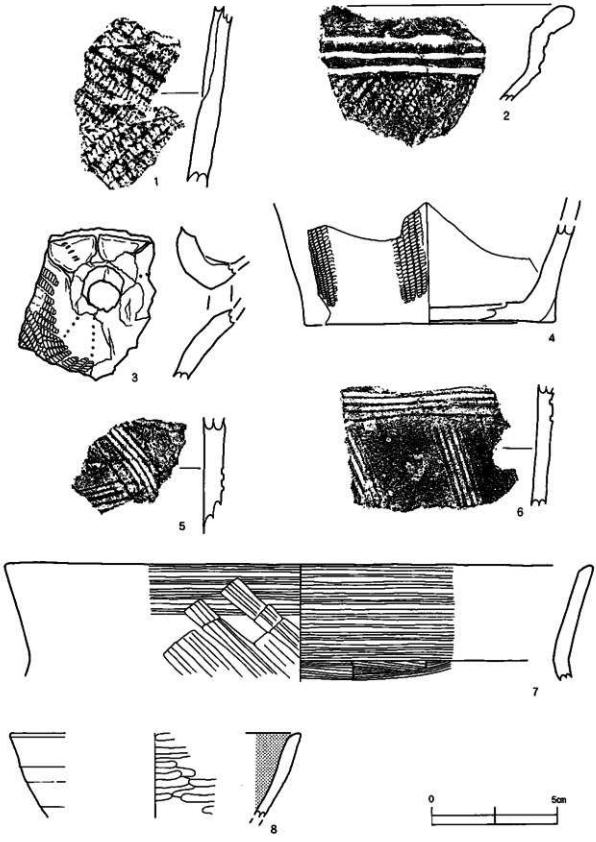
今回の調査では住居跡の検出はなかったが、土坑の検出と遺物が出土したことにより周辺地域に縄文時代から古代にかけての集落跡の存在が想定される。また陥し穴状遺構の検出から狩り場として利用されていた時期があったことも明らかになった。今後、周辺地域の調査が進むにつれ本遺跡の全容が解明されるものと思われる。なお、大森Ⅳ遺跡に関する報告は、これをもってすべてとする。



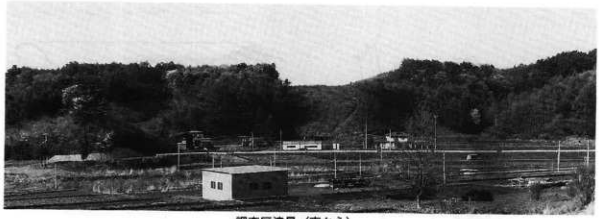
大森Ⅳ遺跡遺構配置図



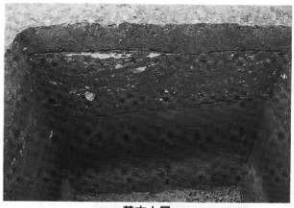
大森Ⅳ遺跡、検出遺構



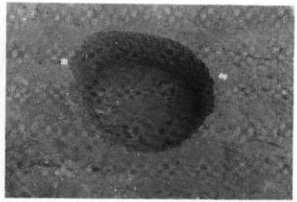
大森Ⅳ遺跡出土遺物



調査区遠景（南から）

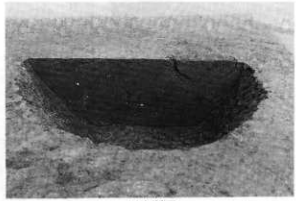


基本土層

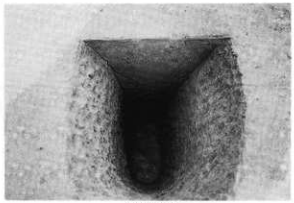


1号土坑

1号陥し穴状遺構

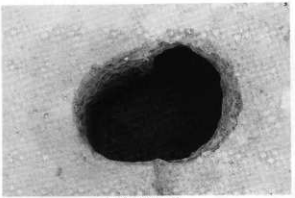


同上断面

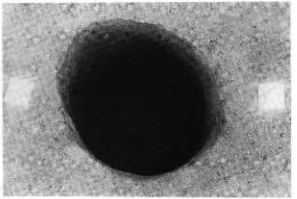


同左断面

大森Ⅳ遺跡検出遺構（1）



1号柱穴状土坑



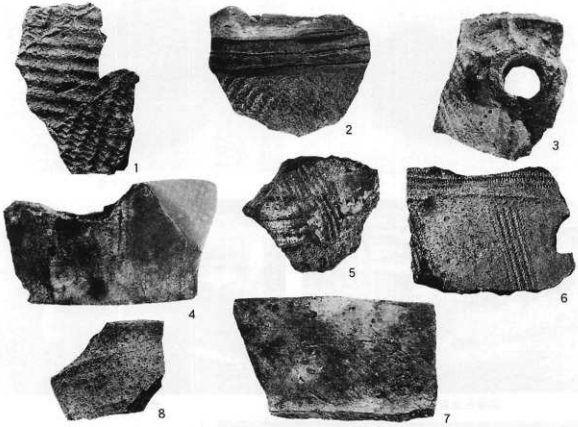
2号柱穴状土坑

調査区全景（北から）

作業風景

調査区全景（南から）

大森Ⅳ遺跡検出遺構（2）



大森Ⅳ遺跡出土遺物

報告書抄録

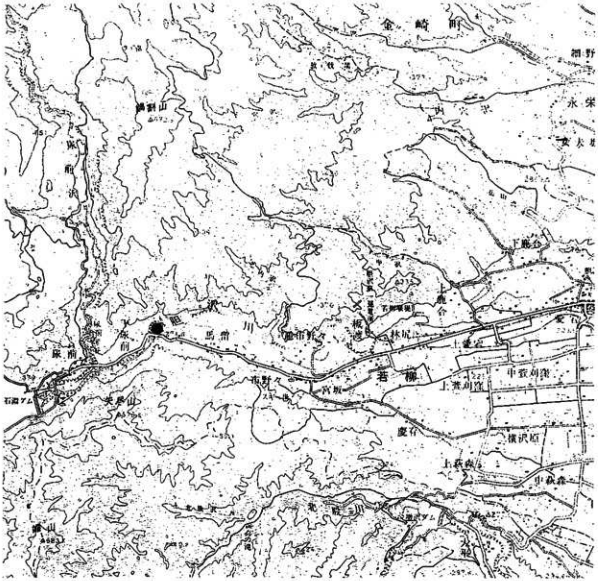
ふりがな	おおもりよんいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	大森Ⅳ遺跡発掘調査報告書
副書名	国道４号渋民バイパス改築工事関連遺跡発掘調査
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第　集
編著者名	工藤　徹
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡 11-185　TEL (019)-638-9001
発行年月日	西暦1999年　3月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
大森(おおもり)Ⅳ遺跡	渋民(しぶたみ)岩手県(いわてけん)岩手郡(いわてぐん)山村大字(やまむらおおあざ)渋民字(しぶたみあざ)長渡45－３ほか	03307	KE67-0122	39度50分7秒	141度10分32秒	1998.4.8～5.6	850㎡	国道４号渋民バイパス改築工事に伴う緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大森Ⅳ遺跡	土器散布地	縄文時代 続縄文時代 平安時代	土坑１基 陥し穴状遺構１基 柱穴状土坑　２基	縄文土器・続縄文土器 土師器・陶器・石器	

(41) 穴山堰遺跡（あなやませき）

所　在　地　胆沢郡胆沢町若柳字馬留１－３ほか
委　託　者　建設省東北地方建設局胆沢ダム工事事務所
事　業　名　胆沢ダム建設工事
発掘調査期間　平成10年６月16日～８月24日
調査対象面積　2,500㎡
発掘調査面積　2,500㎡
遺跡番号・略号　ＮＥ21－2308・ＡＹ－98
調査担当者　半澤武彦・菊池貴広
協力機関　胆沢町教育委員会



遺跡位置　　1：50,000 焼石岳

1．調査に至る経過

北上川水系の一部となる胆沢川は、岩手県内有数の穀倉地帯である胆沢平野地域一帯を潤す役割を担っているが、胆沢川扇状地を形成していることからも、かつては荒れ川であり、台風などの自然災害時には地域に氾濫の被害を与え、また水利権を巡る面においても、幾多の影響を流域一帯に及ぼしてきた。

このため、流域の治水・利水事業と地域開発の一環として、戦後に北上川水系の五大ダム計画（石淵・田瀬・湯田・四十四田・御所）を推進し、昭和28年、胆沢川流域の胆沢町若柳字尿前地区に、国内初のロックフィルダムとなる石淵ダムが完成した。

近年、流域の発展に伴う人口と産業の集積等により、より規模の大きなダム建設が求められるようになり昭和48年４月、「北上川水系工事実施基本計画」の改定に基づき、石淵ダムの下流約２㎞の地点に、完成すれば東洋では最大のロックフィルダムとなる「胆沢ダム」を建設するに至った。

胆沢ダム建設工事に伴い、ダム堤体直下となり消滅してしまう、胆沢町若柳字馬留地区に位置する穴山堰遺跡の平堰部分（2,500㎡）の発掘調査を、建設省東北地方建設局胆沢ダム工事事務所からの委託を受け、平成10年６月16日から８月24日までの期間で実施した。

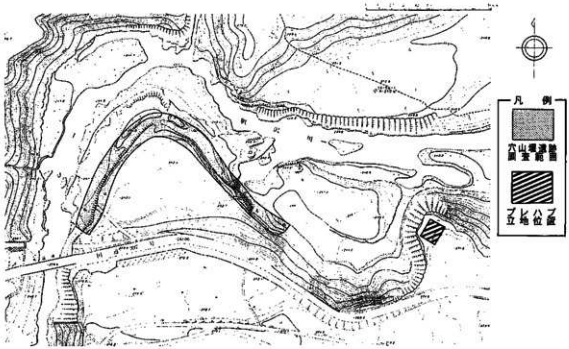
2．遺跡の立地

穴山堰遺跡（平堰跡）は、水沢市内の中心部から国道397号線を西へ19㎞の地点に位置し、奥羽山系の焼石岳の麓付近から東流する胆沢川の、馬留橋直下から下流へ右岸河岸段丘崖沿いを掘り込むように、河川の流れとほぼ並行して立地する。

調査範囲は、長さ250m・幅10mの2,500㎡で、現況は段丘面・段丘崖に草木が生い茂る荒れ地となっている。

近隣には、本遺跡と対称的な場所に位置する西側の胆沢川左岸河岸段丘面に、尿前・下尿前遺跡がある。

穴山堰遺跡（平堰跡）の調査範囲



穴山堰遺跡全景（南方向を俯瞰）

A：馬留橋　B：風化部分（約100m）C：昭和穴（昭和2～3年）D：七右ェ門穴　E～H：余水吐　I：余水吐及び水門

3．調査の概要

穴山堰全体は、今回の発掘調査地点付近から下流の前沢町白鳥付近までの部分を指し、数ある胆沢地区の用水堰の中でも歴史は古いものとされ、誰がいつの時代に初代穴山堰の工事に着手したのか、明らかにされてはいない。

この堰は、山体・丘陵地の地中を貫く「穴堰（あなぜき）」部分と、地平を開削して造られた「平堰（ひらぜき）」部分とに分けられるが、今回発掘調査を行ったのは、江戸時代末期～昭和２年まで使用された「平堰跡」の部分である。

発掘調査対象の平堰跡は、自然災害等、度重なる胆沢川の流路変更や河床面の低下により、下流にあった取水口からの導水に支障を来したため、今回の発掘地点へ江戸時代末期になって新たに造られたとされている。「江戸時代末期に造営」とし断定できないのは、現在保管されている遺跡についての文献が、近年に地元の民家を改築した際に、襖（ふすま）の裏紙として発見されたわずかな古文書片に限られているためである。

今回、発掘調査の対象となった平堰跡は、昭和２年にその大部分の使用が取り止められているが、東端部の平堰終点部分であり、且つ穴堰の入口部分（別名、「七右ェ門（しちえもん）穴」と呼ばれているが、命名の由来については不明である。）と、そこから約30m西へ遡った山側斜面の壁に、「昭和穴」と呼ばれる昭和２年～３年までの１年のみしか使用されなかった、「次の世代を担った穴山堰」が存在している。つまり平堰跡終点付近の短い区間を、次世代穴山堰としてごく僅かな期間のみ、再び利用されたのである。

こちらの方は、水の取り入れ口が馬留橋の上流50m地点の右岸に設けられ、昭和穴まで山体の基盤岩をくり抜くトンネルとなっており、平堰跡のバイパスとしての役割を果すべく昭和２年に完成したが、翌年には、全く別ルートの「現穴山堰」が更に上流の地点へ完成するに至り、その役割を終えている。

現在では、馬留橋の上流50m地点の右岸取水口は金網と砕石によって封鎖されているが、その出口であった昭和穴からは、トンネル内の漏水が、後に記述する「西側から４番目の余水吐」に向けて、絶えず流れ出している。

＜平堰跡全体部分＞ 上流部に位置する馬留橋直下を起点として、「馬留浦」と呼ばれる高くほぼ垂直な段丘崖岩壁の下部付近に位置する穴堰入口までの約250m区間に、河川と並行する平堰跡の遺構が確認された。ただし、馬留橋直下から約100m区間は胆沢川の攻撃斜面となっており、度重なる荒天時の増水によって侵食され風化していたが、残りの約150m区間においては、底部となる部分に多いところで２m余りにも達する砂礫の堆積があったにもかかわらず、堀り込み部分の外形はほぼ原形をとどめていた。

調査区の砂礫層の下を、基盤岩がほぼ全域にわたり覆っているものの、平堰の底部においては、約50cmの幅で方形状を成しながら且つ平滑に掘削され、淀みなく用水が流れるように施されていた。基盤岩が石英粗面岩質で粒子が粗く脆いこともあり、比較的容易に開削作業を進めることができたのではないだろうか。

＜石積み＞ 調査区で、河川の攻撃斜面に当たる100m区間においては、石積みは見られなかったが、穴堰入口までの残り150m区間では、掘り込まれた平堰の両側で、随所に石積みが発見された。「発見された」という言い方をしたのは、使用されなくなってから既に70年余りの年月が経過し、砂礫が多いところでは２m以上も堆積しており、雑物撤去や草木等の刈り払いを終えた時点でも、石積みが積もった砂礫でそのほとんどが隠された状態のままだったこともあり、調査期間後半まで見つけることができなかったためである。

場所によって石の材質や形、積み方などが異なっていて、造られた時期の新旧をおおよそに掴むことができる。

例えば、平堰内部の攻撃斜面においての石積みは、丸型の自然石で統一された「野面積み」であり、用水堰の建設時点か、あるいはそれに最も近い早い時期に造られたと推定しているが、局部的には、径が２m程度の巨石も埋め込まれており、元来その場所にあったものを利用したのか、あるいは別な場所から持ってきたものなのかは定かではない。後者の場合であれば、建設当時の人力に頼らざるを得ない水準を考えれば、正に驚異的な土木技術といえるだろう。

一方、攻撃斜面以外の滑走斜面・直線部分においては、石積みも簡易的なものであったり、後年になってあらためて造られたものと考えられる。後年に造られたと考えられるのは、石の形が鋭角的なものがほとんどで、クサビを使用して割られた石（石にクサビのあとが残っているものが幾つか存在する）を交互に隙間なく積み上げており、攻撃斜面に於いての石の形・積み方と比較しても、明らかに技術の進歩が見られるからである。

なお、重機により石積み裏側部分の「裏込め石」の有無を調査したが、確認されなかった。

＜余水吐＞ 平堰の原形が残されている穴堰入口までの150m区間では、異常気象時の増水に備えた大小５か所もの余水吐が存在する。

西端側から順に数えて１番目の余水吐は、他の余水吐と比較して規模は大きいものの、両側に石積み等の人手が加わった痕跡は発見できず、平堰廃棄後に造られた対岸からの導水パイプが残るのみであった。

２番目に当たる余水吐は規模が最も小さく、平堰の河川側堤体部分を約1.5m堀り込んで造られたものである。規模が小さいことと、平堰の底面から相当高い部分に余水吐の底部があることからも、異常気象時の増水が最大値に達した際に、平堰決壊を防ぐ緊急的な役割を担ったものと考えられる。

３番目の余水吐は、砂礫を取り除いた時にほぼ完全な形で姿を現したものである。余水吐の中では最も規模が大きく、壁面から底部にかけて、高さ約50cm～１mの石積みが凹状のアーチ型に形成されていた。

４番目の余水吐は他のものと比較して小規模で、自然石が剥き出しになり、この平堰の次の世代のものとして造られた穴山堰のバイパス出口（昭和穴）から、現在も流出する湧水によって大きく侵食されている。この余水吐は胆沢川から南側に約50m離れ、河川水面との比高は約７ｍもあり、ここから流出した水は、河川へ直接流れ込まず、河川と余水吐との間に存在する池（径約20m）に滝となって注いでいる。

東端部に位置する最後の余水吐は、穴堰入口北側脇に存在するが、ここにはコンクリートと自然石で造られた水門が設けられている。水門の出口は、両側を高さ約1.5～２m、長さ約5.5mの石積み（自然石を利用した野面積み）と、底面も自然石で組まれた構造になっており、水門（高さ1.8m・横95cm）の底部からは木製の遮水板のかけら４点が発見されている。これらのことを併せて考慮すると、完全に使用が停止される昭和３年まで人の手が絶えず加えられ、余水吐としての機能が十二分に生かされていたとともに、課せられた役割は、他の余水吐よりも大きかったのではないかと考えられる。

＜平堰終点且つ穴堰入口部分：通称「七右エ門穴」＞　今回の発掘調査範囲には、穴堰内部の調査まで含まれてはいなかったが、入口部分のみ平堰跡と併せて調査を実施した。

この穴堰入口の別名は「七右エ門穴」とも呼ばれており、調査当初、入口部分は雑木が生い茂り、倒木と多量の土砂や礫で、穴堰天頂部の数cmを僅かに残して塞がれている状況にあった。これら雑物を撤去したところ、高さ110cm・最大幅118cmの馬蹄形状を呈する穴堰入口が現れ、水門と繋がるようにセメントと自然石による石積みが、穴堰入口左側部分を保護するように造られていた。

穴堰の内部は、奥へ進むにつれて幅を狭め、左右の壁はほぼ垂直に切り立ち、天頂部へ向かうに従い丸みを帯びる構造となり、脆い石英粗面岩質の山体基盤岩を手作業によって、底面まで滑らかに掘り抜き、淀みなく導水できるように施工されていたことが明らかになった。

４．出土遺物

唯一、東端部の余水吐に付随する水門の底部から、木製の遮水板４点が発掘された。最も大きいものは、縦70cm・横19cm・厚さ１cmで、他の４点についてもこの遮水板と全く同じ材質の破片である。

木製遮水板が埋もれていた部分は、水を多量に含んだ砂礫が厚く堆積して泥濘（でいねい）状態を呈していたことからこの木片の化学反応が遅れ、腐食が進まなかったのではないだろうか。

５．まとめ

胆沢扇状地に数ある用水堰の中でも、古い歴史を持っていながら詳しい歴史資料がないために、いつの時代に誰が「穴山堰」の開削を行ったのか、諸説はありながらも不明のままであることは、遺跡の性格や構造からみても惜しまれる。今回当センターが発掘調査を行ったのは、長い歴史を持つ穴山堰から鑑みれば、使用された時期や平堰跡という発掘箇所からもほんの僅かな部分の調査に過ぎず、この調査結果だけで全てを表現することは無論できない。特に、この平堰跡から続く、同時代に掘削された穴山「穴堰跡」の部分も建設当時の技術や工夫を、顕著に何い知ることができる看過できない箇所と思うからである。

今回の発掘調査は、全国的にも過去に同様な調査を行っているところが少ないため、資料収集も含めて困難な面があったが、今後類する調査が行われる際の一助となれば幸いである。

なお、穴山堰遺跡発掘調査に関する報告は、当書をもって本報告に代えるものとする。

参考文献

北海道埋蔵文化財センター　1989　「今金町　美利河１・２砂金採掘跡報告書　第59集」
文京区神田上水遺跡調査会　1991　「神田上水石垣遺構発掘調査報告書」
山梨県昭和町教育委員会　1997　「昭和町かすみ堤」
山梨県塩川下河原堤防遺跡発掘調査会　1998　「塩川下河原堤防遺跡発掘調査報告書」
島根県埋蔵文化財調査センター　1998　「斐伊川放水路発掘物語」

①

②

③

調査前の状況（写真①～⑤）
① 馬留橋から北東方向を俯瞰
②・③河川側堤体部中央から東方向を俯瞰
④ 河川側堤体部中央から西方向を俯瞰
⑤ 河川側堤体部東側から東方向を俯瞰

④

⑤

⑥馬留橋付近の風化部分（南西方向）

⑦平堰跡中央付近（南西方向）

⑧平堰跡中央部（断面図４の部分）の試掘作業

⑨平堰跡中央部巨石付近の作業状況

人力によるクリーニング・検出作業（１次）の状況（写真⑥～⑨）

馬留橋から北東方向を俯瞰

馬留橋付近の風化部分（南西方向）

平堰跡中央付近（南西方向）

平堰跡東端部分（西方向）

人力によるクリーニング・検出作業（１次）終了状況

平堰跡中央から西側にかけてを、更に掘り下げた

左写真同地点の検出終了状況（南西方向）

平堰跡中央の検出終了状況（北東方向）

左写真同地点の検出終了状況（南西方向）

重機による検出作業（２次）の状況

平堰跡西側（立面図①）の石積み（北西方向）

平堰跡中央（立面図②－2）の石積み（北方向）

平堰跡中央（立面図③）の石積み（南東方向）
※他の地点とは異なり、鋭角的な石が多く、クサビ跡も見られる

平堰跡西側（余水吐3・立面図⑦）の石積み（北東方向）

平堰跡東側（立面図⑭）の石積み（南東方向）

「七右エ門穴」付近の余水吐・水門（南方向）

「裏込め石」は発見されなかった（断面図2）

底部が凹状に開削されている

平堰跡各地点における「石積み」の形態

↖平堰跡中央部・巨石下の基盤岩開削状況

↑同地点・50cm×50cmの凹状を呈する

←同地点・底面高がほぼ同レベルで続いている

（七右エ門穴）の検出過程

1．検出前の「七右エ門穴」の様子（南方向）

2．雑木・大量の砂礫を取り除く

3．左写真同地点・検出終了状況

4．開口部は縦110cm×横118cmの馬蹄形を呈する

5．内部は滑らかに山体基盤岩を掘り抜いている

平堰跡底部・七右エ門穴に見られる細部施工の様子

断　面1（調査区中央・立面図2付近）

1層：	10YR4/3	・黄褐色	・締まりやや緩	・粘性なし	・腐食土	
2層：	〃　4/3	〃　・	密	・　〃	・	砂
3層：	〃　4/3	〃　・	やや密	・　〃	・	砂質シルト
4層：	〃　3/3	・暗褐色	・	〃	・粘性小	・シルト
5層：	〃　4/2	・灰黄褐色	・	緩	・粘性なし	・砂（径大）
6層：	〃　3/4	・暗褐色	・	〃	・　〃	・〃
7層：	〃　4/2	・灰黄褐色	・	〃	・　〃	・砂（径大）
8層：	〃　3/4	・暗褐色	・	〃	・　〃	・砂質シルト

※6層より下は、石英粗面岩質の山体基盤岩で、固結に固化してある。

堤体断面2（河川側・立面図2－2付近）

1層：	10YR2/2	・黒褐色	・締まり	緩	・粘性なし	・腐食土
2層：	〃　4/2	・灰黄褐色	・	密	・　〃	・砂
3層：	〃　4/3	・鈍い黄褐色	・	〃	・　〃	・砂質シルト
4層：	〃　5/2	・灰黄褐色	・	やや緩	・　〃	・砂（炭石混）
5層：	〃　4/3	・鈍い黄褐色	・	緩	・　〃	・砂質シルト
6層：	〃　4/2	・灰黄褐色	・	〃	・　〃	・砂
7層：	〃　4/3	・鈍い黄褐色	・	やや緩	・　〃	・砂質シルト
8層：	〃　4/3	〃　・	緩	・　〃	・	・（礫中含）
9層：	〃　3/2	・黒褐色	・	〃	・　〃	・砂（礫大含）

※9層より下は、巨礫と石英粗面岩質の山体基盤岩となっている。

堤体断面3（山側・立面図2－2付近）

1層：	10YR2/2	・黒褐色	・締まり	緩	・粘性なし	・腐食土
2層：	〃　4/3	・鈍い黄褐色	・	〃	・　〃	・　〃
3層：	〃　4/2	・灰黄褐色	・	やや密	・　〃	・砂
4層：	〃　4/3	・鈍い黄褐色	・	〃	・　〃	・砂質シルト
5層：	〃　4/2	・灰黄褐色	・	密	・　〃	・砂及び礫

※5層より下は、巨礫と石英粗面岩質の山体基盤岩となっている。

断　面4（立面図2－2付近）

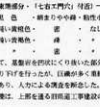
1層：	10YR3/3	・暗褐色	・締まりやや密	・粘性小	・腐食土	
2層：	〃　4/3	・鈍い黄褐色	・	密	・粘性なし	・砂質シルト
3層：	〃　3/2	・黒褐色	・	緩	・粘性小	・シルト
4層：	〃　4/2	・灰黄褐色	・	やや密	・粘性なし	・砂（炭石混）
5層：	〃　4/3	・鈍い黄褐色	・	緩	・　〃	・砂質シルト
6層：	〃　3/2	・黒褐色	・	〃	・　〃	・砂
7層：	〃　3/3	・暗褐色	・	〃	・　〃	・砂
8層：	〃　4/6	・褐色	・	〃	・粘性小	・砂質シルト

※8層より下は、石英粗面岩質の山体基盤岩で、固状に固化してある。

断　面5（調査区中央・立面図2付近）

1層：	10YR2/1	・黒　色	・締まり	緩	・粘性なし	・腐食土
2層：	〃　4/3	・鈍い黄褐色	・	やや密	・　〃	・砂
3層：	〃　4/3	〃　・	〃	・　〃	・	・砂質シルト
4層：	〃　6/6	・褐　色	・	緩	・	・シルト
5層：	〃　5/2	・灰黄褐色	・	〃	・　〃	・　〃
6層：	〃　4/2	〃　・	〃	・　〃	・	・　〃
7層：	〃　4/2	〃　・	〃	・　〃	・	・砂
8層：	〃　4/4	・褐　色	・	〃	・	・砂（径大）
9層：	〃　4/2	・灰黄褐色	・	〃	・小	・砂質シルト

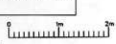
※9層より下は、石英粗面岩質の山体基盤岩で、固状に固化してある。
4層～8層まで、部分的に20%程度の礫を含んでいる。



断　面6（調査区東端部分・「七百工門穴」付近）

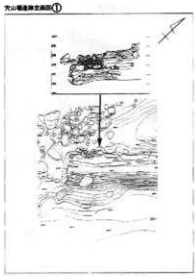
1層：	10YR3/1	・黒　色	・締まりやや緩	・粘性小	・腐食土	
2層：	〃　7/2	・鈍い黄褐色	・	密	・　なし	・小砂の礫層
3層：	〃　4/3	・鈍い黄褐色	・	緩	・　〃	・2cm径の礫層
4層：	〃　4/3	〃　・	〃	密	・　〃	・10cm径の礫層

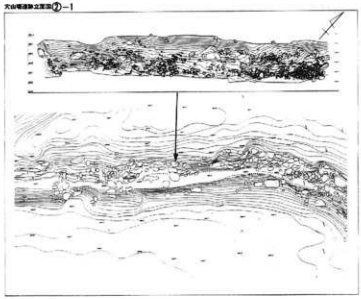
※4層より下については、基盤岩を固状にくり抜いた部分の存在を確認するために更なる掘り下げを行ったが、巨礫が多く重機進入も不可能な場所ということもあり、人力による調査を断念した。
調査を阻んだ巨礫は、上部を通る群馬道工事建設の際に投棄されたものである。



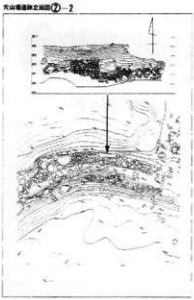
（註）「断面４」以外は、㈱シン技術コンサルによる写真測量を実施した

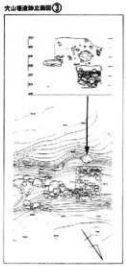
平堰跡内部及び堤体部　断面図

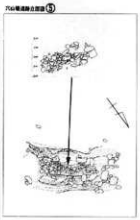




①には、クサビ跡が見られた







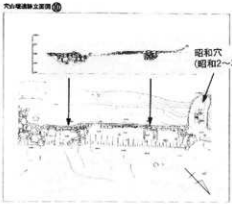
③・④には、クサビ跡が見られた

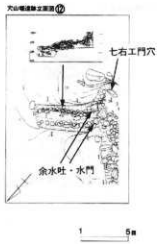
1　　5m

⑥には、クサビ跡が見られた

(註)各図上段が「立面図」、下段が「平面図」を表している。
各図の数字は、巻末の概要図を参照。
各実測図の測量・作図は㈱シン技術コンサルに依頼した。
立面図の番号と折り込み図面

平堰跡の立面図及び平面図（その1）





⑲地点は巨礫が多く、作業困難であったため、試掘・検出は最小限にとどめた。

平堰跡の立面図及び平面図（その２）

「七右エ門穴」付近の余水吐・水門底部から出土した遮水板の一部

報告書抄録

ふりがな	いわてけんまいぞうぶんかざいはっくつちょうさりゃくほう
書名	岩手県埋蔵文化財発掘調査略報
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書
シリーズ番号	第311集
編著者名	千澤武彦
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡 11-185　TEL (019)-638-9001
発行年月日	西暦1999年　3月31日

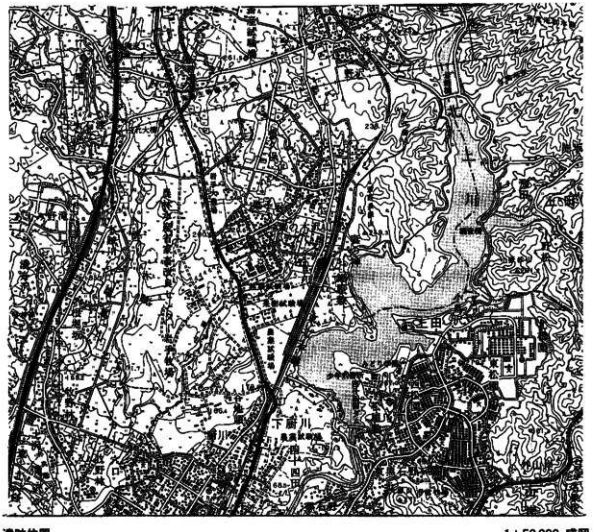
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
穴山堰遺跡	岩手県胆沢郡胆沢町若柳字馬留１－３ほか	03383	NE21-2308	39度7分9秒	140度55分32秒	1998.6.16～8.24	2,500㎡	胆沢ダム建設工事に伴う、緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
穴山堰遺跡	用水堰跡（平堰跡）	江戸時代（末期）～昭和２年	平堰跡主体部分 穴堰跡入口部分 余水吐５か所 石積・水門	水門遮水板４片（木製）	平堰跡東端部30m区間のみ、昭和３年まで使用された

穴山堰遺跡概要図
(平面図・立面図及び断面図の分布)

(42) 葉の木沢Ⅲ遺跡

所　在　地	岩手郡滝沢村滝沢第13地割葉の木沢山511－9
委　託　者	日本鉄道建設公団盛岡支社
事　業　名	東北新幹線盛岡・八戸間鉄道建設工事
発掘調査期間	平成10年10月1日～10月29日
調査対象面積	6,700㎡
発掘調査面積	2,290㎡
遺跡番号・略号	ＫＥ86－0303・ＨＳⅢ－98
調査担当者	早坂　悟・中野敦夫・菊地栄壽
協力機関	滝沢村教育委員会



遺跡位置　　1：50,000 盛岡

1．調査に至る経過

葉の木沢Ⅲ遺跡は「東北新幹線盛岡～八戸間の建設工事」の施行に伴って、その事業区域内に存することから発掘調査を実施することになったものである。

東北新幹線は昭和48年に盛岡～青森間の整備計画が策定され、平成３年に盛岡～沼宮内間及び八戸～青森間は新幹線鉄道直通線（ミニ新幹線）とし、沼宮内～八戸間は標準新幹線（フル規格新幹線）として実施計画が認可され、同年９月に盛岡～青森間の建設工事に着手した。その後、平成７年に盛岡～沼宮内間がフル規格新幹線に変更になり、現在、盛岡～八戸間96.6kmの新幹線工事が本格的に進められている。

また、八戸～新青森間については、平成10年３月に標準軌新線（フル規格新幹線）として実施計画の認可を受けて同年７月に八甲田トンネル出口の工事に着手している。

盛岡～八戸間の埋蔵文化財包蔵地については、岩手県教育委員会が既に分布調査を実施し、葉の木沢Ⅲ遺跡も確認されている。その結果に基づいて岩手県教育委員会は日本鉄道建設公団盛岡支社に対し、事業について照会した。回答を受けた岩手県教育委員会は日本鉄道建設公団盛岡支社と協議を行い、発掘調査を財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることとした。

実際の調査には、平成10年10月１日に着手し、同年10月29日で終了し現場を撤収した。

報告書作成に係わる富内整理作業は同年度の冬季間に実施、遺構・遺物ともに些少であったため、調査略報（平成10年度）に掲載して本報告とした。

2．遺跡の立地

葉の木沢Ⅲ遺跡は、ＪＲ東日本旅客鉄道東北本線滝沢駅の南南西約３kmに位置し、岩手火山を給源とする火山灰砂台地に立地している。調査区西側及び北側には宅地が広がり、東側はＪＲ東北本線が南北に縦断、南側は植林地帯がさらに盛岡市内に向かって延びている。遺跡の標高は202m前後で、調査区中央から南・北・西の三方向に緩やかに傾斜し、東側は鉄道沿いに急斜面になっている。調査前の状況は、植林地帯及び休耕田である。

3．遺跡の基本層序

本遺跡の基本層序は次の通りである。

Ⅰ層	10YR2/1	黒色	シルト	表土。草木根が入る。層厚20cm～30cm。
Ⅱａ層	10YR2/2	黒褐色	シルト	粒径５～10mmの小礫をわずかに含む。層厚20～25cm。
Ⅱｂ層	10YR3/2	黒褐色	シルト	漸移層。上部から遺物が出土。検出面。下部にいくにつれて黄褐色土ブロックの含有率増。層厚30cm～35cm。
Ⅲａ層	10YR4/6	褐色	粘土質シルト	分かれ火山灰層、基盤層。20～25cm。
Ⅲｂ層	10YR5/8	黄褐色	粘土質シルト	基盤層　層厚10～20cm。
Ⅲｃ層	10YR4/4	褐色	砂質シルト	柳沢軽石　Ⅲｂ層に部分的に含まれている。
Ⅲｄ層	10YR5/6	黄褐色	粘土	基盤層　層厚不明

4．調査の概要

調査対象地域6,700㎡内に、およその遺構の有無、密度を確認するために２ｍ×20ｍの計37本のトレンチ（約1,500㎡）を東西の方向にほぼ等間隔で入れた。その際、最南端に位置するものをＴ１とし、順に北に向かってＴ37までトレンチの番号を付した。その後、遺物が出土した付近（Ｔ16～Ｔ23）のトレンチを広げ、検出を行った。また、遺構（陥し穴）が存在した場合、並びを確認するためにトレンチを広げ、最終的に2,290㎡について精査を行った。その他のトレンチは、さらにⅢａ層上まで掘り下げ遺構の存在を確認

した。その結果、検出された遺構は、陥し穴状遺構６基、新規と思われる溝状遺構１条、時期不明の溝状遺構２条である。

<陥し穴状遺構>　調査区南側・中央・北側からそれぞれ２基ずつ検出された。平面形は、全て溝状を呈し、断面形は、台形または逆台形を呈する。規模は最大のもので4.10m×0.95m、深さは1.28mを測る。時期を比定できる出土遺物を伴わなかったため、詳細は不明である。

<溝跡>　調査区最南端に、東西方向に平行するように２条検出された。時期等は不明であるが、調査区外に延長部分とみられるくぼみがあることなどから、用水路跡の可能性がある。また、調査区北側からは、溝が１条検出された。Ⅰ層下～Ⅱ層上からの掘り込みであるため、近・現代の遺構であると思われる。

5．出土遺物

縄文時代の土器片20数点、不定形石器10数点、凹石１点、磨石２点が出土している。

１は５号陥し穴状遺構埋土上部から出土した深鉢土器の胴部破片である。胎土は砂粒を含み、内面調整はナデである。２～12は深鉢土器の破片で全て遺構外出土遺物である。２はＲＬ縄文を施している。３～12は無文土器で、胎土に砂粒・小礫を含んでいる。いずれの土器も小破片であり、繊維らしきものを含まないが胎土は早期のものと類似しているなど、明確な特徴がみられず詳細は不明である。

石器類は20は第５号陥し穴状遺構から出土、その他は遺構外出土遺物である。13～19までは不定形石器で、13～15はほぼ全縁に、16～17は二辺にわたって、18～19は部分的に二次加工が施されている。

6．まとめ

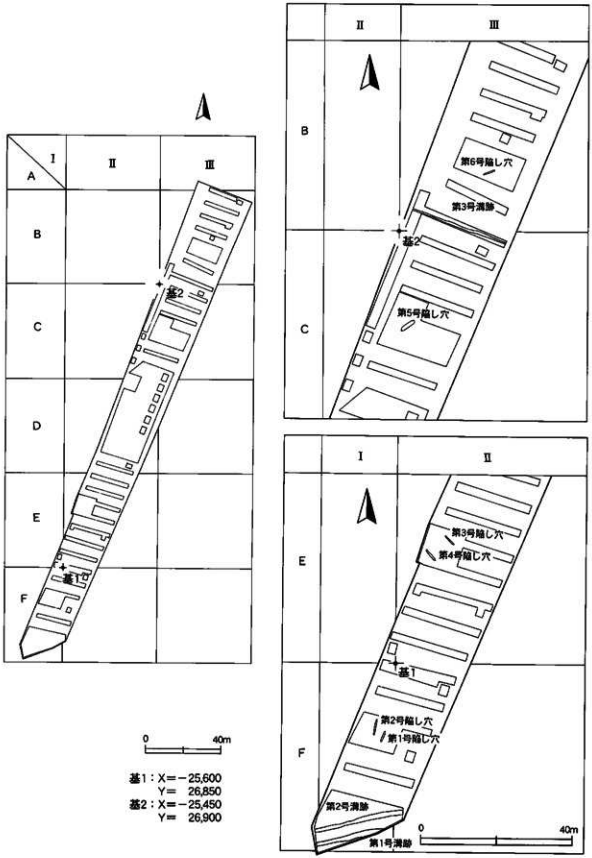
今回の調査によって、葉の木沢Ⅲ遺跡は縄文時代に狩り場となっていたことが明らかになった。縄文土器片及び磨石等石器が出土したことから、生活の痕跡は認められるものの、集落の場としては利用されていなかったことも確認された。また、隣接する遺跡も同様の性格を持ち、陥し穴状遺構は存在するものの住居跡は検出されていない。なお、葉の木沢Ⅲ遺跡に関する報告は、これをもって全てとする。

報告書抄録

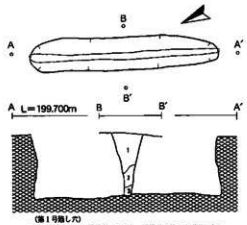
ふりがな	いわてけんまいぞうぶんかざいはっくつちょうさりゃくほう
書名	岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（平成10年度分）
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書
シリーズ番号	第　集
編著者名	早坂　悟
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡 11-185　　TEL (019)-638-9001
発行年月日	西暦1999年　3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
葉の木沢Ⅲ遺跡	岩手県岩手郡滝沢村滝沢13地割葉沢山511－9ほか			39度46分8秒	141度8分48秒	1998.10.1～10.29	2,290㎡	東北新幹線盛岡・八戸間鉄道建設に伴う、緊急発掘調査

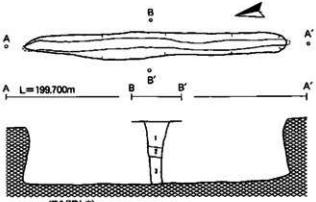
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
葉の木沢Ⅲ遺跡	散布地	縄文時代	陥し穴状遺構６基 溝跡３条	縄文土器片20点 剥片石器17点 石器３点	


A
I
II
III
B
C
D
E
F
基2
基1
第6号陥し穴
第3号溝跡
第5号陥し穴
第3号陥し穴
第4号陥し穴
第2号陥し穴
第1号陥し穴
第2号溝跡
第1号溝跡
0
40m
基1：X＝－25,600
Y＝ 26,850
基2：X＝－25,450
Y＝ 26,900

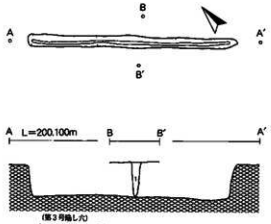
葉の木沢Ⅲ遺構配置図



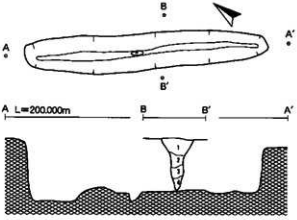
（第１号陥しピ）
1．10YR2/3　黒褐色　シルト　明褐色土粒をまばらに含む。
2．10YR2/3　黒褐色　シルト　明褐色土との混土。
3．10YR1.7/1　黒色　シルト　明褐色土粒をわずかに含む。



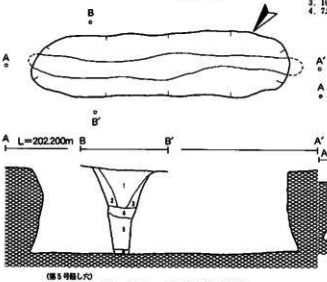
（第２号陥しピ）
1．10YR3/3　黒褐色　シルト　明褐色土粒をまばらに含む。
2．7.5YR5/6　明褐色　シルト　黒色土ブロックをごくわずか含む。
3．10YR1.7/1　黒色　シルト　明褐色土粒をわずかに含む。



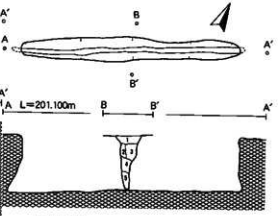
（第３号陥しピ）
1．10YR1.7/1　黒色　シルト　明褐色土粒をまばらに含む。



（第４号陥しピ）
1．10YR2/1　黒色　シルト　明褐色土粒を含む。木根による攪乱ブロック含む。
2．10YR3/3　黒褐色　シルト　明褐色土粒を少量に含む。
3．10YR3/2　黒褐色　シルト　明褐色土粒との混土。
4．7.5YR5/6　明褐色　シルト



（第５号陥しピ）
1．10YR3/1　黒色　シルト　明褐色土粒をわずかに含む。
2．10YR2/2　黒褐色　シルト　明褐色土粒との混土。
3．10YR3/2　黒褐色　シルト　黒色ブロックをまばらに含む。
4．10YR3/2　黒褐色　シルト　褐色土との混土。黒色土の割合多い。
5．7.5YR5/6　明褐色　砂質シルト　黒褐色土粒をまばらに含む。
6．10YR1.7/1　黒色　シルト　明褐色土粒をまばらに含む。



（第６号陥しピ）
1．10YR3/1　黒色　シルト　褐色土粒をまだらに含む。
2．10YR3/2　黒褐色　シルト　褐色土ブロックを全体に含む。
3．10YR2/3　黒褐色　シルト　褐色土ブロックをまばらに含む。
4．10YR3/2　黒褐色　シルト　褐色土粒を全体に含む。
5．10YR3/3　暗褐色　シルト　褐色土粒と黒褐色土粒との混土。

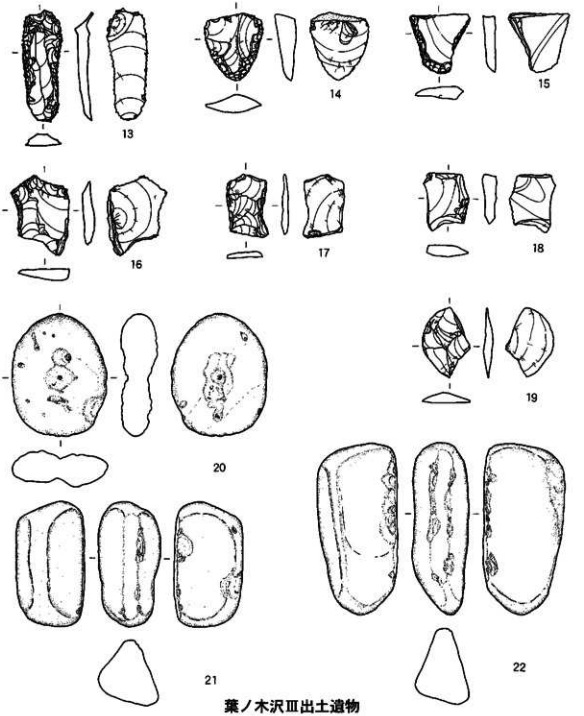
0　1m

葉の沢Ⅲ遺跡陥し穴状遺構

表1　陥し穴状遺構観察表

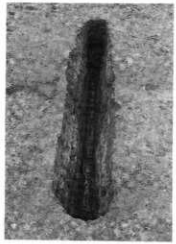
遺構名		第1号陥し穴	第2号陥し穴	第3号陥し穴
形状	縦断面形	台形	台形	逆台形
	横断面形	V字状	V字状	V字状
規模	開口部径	2.98×0.50m	4.18×0.38m	3.35×0.16m
	底部径	3.04×0.09m	4.28×0.16m	3.14×0.05m
	深さ	0.96m	0.94m	0.54m
長軸方向		N－25°－E	N－10°－E	N－44°－W
埋土		最上位～中位は黒褐色土主体、その中に明褐色土を含む。最下層に黒色土が入る。	層上位に黒褐色土、中位に明褐色土を含む。最下層には黒色土が入る。	黒色土で占められる。
底面		ほぼ平坦で固く締まる。粘土層を底面とする。	平坦で固く締まる。粘土層を底面とする。	平坦で粘土層を底面とする。

遺構名		第4号陥し穴	第5号陥し穴	第6号陥し穴
形状	縦断面形	逆台形	台形	台形
	横断面形	Y字状	Y字状	V字状
規模	開口部径	3.85×0.54m	4.10×0.95m	3.48×0.32m
	底部径	3.58×0.10m	4.32×0.28m	3.25×0.06m
	深さ	0.68m	1.28m	0.87m
長軸方向		N－38°－W	N－52°－E	N－65°－E
埋土		黒色土でほとんどが占められている。最下層に明褐色土が入る。	層上位は黒褐色土主体、中位にしまりのない明褐色土層を含み、最下層に黒色土が入る。	層上位～中位にかけて黒色土で占められる。層下位に暗褐色土を含む。いずれの層も褐色土を含む。
底面		凹凸があり、中央部に逆茂木痕と思われる副穴を持つ。粘土層を底面とする。	平坦で固く締まる。粘土層を底面とする。	平坦で固く締まる。粘土層を底面とする。



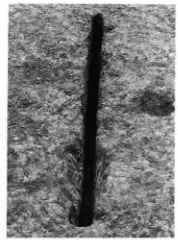
葉ノ木沢Ⅲ出土遺物

No.	出土地点	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質
13	ⅡD9c区	Ⅲa層	掻・削器・その他	5.95	2.1	0.9	8.66	頁岩
14	ⅢD1b区	Ⅱa層	〃	3.6	3.1	1.1	9.96	〃
15	ⅢD1a区	Ⅱa層	〃	3.1	3.2	0.6	6.51	〃
16	ⅢC2f区	Ⅱa層	〃	4.2	3.1	0.6	7.93	〃
17	ⅢC3f区	Ⅱa層	〃	3.4	2.2	0.4	3.27	〃
18	ⅡD9c区	Ⅰ層	〃	3.1	2.1	0.7	4.92	〃
19	ⅡC0e区	Ⅱa層	〃	3.6	2.5	0.5	3.32	〃
20	第5号陥し穴	Ⅰ層	凹石	9.7	7.5	2.9	195.28	安山岩質溶岩
21	ⅢC2g区	Ⅱa層	磨石	13.25	7.2	6.8	849.46	石英安山岩
22	ⅡD0b区	Ⅱb層	〃	18.2	8.6	5.8	1283.45	安山岩



第1号陥し穴

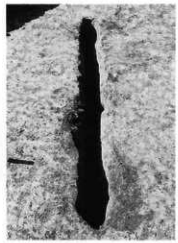
第2号陥し穴



第3号陥し穴

第4号陥し穴

第5号陥し穴



第6号陥し穴

葉の木沢Ⅲ遺跡検出遺構（1）

第1号溝跡

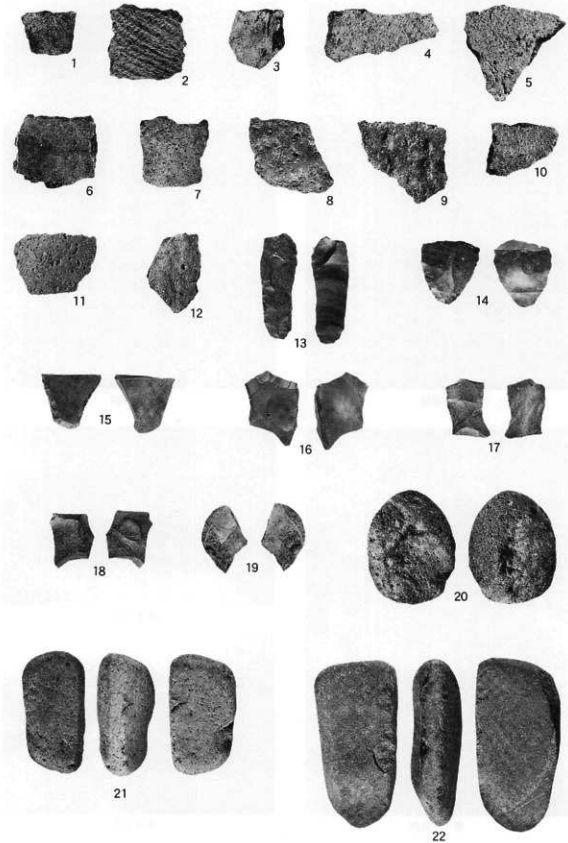
第2号溝跡

第3号溝跡

基本土層

遺跡遠景

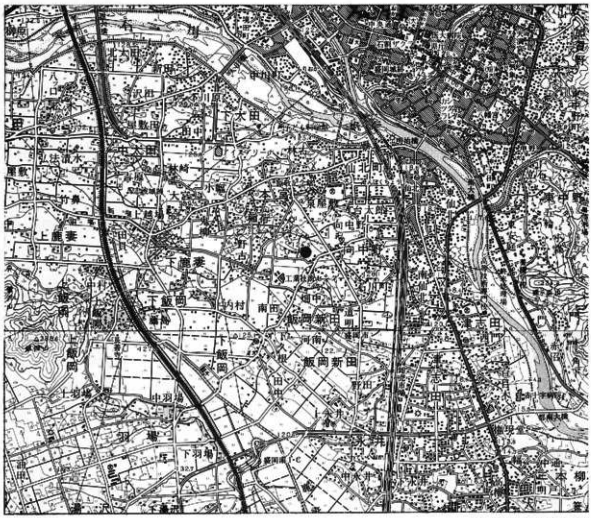
葉の木沢Ⅲ遺跡検出遺構（2）



葉の木沢Ⅲ遺物写真

(43) 飯岡才川遺跡第２次調査

所　　在　　地　盛岡市飯岡新田２地割１－２ほか
委　　託　　者　岩手県保健福祉部
事　　業　　名　環境保健センター建設
発掘調査期間　平成10年４月８日～６月15日
調査対象面積　5,600㎡
発掘調査面積　5,600㎡
遺跡番号・略号　ＬＥ16－2291・ＩＳＷ－98－02
調 査 担 当 者　溜　浩二郎・山口　俊規
協　力　機　関　盛岡市教育委員会



遺跡位置　　1：50,000 盛岡・日詰

1．調査に至る経過

飯岡才川遺跡第2次の発掘調査は第３次岩手県総合発展計画後期実施計画事業の一環として整備される「環境保健センター（仮称）」建設工事に伴う緊急発掘調査である。平成８年度盛岡市教育委員会による「盛南開発」関連試掘調査によって同建設予定地が埋蔵文化財包蔵地に含まれることは既報であり、同年施設建設に際しての発掘調査が決定した。

平成９年10月８日付け保福第771号「埋蔵文化財発掘の通知について」の提出・受理を受け平成10年度、㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター受託事業として今回当遺跡の調査を実施した。

2．遺跡の立地

飯岡才川遺跡は東日本旅客鉄道・仙北町駅から南西約1.5kmに位置し、雫石川によって形成された標高123m前後の河岸段丘の一部に立地している。現雫石川との高低差は約６m、調査前は主に畑地として利用されていた。遺跡の西北西約2.3kmには志波城跡、北東約300mの地点には奈良・平安時代の大規模集落跡台太郎遺跡が、東側約500mには平安・中世の複合遺跡、向中野館跡がそれぞれ近接している。

3．遺跡の基本層序

本遺跡は度重なる雫石川の氾濫によって運ばれた砂礫やシルト質に被覆された沖積面の砂礫段丘上に立地する。また地形を反映して表土下の地層は東西一様の堆積状態で、基本的には以下のとおりである。

第Ⅰ層：10YR2/2　黒褐色土　粘性なし　しまりあり　やや砂質　植物根を多く含む　耕作土

第Ⅱ層：10YR2/1　黒色土　粘性ややあり　しまりややあり　やや砂質　旧表土

第Ⅲ層：10YR2/1　黒色土　粘性なし　しまりややあり　やや砂質　褐色土（10YR4/6）30%含む

第Ⅳ層：10YR4/6　褐色土　粘性なし　しまりあり　やや砂質　遺構検出面

第Ⅴ層：10YR4/6　褐色砂礫層　粘性なし　しまりあり　３～５cm程度の礫を含む

4．調査の概要

遺跡調査区は東側環境保健センター（仮称）建設部と西側取り付け道路部の大きく二つに分かれ、便宜上東西各々をＡ区・Ｂ区として調査を行った。Ａ区からは陥し穴状遺構３基、土坑１基、溝状遺構７条、掘立柱建物跡１棟、またＢ区からは溝状遺構１条、柱穴状ピット57基をそれぞれ検出した。

＜土坑＞　Ａ区南西部より１基検出した。平面形は隅丸の方形、規模は105×74cm、深さ43cmを測る。埋土よりの出土遺物はなく、時期・性格ともに不明である。

＜陥し穴状遺構＞　Ａ区より３基検出した。全て平面形は溝状で、いずれも軸線を北西方向に取る。規模は最大のRD02で358×54cm、深さ81cmである。埋土中から遺物は出土しなかったものの、形状から縄文時代に属するものと思われる。

＜溝状遺構＞　調査区を東西に貫くものが５条、南北に及ぶものが３条、計８条が検出された。規模は最長がＡ区を横断するRG01で約95mに及び、更に調査区外北東へと続く。削平のため一部存在が希薄な部分もあり最大幅、深さとも定かではないが、各残存値ではRG01で幅385cm・深さ28cm、RG08で幅192cm・深さ18cmである。RG01の埋土を中心に近世～現代の陶磁器片が少量出土していることから、同時期に存在し地境、もしくは水路的な用途を果たした遺構と考えられる。

＜掘立柱建物跡＞　Ａ区南から１棟検出された。東西３間×南北２間で西側に庇を持つ。地元住民の話から近代の農作用施設と判明した。各柱穴からの出土遺物は無い。

＜柱穴状ピット＞　Ｂ区より57基を検出した。一部RG08によって分断されているものの、およそ1.8～2.2mの間隔で整然と配列されている。今年度調査区外にもその範囲は及ぶと考えられるため、各柱穴を結んで

の全体像は明らかでない。ただし柱間隔等から見る限り床材を支える束の存在も含め、なんらかの構造物を構成すると思われる。遺物は柱穴の埋土上層より陶磁器片が一点出土している。

<出土遺物> 今回の調査で出土した遺物は土師器片１点、寛永通寶１点、陶磁器小コンテナ１箱である。RG01・02・04等、A区溝状遺構からは近世肥前・瀬戸産の染付、東北在地産の陶器等が出土した（1～7）。A区東部・近現代攪乱跡からは寛永通寶（12)、同地点及び周辺からは近世に属する肥前、相馬産等の陶磁器片を若干出土した（8～10)。ただし、全体から見て遺構内・外とも出土した遺物は近代以降のものが主体である。なお土師器片（11）は遺構外第Ⅲ層内からの採集による。

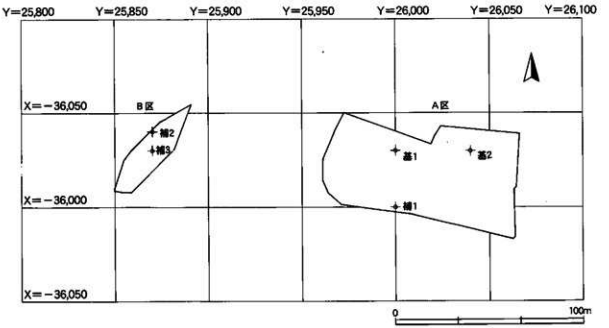
5．まとめ

発掘調査の結果、本遺跡からは縄文時代の陥し穴状遺構と近世～近代の溝状遺構、及び構造物跡を確認し、同時代における人々の痕跡を窺い知ることができた。縄文時代に関しては一切の出土遺物が無いため、本遺跡は生活の中心地には該当しないが、検出遺構から狩猟場の一部にあったとは考えられる。

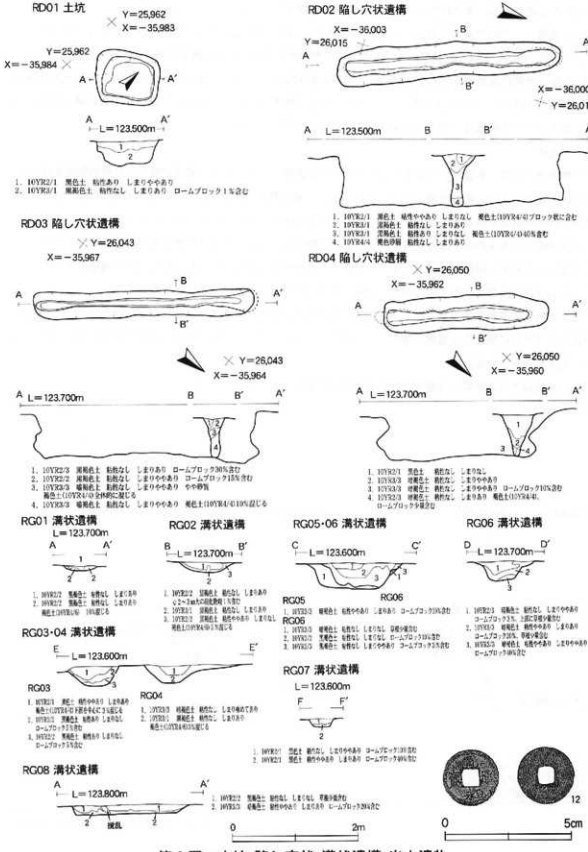
近世以降ではA区の出土遺物や同調査区外東に比較的古いと思われる井戸跡が存在すること等から鑑みて、東部周辺に古民家・屋敷跡の存在が考えられる。またB区より検出された柱穴群は今回の調査区外へと続き、ここでもA区で予想されるものと同様の遺構が広がる可能性が高い。

また平成８年度試掘調査報告から本遺跡には古代～平安時代の集落跡の一部が予想されていたが、今回の調査からはそれに関連する遺構・情報は得られなかった。しかしこれについても未だ周辺部に存在する可能性を大きく残している。

なお、飯岡才川遺跡第２次調査に関わる報告はこれをもって全てとする。

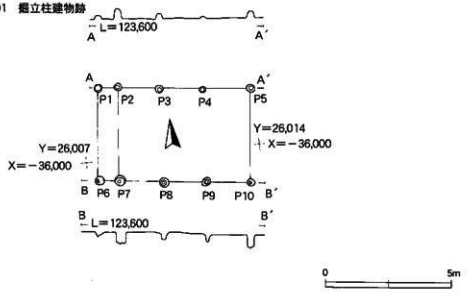


飯岡才川遺跡第２次調査区割図

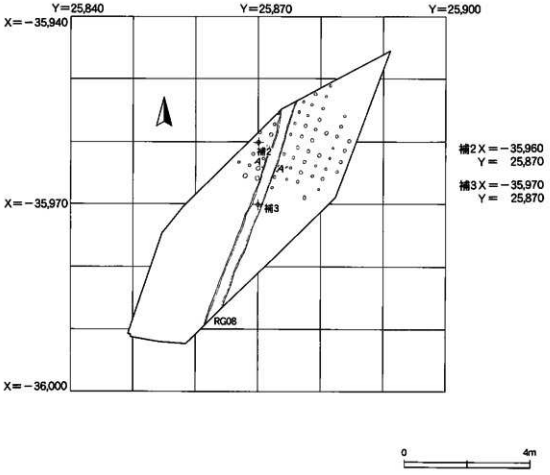


第２図　土坑、陥し穴状・溝状遺構・出土遺物

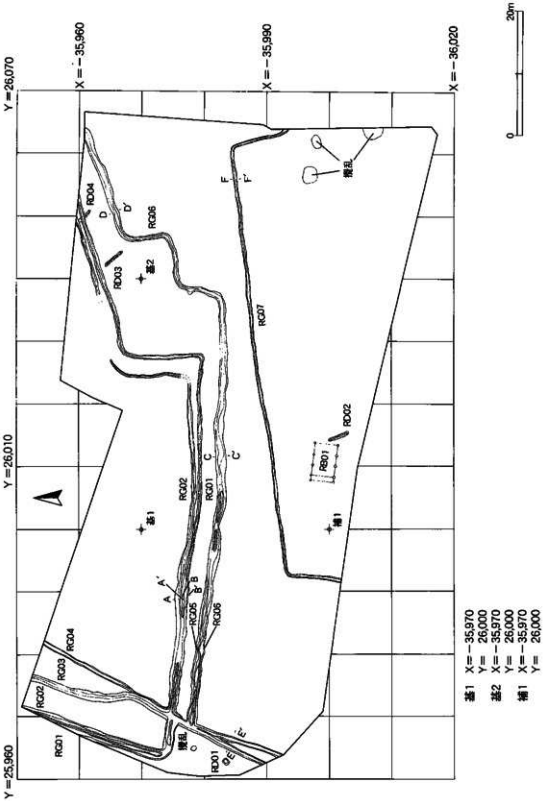
RB01　掘立柱建物跡



〈B区〉遺構配置図



第3図　掘立柱建物跡・〈B区〉遺構配置図

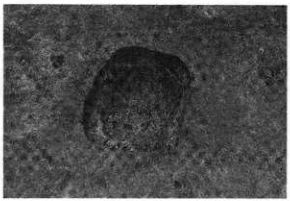

X=−35,960
X=−35,990
X=−36,020
Y=26,070
Y=26,010
Y=25,960
20m
0
RD01
RD02
RD03
RD04
RD05
RD06
RD07
RG01
RG02
RG03
RG04
RG05
RG06
RG07
RB01
井1
井2
井3
井4
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
F
F'
X=−35,970
Y=26,000
X=−35,970
Y=26,000
X=−35,970
Y=26,000

第4図　〈A区〉遺構配置図

西側調査区全景（B区）

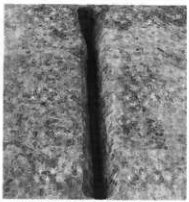
東側調査区全景（A区）

RB01堀立柱建物跡



RD01土坑　平面（西側から）

RD02陥し穴状遺構（平面）



RD03陥し穴状遺構（平面）

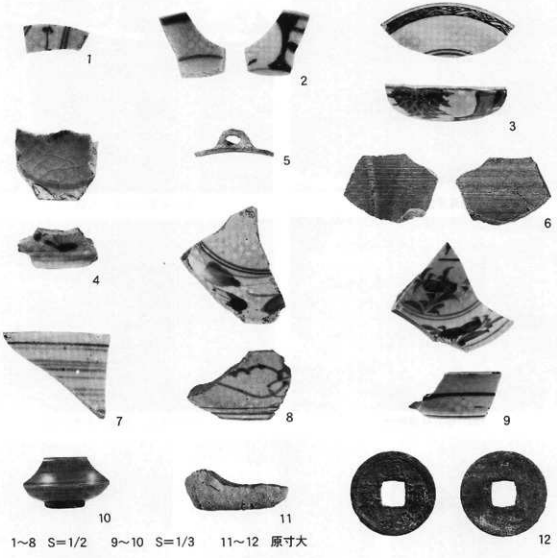
RD04陥し穴状遺構（平面）

RD02陥し穴状遺構（断面）

RD03陥し穴状遺構（断面）

RD04陥し穴状遺構（断面）

飯岡才川遺跡第２次調査検出遺構



1～8　S=1/2　　9～10　S=1/3　　11～12　原寸大

飯岡才川遺跡第２次調査出土遺構

報告書抄録

ふりがな	いわてけんまいぞうぶんかざいはっくつちょうさりゃくほう
書名	岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（平成10年度分）
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書
シリーズ番号	第　集
編著者名	畑南一郎　山口俊規
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡 11-185　　TEL（019)-638-9001
発行年月日	西暦1999年　3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
飯岡才川遺跡第２次調査	岩手県盛岡市飯岡第10地割字才川２－１－２ほか	03201	I.E16-2291	39度40分41秒	141度8分12秒	1998.4.8～6.15	5,600㎡	「環境保健センター（仮称）」建設に伴う緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
飯岡才川遺跡第２次調査	散布地	縄文・近世	陥し穴状遺構・土坑・溝状遺構・掘立柱建物跡・柱穴状ピット	土師器片１点 寛永通寶１枚 陶磁器片少量	

(44) 潰谷地遺跡

所　在　地　二戸市野々上字潰谷地７－３ほか
委　託　者　岩手県二戸地方振興局
事　業　名　一般県道上斗米金田一線改良工事
発掘調査期間　平成10年５月６日～６月30日
調査対象面積　1,000㎡
発掘調査面積　1,000㎡
遺跡番号・略号　ＩＥ88－1203・ＴＹＴ－98
調査担当者　相津吉彦・工藤　徹
協力機関　二戸市教育委員会

遺跡位置　　1：50,000 田子・三戸・浄法寺・一戸

1．調査に至る経過

本遺跡の発掘調査は、「一般県道上斗米金田一線　地方特定道路工事（北向工区）」の施工に伴う緊急発掘調査である。地方特定道路整備工事に関わる発掘調査の実施については、平成７年度に岩手県土木部二戸土木事務所（現二戸地方振興局土木部）から岩手県教育委員会に対して、平成７年６月12日付け二土第390号の文書によって照会したのが最初である。これに対して、岩手県教育委員会から平成７年７月11日付け教文326号の文書により、潰谷地遺跡の存在が明らかとなった。

平成９年度に入り、二戸土木事務所では平成９年８月１日付け二地土第813号の文書にて、平成９年度工事箇所の試掘調査を県教育委員会に依頼した。同年10月15日付け「教文第573号」の文書にて正式に発掘調査が必要と回答を受けた。二戸土木事務所では、平成9年度完了予定であった当該事業を平成10年度完了にし、現場は発掘調査期間を除いて工事施工を行うこととした。

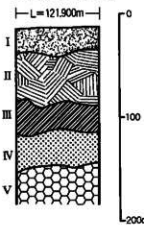
その後、県教育委員会より平成９年12月12日付けの文書により、同月17日に現地で協議・打ち合わせが行われ、平成10年３月11日に当埋蔵文化財センターと事業者の間で打ち合わせが行われた。

「地方特定道路整備事業に関わる埋蔵文化財の発掘調査」の実施については、平成９年度に岩手県土木部二戸土木事務所（現二戸地方振興局土木部）と岩手県教育委員会との協議により財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることとした。

2．遺跡の立地

本遺跡は、ＪＲ東日本東北本線金田一温泉駅の西約6.0kmに位置し、標高121～122mの海上川の左岸に発達した河岸段丘沿いに立地する。遺跡周辺の現況は畑地や宅地、河岸低地は水田として利用されている。

3．遺跡の基本層序



基本土層は以下の通りである。

第Ⅰ層　10YR　4/4　褐色の現表土でシルト、粘性・締まりとも弱く小礫を若干含む。

第Ⅱ層　10YR　3/1　黒褐色土　締まりは弱いがやや粘性があり、２～３cmの南部浮石粒が若干混入。

第Ⅲ層　10YR　7/8　黄橙色の中掘浮石層、粘性・締まりとも弱く、サラサラした触感。

第Ⅳ層　10YR　2/1　黒色土　やや粘性軽く締まる。

第Ⅴ層　10YR　6/8　明黄褐色の南部浮石層、粘性・締まりとも弱い。

4．検出された遺構

土坑３基と陥し穴状遺構１基が検出された。

〔１号土坑〕（第１図、写真図版１）調査範囲の中央に位置し、規模は、開口部径1.54m×1.43m、底部形1.94m、深さ0.98mであり、平面形は円形、断面形がフラスコ形を呈する。埋土は５層に細分され、主に、南部浮石が多量に混入する黒褐色土と黄褐色土により構成される。堆積状況が互層をなしていることから、人為的埋戻しの可能性がある。検出状況から中掘浮石の降下以前に構築された土坑である。遺物の出土は無い。規模や形態等の類例から推定して、縄文時代前期の遺構と考えられる。

〔２号土坑〕（第１図、写真図版１）調査範囲中央に位置し、規模は、開口部径1.28m×0.68m、深さ0.45

mであり、平面形が楕円形、断面形が浅鉢状を呈する。埋土は中掘浮石の混入した黒褐色土の３層からなり、自然堆積と推測される。検出面から中掘浮石降下以後に構築された土坑と思われる。遺物は出土していない。規模や形態等の類例から推定して、縄文時代中期以降の遺構と考えられる。

〔３号土坑〕（第１図、写真図版１）調査範囲中央に位置し、規模は、開口部径0.89m×0.83m、深さ0.62mの土坑であり、平面形が円形、断面形はビーカー形を呈する。埋土は南部浮石粒が混入した黒色土の単層であり、中掘浮石降下以前の構築と思われる。遺物は出土していない。規模や形態等の類例から推定して、縄文時代前期の遺構と考えられる。

〔陥し穴状遺構〕（第１図、写真図版２）調査範囲中央に位置し、中掘浮石層の上面で検出した。規模は開口部径1.68m×1.42m、深さ1.60mであり、平面形が円形、断面形はビーカー形を呈する。埋土は中掘浮石と南部浮石粒が混入した黒褐色シルトの単層であり、自然埋没の堆積状況を示す。検出状況から中掘浮石降下以後に構築された遺構と推測される。遺物の出土は無い。規模や形態等の類例から推定して、縄文時代後～晩期の遺構と考えられる。

５．出土遺物（第２図、写真図版２～３）

小コンテナ0.5箱分の縄文土器片や石器、古銭が出土した。全て遺構外からの出土である。Ⅰ層（盛土）～Ⅱ層から主に縄文後期の土器や近世の古銭が出土し、Ⅳ層からは主に縄文前期の土器が出土している。

〔土器〕

縄文土器の破片118点の内、縄文前期が多く出土し、後～晩期が若干量出土している。No.１～６は胎土に多量の繊維を混入する土器であり、主に、Ⅳ層中位から出土している。時期的には前期初頭の早稲田Ⅵ式の範疇に属する可能性が高い。No.７～９は、Ⅱ層から出土しており、器面の縄文や胎土から後期の土器片と思われる。

〔石器〕

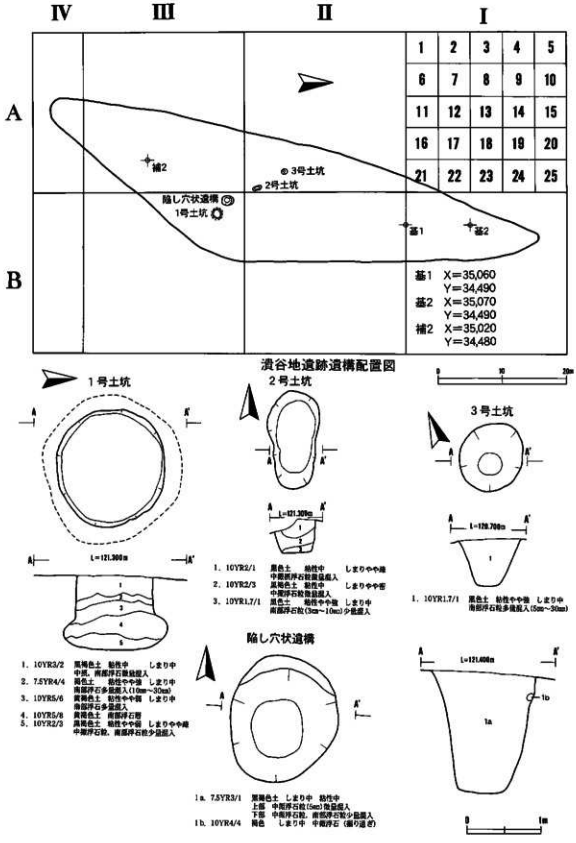
石器は６点出土している。内訳は、石鏃１点、石匙１点、石箆１点、削掻器２点、敲石１点である。No.２～４はⅠ層から、No.１、５、６はⅣ層から出土している。

〔古銭〕

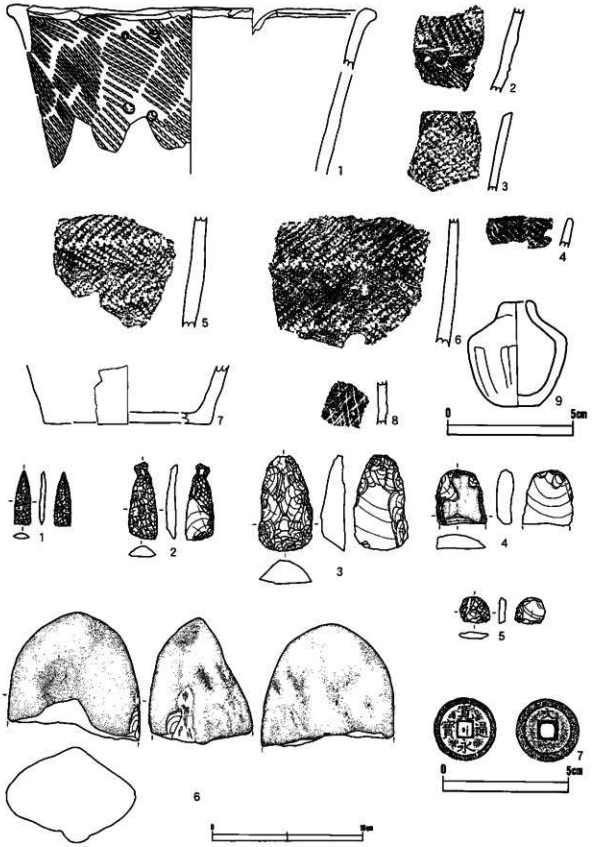
No.７はⅠ層から江戸時代の寛永通寶が出土した。

６．まとめ

今回の発掘調査では住居跡の検出はなかったものの、土坑の検出と遺物が出土したことにより隣接地域に集落の存在を推測させるほか、陥し穴状遺構の検出から一時期は狩り場として利用されていたことが明らかとなった。遺構の時期は、縄文時代前期～晩期までのものが検出されている。遺物は主に、前期のものが出土している。今後、周辺地域の調査によって当遺跡の性格と広がりが明確にされるものと期待される。



第１図　潰谷地遺跡遺構配置図、１～３号土坑・陥し穴状遺構

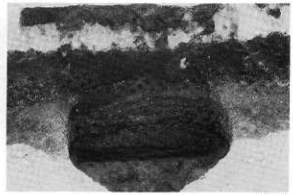


第２図　潰谷地遺跡出土遺物

調査区近景

基本土層

1号土坑　平面



断面

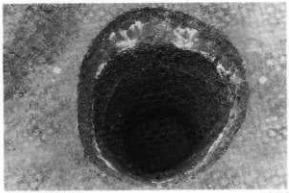
2号土坑　平面

断面

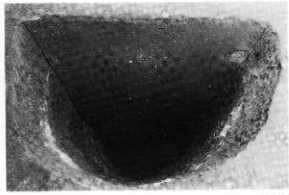
3号土坑　平面

断面

写真図版１　潰谷地遺跡基本土層・検出遺構



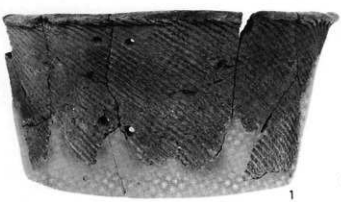
陥し穴状遺構　平面

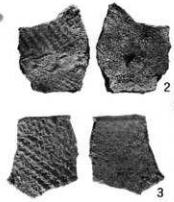


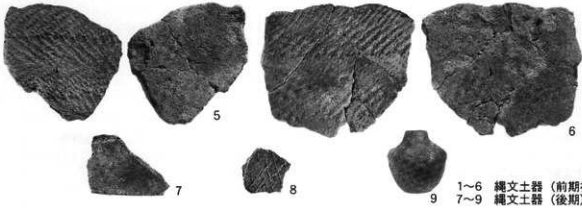
断面

調査終了時全景

土器出土状況

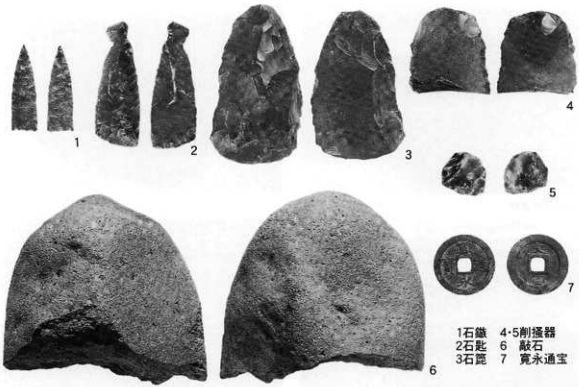






1～6　縄文土器（前期初頭）
7～9　縄文土器（後期）

写真図版２　潰谷地検出遺構・出土遺物



写真図版3　漬谷地検出遺構・出土遺物

報告書抄録

ふりがな	いわてけんまいぞうぶんかざいはっくつちょうさりゃくほう
書名	岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（平成10年度）
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書
シリーズ番号	第　集
編著者名	相津吉彦
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11-185　TEL (019)-638-9001
発行年月日	西暦1999年　3月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
漬谷地遺跡	岩手県二戸市 野々上字漬谷地 7－3ほか	03213	IE88- 1203	40度 18分 21秒	141度 14分 21秒	1998. 5.6～6.30	1,000㎡	「一般県道上斗米金田一線工事」に伴う緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
漬谷地遺跡	散布地 狩り場	縄文時代 前期	土坑3基 陥し穴状遺構1基	縄文土器118点 剥片石器5点 礫石器1点 古銭1点	

(45) 川袋遺跡（かわぶくろ）

所在地	二戸市福田字川袋12－1ほか
委託者	岩手県二戸地方振興局
事業名	主要地方道二戸安代線
発掘調査期間	平成10年4月9日～5月29日
調査対象面積	1,965㎡
発掘調査面積	1,965㎡
遺跡番号・略号	ＪＥ18－1026・ＫＦ－98
調査担当者	中村直美・鈴木浩二・平めぐみ
協力機関	二戸市教育委員会

遺跡位置　　1：50,000 浄法寺

1．調査に至る経過

川袋遺跡は「主要地方道二戸安代線緊急地方道整備事業」の工事に伴って発掘調査を行うことになった。当事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、岩手県二戸地方振興局土木部から、平成９年11月21日付け二地土第1294号で「緊急地方道整備事業における埋蔵文化財の試掘調査について」の文書で、岩手県教育委員会に試掘調査を依頼した。岩手県教育委員会は平成９年12月15日に試掘し、その調査の結果を「平成９年12月18日付け教文第785号緊急地方道整備事業における埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」により回答し、大向遺跡、桑木田遺跡の範囲内であることが付記された。その後似鳥トンネルの施工に伴い、新に二戸地方振興局土木部より平成９年12月25日付け二地土第1,465号で「緊急地方道整備事業における埋蔵文化財の発掘調査について」の文書で岩手県教育委員会に調査の依頼をした。岩手県教育委員会は、平成10年２月３～４日にかけて調査した結果を平成10年２月16日付け教文第952号「主要地方道二戸安代線緊急地方道整備に係る埋蔵文化財試掘調査について（回答）」により二戸地方振興局土木部に回答し、川袋遺跡の範囲内であることが付記された。

2．遺跡の立地

川袋遺跡は八戸自動車道浄法寺インターチェンジの北東約4.8kmに位置し、北流する安比川の左岸により形成された谷底平野上に立地する。遺跡の標高は約152m、安比川との比高差は約10m、現状は畑地である。

3．遺跡の基本層序

本遺跡の基本土層は次のとおりである。

第Ⅰ層　10YR3/2黒褐色土　層厚20～30cm　畑の耕作土。

第Ⅱ層　10YR3/3黒褐色土　層厚30～40cm　10YR4/4褐色土を上層に含む。粘性・しまりなし。

第Ⅲ層　7.5YR3/2黒褐色土　層厚10～20cm　少量の褐色粒含む。粘性・しまりなし。

第Ⅳ層　2.5YR6/4にぶい黄土　層厚10～30cm　十和田ａ火山灰。粘性なし、しまりあり。

第Ⅴ層　10YR2/1黒色土　層厚20～40cm　中掘火山灰粒含む。粘性あり、しまりあり。

第Ⅵ層　10YR4/4褐色砂質シルト　層厚40cm　10YR3/2黒褐色シルトを含む。粘性・しまりあり。

第Ⅶ層　10YR4/3にぶい黄褐色シルト　粘性・しまりあり。

4．検出された遺構

検出された遺構は、縄文時代の土坑１基、溝状遺構4条、時期不明の焼土遺構１基、柱穴状小ピット316基、中世の墓坑１基である。調査区内からは住居跡等の直接生活に関わる遺構は検出されなかった。

＜１号土坑＞　調査区北西部、Ⅴ層中より検出した。平面形はゆがんだ長楕円形である。径は6.12×2.73m、深さは38cmを測り、断面形は皿形を呈する。埋土はシルト質土で構成され層によっては水性堆積が見られる。底面より折返し口縁・体部に撚糸縄文を伴う縄文時代後期初頭と思われる土器片を出土している。(第３図１)

＜１号焼土遺構＞　調査区北西部、Ⅴ層上面より検出した。平面形は縦長不正楕円形を呈する。径は4.50×2.03m、深さ５～20cmを測る。埋土は２層に細分され火山灰を伴わない黒色土の下に明黄褐色の焼土が広がるものである。壁はⅤ層に形成され、底面からの凹凸をもって立ち上がる。出土遺物はない。

＜１号溝状遺構＞　調査区中央部西側、Ⅴ層上面より検出した。東西に伸びており、規模は長さ8.12m、上端幅40～52cm、下端幅10～23cm、深さ10～27cmを測る。埋土は黒色シルトを主体とする。時期決定になりうる遺物の出土はない。

＜２号溝状遺構＞　調査区中央部、Ⅴ層上面西側より検出した。東西に伸びており、規模は長さ5.93m、上端幅40～56cm下端幅８～34cm、深さ10～22cmを測る。埋土は黒色シルトを主体とする。遺物の出土は

ない。

＜３号溝状遺構＞ 調査区北西側、Ⅴ層上面より検出した。東西に伸びており、規模は長さ10.46m。上端幅30～50cm、下端幅18～26cm、深さ20～23cmを測る。埋土は黒色シルトを主体とし下層に褐色シルトを含む。遺物の出土はない。

＜４号溝状遺構＞ 調査区北西側、Ⅴ層上面より検出した。東西に伸びており、規模は長さ4.45m、上端幅15～36cm、下端幅５～20cm、深さ24cmを測る。埋土は黒色シルトを上層に含む褐色シルト主体を主体とする。遺物の出土はない。

＜１号墓坑＞ 調査区北側、Ⅳ層上面より検出した。平面形は不整円形を呈し、規模は67×75cm、深さ７～10cm、上部が掘削を受けているため深さは確定値ではない。埋土は炭化物が含まれた黒色土で、破砕した骨片、皇宋通寶・至和元寶・元豊通寶各１枚、頭部がＬ字形に折り曲げられた折頭釘２本が出土した。(第３図15～19)

出土遺物より中世の火葬墓と思われる。

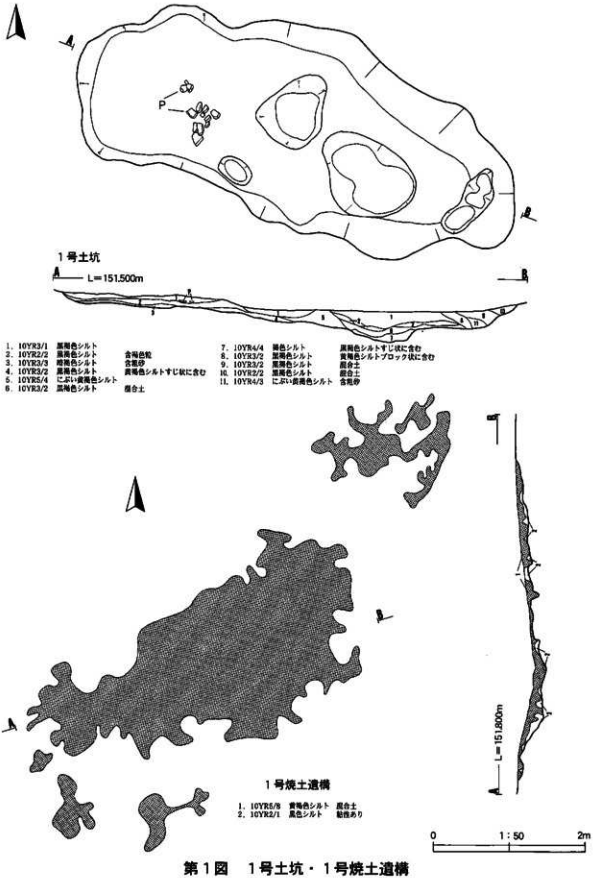
＜柱穴状小ピット＞ 調査区全域、Ⅲ層、下位からⅣ層上面より316基を検出した。分布は調査区北西部に集中し、その他の地区からは検出されなかった。規模は15cm～28cm・深さ20cm前後のものが最も多い。埋土は十和田ａ火山灰を含む黒褐色の単層、黒褐色と暗褐色の混合土で構成される。埋土中に伴う遺物はなく、時期及び用途については不明である。

＜出土遺物＞ 遺構内は１号土坑の第１図１・１号墓坑15～19の６点、その他は遺構外より13点出土した。１は１号土坑より出土した縄文時代の深鉢土器である。色調は暗褐色を呈し、胎土には金雲母・砂粒を含んでいる。口縁部は貼り付けによる二重口縁を呈しＲ１段の撚糸文が横回転で施文されている。体部全体にも同様の撚糸が斜回転で施文されている。２はにぶい褐色を呈する深鉢土器で、胎土に荒い粒子を含む。文様は胴部上半に沈線で入組曲線文、下半にＲＬ横単節縄文が施される。３は甕形土器で胴部上半に変形工字文をもち文様の単位毎に二個一対の粘土瘤をもつ。下半にはＬＲ単節縄文が施される。色調は橙色を呈し焼成は良好である。４・５はＲ１段撚糸文が施される。６は波状口縁の破片で、縦位と口縁に添って平行に３本の細隆帯が施されている。７・８はＲＬ単節縄文が施された破片である。９は平行する沈線文の中に細かいＬＲ単節縄文が施される。10・11はＬＲ単節縄文が施された破片で、10についてはは口縁に小波状の刻目が入り平行沈線が巡る。12はにぶい橙色を呈し外面はヨコナデ＋ケズリ、内面はナデ調整される。13は12と同一個体と思われ、外面ケズリ、内面ナデ調整される。14は口縁部破片で内外面共にヨコナデ調整される。色調はにぶい黄褐色を呈し胎土に砂粒を含む。15～17は、11世紀代初鋳の北宋銭で、火熱により変形している。15は皇宋通寶、16は至和元寶、17は元豊通寶である。18・19は頭部がＬ字形に折りまげられている鉄製の折頭釘である。

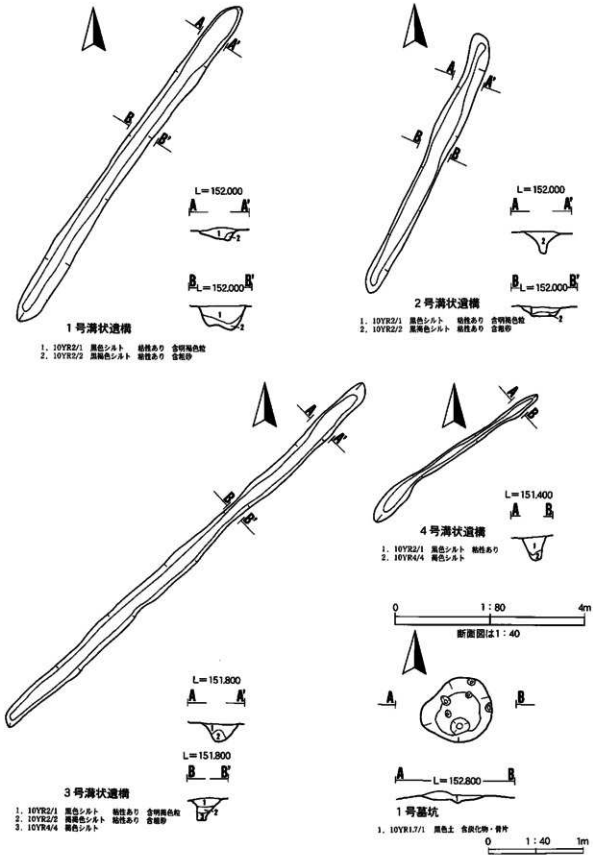
５．まとめ

調査区は安比川流域にあり十和田ａ降下火山灰の降下前後にその河川の氾濫を受けた痕跡が見られる。縄文時代後期から弥生時代の始めにかけてと思われる土器片が見つかっているが、遺物・遺構ともに非常に少なく立地環境から見ても直接生活に関わった場ではないものと思われる。時期不明とした柱穴状小ピット群には明確な配置プランは確認できなかった。

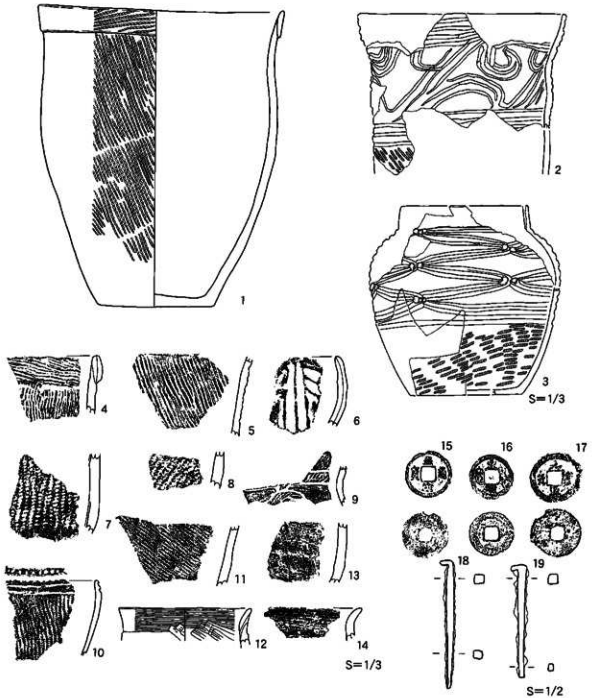
なお、川袋遺跡に関わる報告はこれをもって全てとする。



第１図　１号土坑・１号焼土遺構

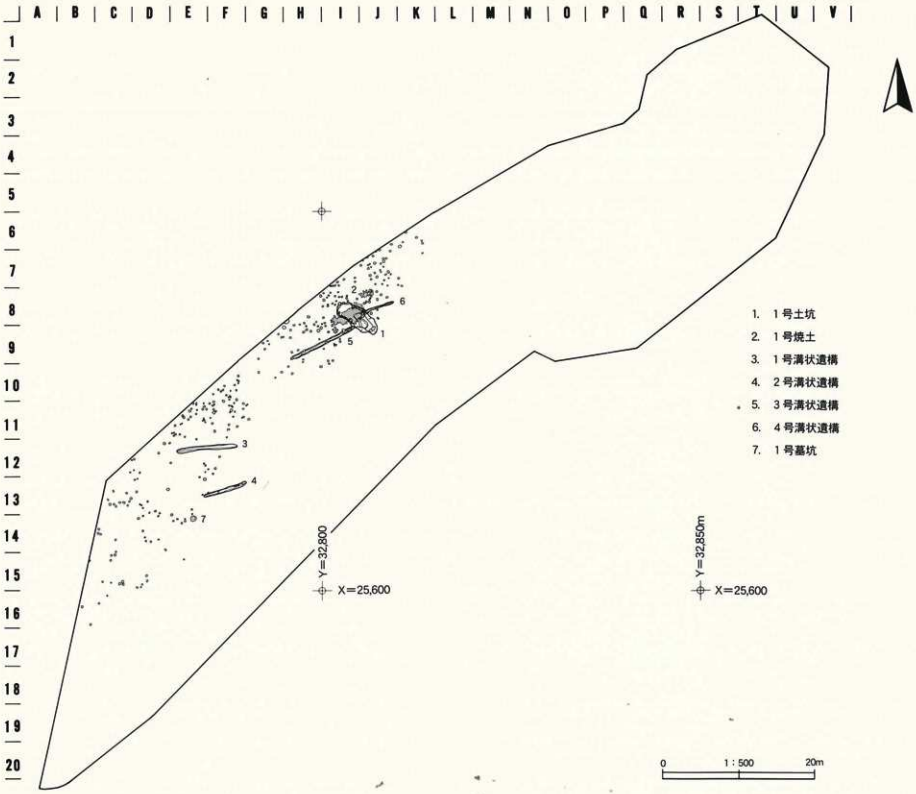


第２図　１～４号溝状遺構・１号墓坑



No.	出土位置	器種	部位	層位	特徴	時期
1	114ｴ3L・上層	深鉢	胴　部	R1段部角	器形：やや胴部ほる　口縁：貼りつけ一重口縁　胎土：金雲母・砂粒含む	縄文後期初頭
2	8M・V層上部	深鉢	ロー胴部	凡	器形：口縁部外張　文様：北陸で入組曲線文が描される　胎土：砂粒含む やや粗	縄文後期初頭
3	8L・V層上部	壺	略完形	LR	文様：器形上半全体3段に東屋し単位毎に二個一対の粘土貼をもつ　胎土：粗	弥生前期
4	8L・V層上部	深鉢	口縁部	R1段部角	口縁：貼りつけ一重口縁　胎土：金雲母・砂粒含む　5と同一個体か？	縄文後期初頭
5	7M・V層上部	深鉢	胴上部	R1段部角	胎土：金雲母・砂粒含む　4と同一個体か？	縄文後期初頭
6	南西側区側・VI層	深鉢	口縁部		口縁：波状・粗拓と口縁に沿って平行に沫の粗縄な細い縄帯をもつ　胎土：砂粒・海綿骨片いるみやや粗	縄文後期初頭
7	8M・V層上部	深鉢	胴　部	凡	地文のみ　胎土：砂粒・海綿骨針含む	縄文後期初頭
8	8K・V層上部	深鉢	胴　部	凡	地文のみ　胎土：砂粒・海綿骨針含む	縄文後期初頭
9	8M・V層上部	深鉢	胴　部	LR	体部：地文縄文後沈線により区画文を施き区画内を風消す　胎土：金雲母・海綿骨針含む	縄文後期初頭
10	北東側区側・V層	鉢	口縁部	LR	口縁：小波状の肥厚を持つ　平行沈線が走る　胎土：砂粒・海綿骨針含む	縄文後期
11	国道交叉側西部・VI層	深鉢	胴　部	LR	胎土：金雲母・海綿骨針含む	縄文後期
12	9I・V層	壺	口縁部		口縁：内外面ヨコナデ　体部：外面ケズリ・内面ナデ　胎土：砂粒含む　13と同一個体か？	平安
13	8L・V層上部	壺	体　部		体部：外面ケズリ・内面ナデ　胎土：砂粒含む　12と同一個体か？	平安
14	南側区側・V層	壺	口縁部		口縁：内外面ヨコナデ　胎土：砂粒含む	平安

第３図　出土遺物・土器観察表



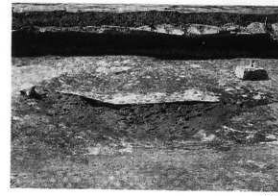
第４図　川袋遺跡遺構配置図

調査区全景

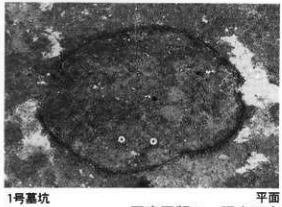
1号土坑　平面

断面

1号焼土遺構　平面



断面



1号墓坑　平面

断面

写真図版 1　調査区全景・土坑・焼土遺構・墓坑

1号溝状遺構　平面

断面

2号溝状遺構　平面

断面

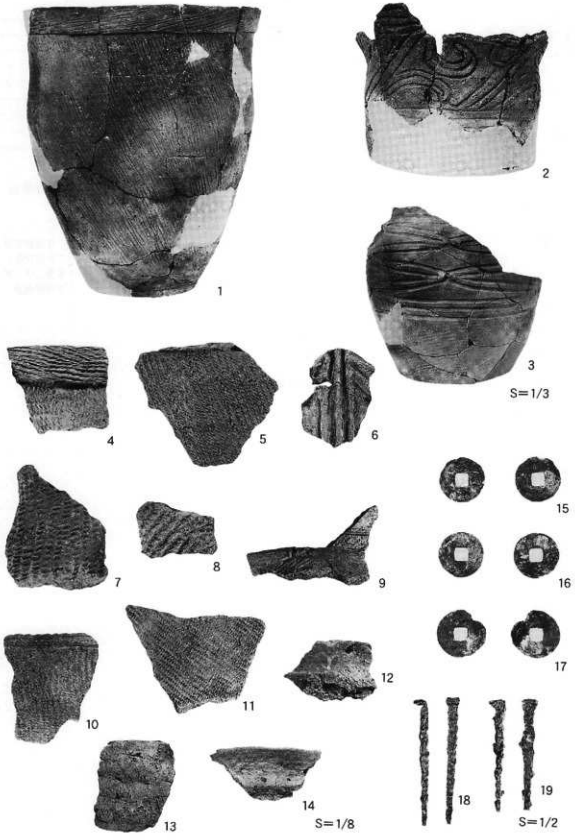
3号溝状遺構　平面

断面

4号溝状遺構　平面

断面

写真図版２１～４号溝状遺構



写真図版3　出土遺物

報告書抄録

ふりがな	いわてけんまいぞうぶんかざいはっくつちょうさりゃくほう
書名	岩手県埋蔵文化財発掘調査略報
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書
シリーズ番号	第283集
編著者名	平めぐみ　中村直美
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11-185　TEL (019)-638-9001
発行年月日	西暦1999年　3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
川袋遺跡	岩手県二戸市福田字川袋12-1ほか	03213	JE18-1026	40度15分12秒	141度15分58秒	1998.4.9～5.29	1,965㎡	「主要地方道二戸安代線」事業に伴う緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
川袋遺跡	散布地	縄文時代後期～弥生時代初頭	土坑・焼土遺構・墓坑 溝状遺構	縄文・弥生時代の土器片 古銭・折頭釘	

(46) 袖の沢Ⅴ遺跡

所　在　地　二戸郡浄法寺町字袖の沢24番ほか
委　託　者　岩手県二戸地方振興局
事　業　名　中山間地域総合整備事業
発掘調査期間　平成10年6月1日～7月17日
調査対象面積　1,920㎡
発掘調査面積　1,920㎡
遺跡番号・略号　ＪＥ35－2363・ＳＳＶ－98
調査担当者　杉沢昭太郎・晴山雅光・平澤里香
協力機関　浄法寺町教育委員会

遺跡位置　　1：50,000 浄法寺

Ⅰ．調査に至る経過

袖ノ沢Ⅴ遺跡は、平成８年度に新規採択された「中山間地域総合整備事業御浄地区」に関連する遺跡である。この事業に関連する遺跡の取扱いについては、岩手県教育委員会文化課と二戸地方振興局二戸土地改良

事業所との間で協議がなされ、試掘調査は文化課が実施することとし、発掘調査は文化課の調整によって財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの事業とされた。

この間における経過は次のとおりである。

平成10年度に発掘調査された範囲についての経過は、二戸土地改良事業所から県教育委員会あて平成９年７月２日付「二土地第364号」で事業が照会され、この回答は平成９年７月30日付「教文第391号」でなされており、試掘調査は平成９年９月４日と11月７日の２回実施された。

Ⅱ．遺跡の立地と環境

１．遺跡の立地

袖ノ沢Ⅴ遺跡は福庭岳（標高1,078m）の山裾部の山麓地緩斜面にのる。遺跡の南側は多々良沢が東流し、北側も岡本川の支流である小規模な沢によって開析されている。遺跡は、多々良沢と岡本川に注ぐ小さな沢に挟まれた台地の上に立地しており、範囲は東西280m、南北190mを測る。遺跡付近の標高は321m～327mで、西から東へ傾斜しており、調査区の西端と東端では約６mの比高差がある。多々良沢との比高差は約25mで、遺跡の現況の土地利用は畑地である。

２．基本土層

調査区が東西に細長いことから、東端・中央・西端でそれぞれ土層の確認をおこなった。各地点で各層に若干の差はあっても基盤はⅤ層であることは共通している。遺跡の現況は畑地であり、調査区は畑地造成や農道によって削平や攪乱を受けている。現況が畑地であったところではⅣ層、農道のころに至ってはⅤ層まで削平を受けている。また調査区を水道管埋設溝が東西に横断している。このような状況の中で検出された遺構は上部を削られている。遺構検出面は、時期差にかかわらずⅤ層である。以下に各層の概略を述べる。

Ⅰ層　10YR2/3　黒褐色土　現表土である。層厚20～30cm。粘性弱。締まりやや有り。

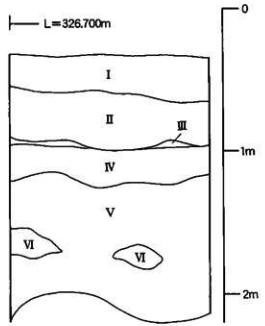
Ⅱ層　10YR2/1　黒色土　層厚20～40cm。灰白色浮石粒（十和田ｂ火山灰）を微量含む。遺物を包含する。

Ⅲ層　2.5YR6/4　にぶい黄色火山灰　層厚０～10cm。中振浮石層と思われる。粘性弱。締まりやや有り。調査区内では低位面に比較的よく残っているがそれでも層をなす程は堆積していない。

Ⅳ層　10YR2/2　黒褐色土　層厚20～30cm。粘性やや有り。締まっている。

Ⅴ層　10YR4/6　褐色土　地山（層厚60cm以上）。黄褐色浮石粒を微量含む。粘性やや有り。締まっている。遺構検出面である。

Ⅵ層　５ＹＲ5/8　明赤褐色浮石　粘性なし。浮石は径１cm未満、本遺跡では部分的に堆積している。二ノ倉火山灰と思われる。



基本層序

Ⅲ. 検出された遺構と遺物

1．遺構

今回の調査で検出された遺構は土坑２基、溝跡２条である。

１号土坑（第４図）

調査区西側の平坦面、本遺跡の中でも西端に位置する。平面形は円形を基調とし、規模は開口部で0.9×0.8mを測る。断面形は袋状を呈し、深さは32cm程である。埋土は黒褐色土を主体とし、自然堆積の様相を呈する。出土遺物はなく詳細は不明であるが、縄文時代の貯蔵穴ではないかと思われる。

２号土坑（第４図）

調査区西端の平坦面、本遺跡の中でも西北端に位置する。平面形は不整な長円形を呈し、検出面での規模は1.5×1.1mである。深さは40cm程で、底面は幾分凹凸がある。埋土は自然堆積のと思われ、十和田ａ火山灰が７～８cm程の厚さで堆積している。出土遺物はなく詳細は不明であるが、10世紀前半より以前の遺構と思われる。

１号溝跡（第３図）

調査区の北東側を縦断するように検出された。遺跡の中でも北東端に位置していると思われる。長さは検出部分で74m、幅は40～80cm、深さは50cm前後であるが、南東側は調査区外へ、北西側も削平されていないければ更に延びると思われる。埋土は大きく２層に分けられ、上位は黒褐色土、下位は暗褐色土が堆積する。水の流れた痕跡は確認できなかった。出土遺物はなく時期不明である。

２号溝跡（第３図）

本溝は調査区の東端で検出された。１号溝跡から枝分かれし調査区外に延びている。本遺構の方が古い。検出部分での長さは5.3m、幅70cm前後、深さは30～40cm程である。埋土は２層に大別され上位は黒褐色土、下位は暗褐色土を主体とする。水の流れた痕跡は認められなかった。出土遺物はなく詳細は不明である。

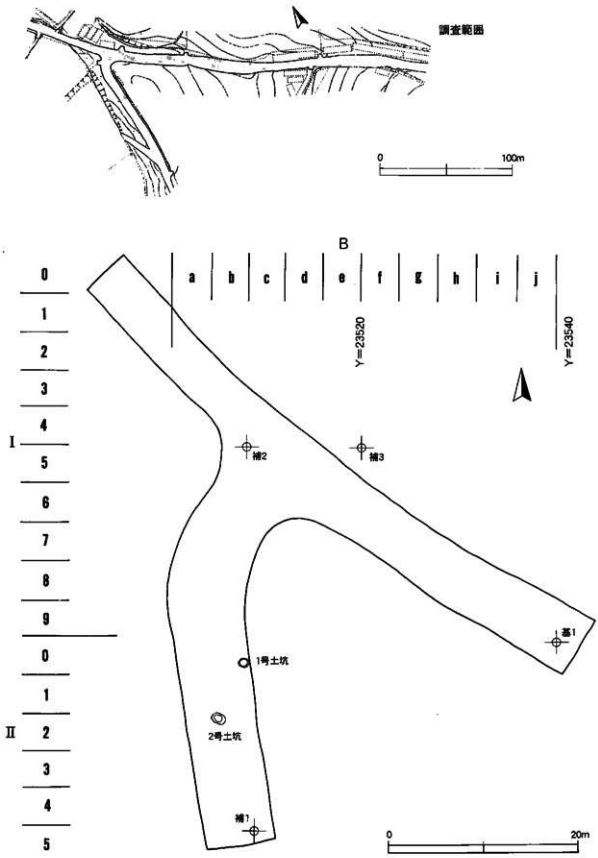
2．出土遺物（第４図）

出土遺物はすべて遺構外出土のもので、コンテナ（40×30×18cm）１箱である。１は縄文時代晩期の深鉢で小山形口縁に口縁部は無文である。２の底部には穿孔をもつ。１と２は同一個体の可能性が高い。３～14は弥生土器である。３には２条の沈線と貼瘤が７単位つく。４～７は口縁部破片である。７には沈線と交互刺突文が施文される。８～11は胴部破片で地文は撚糸文である。12～14は底部破片である。12の底部には交互刺突文、底面には沈線文が施される。文様・胎土・色調等から７～12は同一個体と思われ、弥生時代後半に位置づけられる。

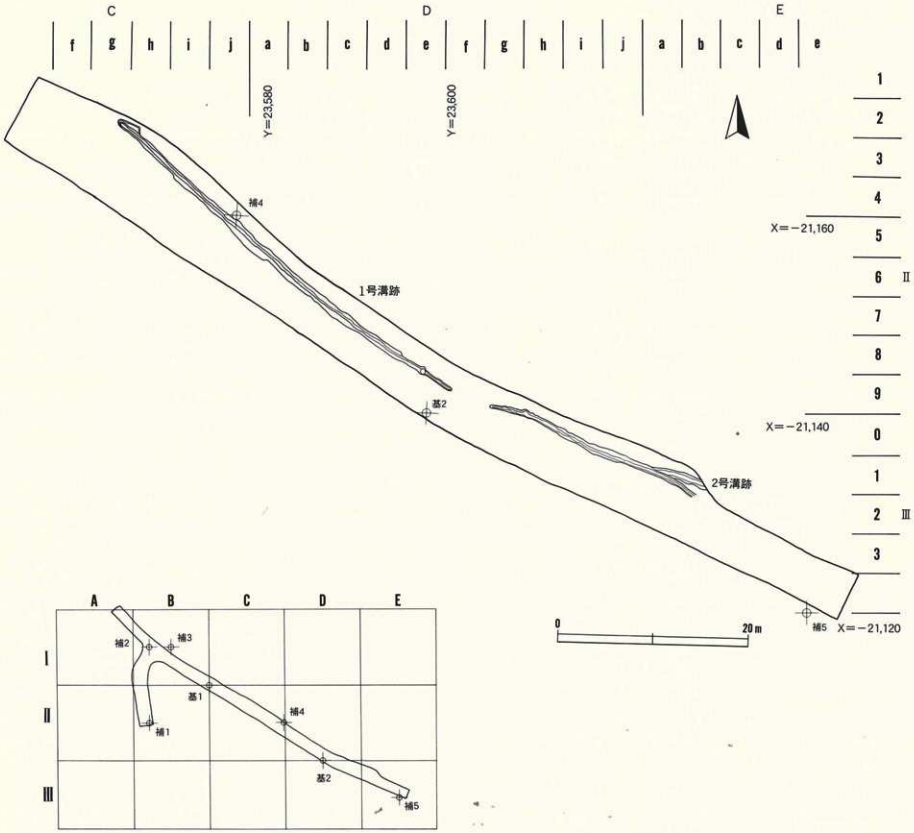
Ⅳ. まとめ

今回の調査は袖ノ沢Ⅴ遺跡の北端及び北東端に幅約７mのトレンチを入れたかたちとなった。検出された遺構が土坑２基と溝跡２条に留まったのも遺跡の縁辺部を調査したことを反映していると思われる。出土した土器をみると弥生時代に属することから、該期の集落跡の存在が想定される。この時期の遺跡は町内では調査事例が殆どなく、量的には少ないが貴重な資料を提供できたと思われる。

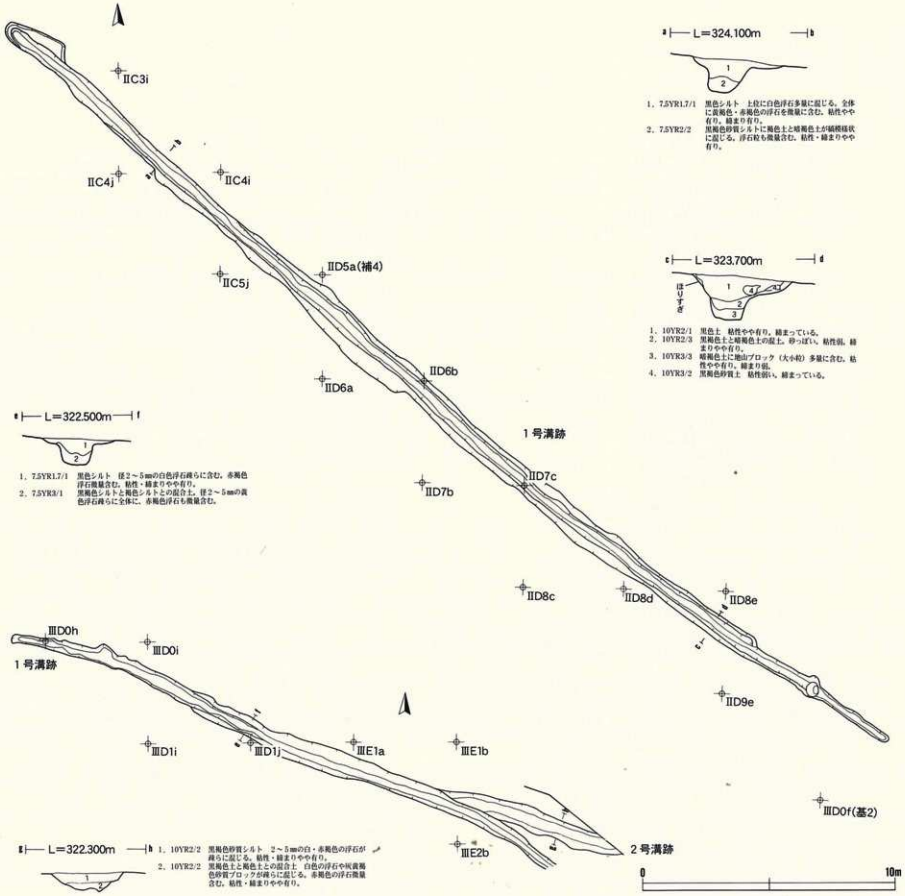
なお、袖ノ沢Ⅴ遺跡に関する報告は、これをもって全てとする。



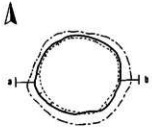
第１図　袖ノ沢Ⅴ遺跡遺構配置図（１）



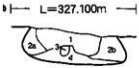
第２図　袖ノ沢Ⅴ遺跡遺構配置図（２）



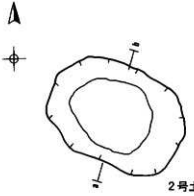
第３図　袖ノ沢Ⅴ遺跡溝跡



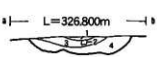
1号土坑



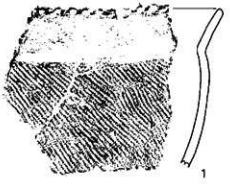
1号土坑
1. 7.5YR2/2 黒褐色砂質シルト 炭粒・浮石粒含む 粘性やや有り 締まり弱
2a. 7.5YR2/2 黒褐色シルト 炭粒・浮石粒含む 粘性やや有り 締まり弱
2b. 7.5YR3/3 暗褐色砂質シルト 炭粒・浮石粒含む 粘性やや有り 締まり弱
3. 7.5YR3/3 暗褐色砂質シルト 粘性やや有り 締まり弱
4. 7.5YR3/4 暗褐色砂質シルト 浮石粒含む 粘性やや有り 締まり弱

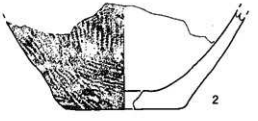


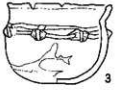
2号土坑

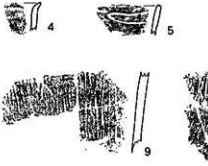


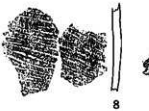
2号土坑
1. 7.5YR1.7/1 黒色シルト 炭粒・浮石粒等らに含む 灰褐色小ブロック含じる 粘性やや有り 締まり強
2. 7.5YR3/1 黒褐色砂質シルト 浮石粒等らに含む 灰褐色小ブロック含じる 粘性やや有り 締まり強
3. 7.5YR5/2 灰黄色砂質シルト 粘性強 締まり強 4層との境に白色浮石多量に含む
4. 10YR3/3 暗褐色砂質シルト 浮石粒等らに含む

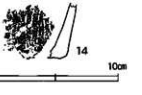












袖ノ沢Ⅴ遺跡土坑及び出土遺物

調査区近景

1号土坑平面

1号土坑断面

2号土坑平面

2号土坑断面

袖ノ沢Ⅴ遺跡検出遺構（1）

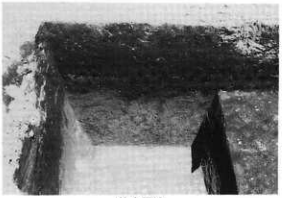
1・2号溝跡

1号溝跡断面

2号溝跡断面

遺物出土状況

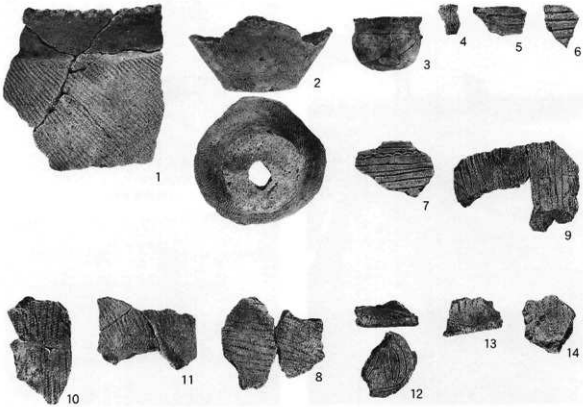
遺物出土状況



基本層序

作業風景

袖ノ沢Ⅴ遺跡検出遺構（2）



袖ノ沢Ⅴ遺跡出土遺物

報告書抄録

ふりがな	いわてけんまいぞうぶんかざいはっくつちょうさりゃくほう
書名	岩手県埋蔵文化財発掘調査略報
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書
シリーズ番号	第311集
編著者名	杉沢昭太郎　高橋與右衛門
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11-185　TEL (019)-638-9001
発行年月日	西暦1999年　3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
袖ノ沢Ⅴ遺跡	岩手県二戸郡浄法寺町字袖ノ沢24番ほか		JE35-2363	40度11分36秒	141度6分21秒	1998.6.1～7.17	1,920㎡	中山間地域総合整備事業に伴う緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
袖ノ沢Ⅴ遺跡	集落	弥生時代	土坑2基 溝跡2条	弥生土器	

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所　　長　佐藤　基
副 所 長　伊藤直司

〔管理課〕

管理課長　澤田　寛
主　　任　立花多加志
主　　事　千葉勝彦
嘱　　託　藤島恵子
〃　　新田トヨ

〔調査課〕

調査課長　小田野哲憲
課長補佐　高橋興右衛門
〃　　中川重紀
主任文化財専門調査員　佐々木清文
〃　　高橋義介
〃　　酒井宗孝
文化財専門調査員　古館貞身
〃　　小笠原健一郎
〃　　中村比呂志
〃　　工藤　徹
〃　　小山内　透
〃　　金子佐知子
〃　　岩渕　計
〃　　菊地榮蔣
〃　　宮本節子
〃　　下田隆衛
〃　　早坂　悟
〃　　鳥居達人
〃　　濱田　宏
〃　　金子昭彦
〃　　晴山雅光
〃　　木戸口俊子
〃　　相津吉彦
〃　　阿部勝則
〃　　羽柴直人
文化財専門調査員　星　雅之
〃　　高木　晃
〃　　佐々木　琢
〃　　半澤武彦
〃　　朝倉雄大
〃　　杉沢昭太郎
〃　　溜　浩二郎
〃　　菊池貴広
〃　　村上　拓
〃　　中村直美
期限付専門職員　鈴木浩二
〃　　鈴木　聡
〃　　平澤里香
〃　　山口俊規
〃　　熊谷佳恵
〃　　佐々木志麻
〃　　佐藤綾子
〃　　玉山健一
〃　　中野敦夫
〃　　布谷義彦
〃　　松川由次
〃　　七田芳直
〃　　鈴木見誌
〃　　平　めぐみ
〃　　柴田慈幸
（6月退職）

〔資料課〕

資料課長　佐々木嘉直
文化財専門調査員　松尾芳幸

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第311集

岩手県埋蔵文化財発掘調査略報

(平成10年度分)

印刷　平成11年3月19日

発行　平成11年3月25日

発行　㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番

TEL (019) 638-9001

印刷　株式会社　杜鵑印刷

〒020-0122 盛岡市みたけ2-22-50

電話 (019) 641-8000

FAX(019) 641-8085

©(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1999